

将監塚遺跡

— 第4次調査 —

市道第7557号線埋蔵文化財保存事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2023

本庄市教育委員会

しょう げん づか い せき
将 監 塚 遺 跡

— 第 4 次 調 査 —

市道第 7557 号線埋蔵文化財保存事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

本庄市教育委員会

序

埼玉県の北西部に位置する本庄市は、江戸時代には利根川の水運や中山道の陸運が活発となり、交通の要衝として栄えた地域ですが、こうした特徴は地形などの影響を受けており、先史時代や古代も同様でした。

本将監塚遺跡にあっては、過去の調査において、東北地方や中部地方の影響を受けた縄文土器や、東海地方・大和地方・甲斐地方の特徴を有する土師器が出土しております。このことから、この地域がはるか昔から、文化や情報の交流の拠点であったことに思いを馳せることができます。

本書に報告する将監塚遺跡第4次調査においても、前述のような縄文土器をはじめとする、大量の土器が出土しました。また、古墳時代後期から平安時代の住居跡や溝跡が見つかっており、計画的に営まれた大集落の様相の一端をうかがい知ることができました。

今後は、本書が学術的な資料としてはもとより、市民の学びの場で広く活用されるものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にあたり、多大な御協力を賜りました上武産業株式会社、及び関係諸機関並びに周辺地域関係者の皆様に対しまして、心から御礼申し上げます。

令和5年12月

本庄市教育委員会

教育長 下野戸 陽子

例言

1. 本書は、埼玉県本庄市共栄116番他先に所在する将監塚遺跡における第4次調査の報告書である。
2. 発掘調査は本庄市都市整備部道路整備課の道路改良工事に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施し、発掘調査支援に関わる業務を株式会社シン技術コンサルに委託した。
3. 発掘調査面積は、140.3㎡である。
4. 発掘調査期間および整理期間は、以下の通りである。
発掘調査 令和5年3月6日 から 令和5年4月19日 まで
整理作業 令和5年4月20日 から 令和5年12月20日 まで
5. 本報告にかかる発掘調査・整理作業及び、報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は、下記のとおりである。

将監塚遺跡第4次発掘調査組織（令和4・5年度）

主体者 本庄市教育委員会 教育長 下野戸 陽子
事務局 事務局長 高橋 利征（令和4年度）
事務局 事務局長 笠原 栄作（令和5年度）

文化財保護課

課長 折茂 勝彦
課長補佐兼文化財保護係長 細野 房保
課長補佐兼本庄早稲田の杜ミュージアム係長 山田 修（令和4年度）
課長補佐兼本庄早稲田の杜ミュージアム係長 橋爪 里佳（令和5年度）
課長補佐兼埋蔵文化財係長 的野 善行（令和5年度）
埋蔵文化財係長 的野 善行（令和4年度）
主任 鈴木 まゆみ
主任 水野 真那（令和5年度）
専門員 徳山 寿樹
主事 福岡 佑斗
主事 水野 真那（令和4年度）
会計年度任用職員 中嶋 淳子、矢内 勲、新井 嘉人、落合 智恵美、倉林 美紀、黒澤 恵、高木 由香里（令和4・5年度）
栗原 正実、渋谷 裕子、星野 八重子（令和4年度）
立石 佳代子（令和5年度）

6. 発掘調査は的野善行・水野真那（本庄市教育委員会）が担当し、現地調査は小林一弘・植竹竜也（株式会社シン技術コンサル）が従事した。また、発掘調査に関わる基準点測量、遺構測量、写真測量は須藤恭子（株式会社シン技術コンサル）が行った。
7. 本書の執筆は、第Ⅰ章第Ⅰ節を水野、第Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ章までを植竹、第Ⅴ章を竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当し、編集は坂本勝一・新井かをり・馬淵恵美子（株式会社シン技術コンサル）が行った。
8. 本書の自然科学分析（リン・カルシウム分析）は、株式会社パレオ・ラボに依頼した。
9. 本遺跡から出土した遺物及び、本書に掲載した遺構・遺物の実測図・写真、その他本報告に関する資料は本庄市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査及び本書作成に当たって、下記の方々、諸調査機関よりご助力・ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称省略）

赤熊 浩一、高橋 龍三郎、横山 未来、恋河内 昭彦、児玉郡美里町教育委員会、
児玉郡神川町教育委員会、児玉郡上里町教育委員会、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、
埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、上武産業株式会社、早稲田大学考古資料館

凡 例

1. 本書に使用した地図類は以下の通りである。
第1図：堀口万吉 1986「Ⅱ 埼玉県の地形と地質」『新編埼玉県史自然編』
第2図：国土地理院発行 1/25,000 地形図「本庄」
第3図：本庄市都市計画図 1/2,500「本庄16」「本庄17」（平成10年度）
2. 平面座標測量系は、平面直角座標世界測地系第Ⅸ系を用い、遺構図面中の北方位は座標北を示す。
標高（H）は海拔高を示し、単位はmで表した。
3. 遺構略称は以下の通りとした。また、遺構番号は遺構の種類毎に通し番号を付けた。
SI：竪穴建物 SK：土坑 SD：溝 P：小穴 SX：性格不明遺構

4. 遺構・遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
全体図：1/800 遺構配置図：1/300
遺構図 竪穴建物：1/60 土坑：1/30・1/60 炉・埋設土器：1/30 溝：1/60
小穴：1/30 性格不明遺構：1/60・1/120 遺物包含層：1/120 土器集中：1/30
遺物実測図・写真 土器・須恵器・土製品：1/4（破片：1/3）石器・石製品：2/3・1/4
鉄製品：1/2 遺物出土状況：1/8・1/12
5. 遺構図で使用したスクリーントーンおよび記号の指示は以下の通りである。
検出時の地山範囲  被熱・焼土範囲  貼床  縄文範囲 
土器出土位置 ● 石器出土位置 ■
6. 本書で使用した遺物実測図中において、ヘラケズリ調整の方向は → で表し、須恵器断面及び墨書範囲内を黒塗りとした。また、遺物図で使用したスクリーントーンは、図中に個別の凡例を示した。
7. 遺物番号は遺構図・遺物実測図・観察表・写真図版ともに統一している。
8. 遺物写真の縮尺は、基本的に遺物実測図と一致している。その他の場合は、写真図版内に縮尺を示した。
9. 出土遺物観察表内における ○ は推定・残存値を示す。またの平底気味の土師器環の底径と、須恵器環の内底径の計測方法については、以下の通りである。
土師器：ケズリ調整による稜線で計測 須恵器：底部から体部にかけての屈曲点で計測
10. 土層・土器の色調・記号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2018『新版標準土色帖』財団法人日本色彩研究所に基づいて記載した。
11. 本文中、および土層注記におけるテフラ（火山噴出物）は以下の通りである。
As-A（浅間 A 軽石）：天明三（1783）年
As-B（浅間 B 軽石）：天仁元（1108）年
Hr-FA（榛名-二ツ岳渋川テフラ）：6 世紀初頭
As-YP（浅間-板鼻黄褐色軽石）：1.5～1.65 万年前

目次

序	
例言	
凡例	
第I章	発掘調査の概要……………1
第1節	発掘調査に至る経緯……………1
第2節	調査の経過……………1
第3節	調査の方法……………2
第II章	遺跡の地理的・歴史的環境……………3
第1節	地理的環境……………3
第2節	歴史的環境……………3
第3節	過年度調査の成果……………7
第III章	基本土層……………9
第IV章	検出された遺構と遺物……………10
第1節	将監塚遺跡第4次調査の概要……………10
第2節	縄文時代の遺構と遺物……………11
(1)	竪穴建物(SI)……………11
(2)	土坑(SK)……………15
(3)	埋設土器(SK08・10)……………21
(4)	小穴(P)……………23
(5)	遺物包含層……………24
第3節	古代の遺構と遺物……………32
(1)	竪穴建物(SI)……………32
(2)	土坑(SK)……………42
(3)	溝(SD)……………44
(4)	小穴(P)……………49
第4節	近代以降の遺構と遺物……………53
(1)	溝(SD)……………54
(2)	性格不明遺構(SX)……………56
第5節	遺構外出土遺物……………56
第V章	自然科学分析……………58
第1節	はじめに……………58
第2節	試料と方法……………58
第3節	結果および考察……………59
第4節	おわりに……………60
第VI章	総括……………61
第1節	縄文時代……………61
第2節	古代……………63
第3節	近代……………67

図版目次

第 1 図	埼玉県の地形	3	第 34 図	第 3 号竪穴建物 出土遺物 (2)	39
第 2 図	周辺の主要遺跡	6	第 35 図	第 4 号竪穴建物・出土遺物	41
第 3 図	調査区位置図	7	第 36 図	土坑	43
第 4 図	特監塚遺跡第 4 次調査 全測図	8	第 37 図	第 2 号溝・出土遺物	44
第 5 図	基本土層	9	第 38 図	第 5 号溝	45
第 6 図	遺構配置図	10	第 39 図	第 6 号溝	45
第 7 図	縄文時代の遺構配置図	11	第 40 図	第 7 号溝	46
第 8 図	第 5 号竪穴建物	12	第 41 図	第 8 号溝	46
第 9 図	第 5 号竪穴建物 遺物出土状況	13	第 42 図	第 8 号溝 出土遺物	47
第 10 図	第 5 号竪穴建物 出土遺物	14	第 43 図	第 9 号溝	49
第 11 図	第 4 号土坑・出土遺物	16	第 44 図	第 10 号溝	49
第 12 図	第 6 号土坑・出土遺物	17	第 45 図	第 10 号溝 出土遺物	49
第 13 図	第 9 号土坑・遺物出土状況	18	第 46 図	小穴 (1)	50
第 14 図	第 9 号土坑 出土遺物 (1)	19	第 47 図	小穴 (2)	51
第 15 図	第 9 号土坑 出土遺物 (2)	20	第 48 図	近代以降の遺構配置図	53
第 16 図	第 1 号埋設土器	21	第 49 図	第 1 号溝	54
第 17 図	第 1 号埋設土器 出土遺物	22	第 50 図	第 3 号溝	54
第 18 図	第 2 号埋設土器・出土遺物	23	第 51 図	第 4 号溝	54
第 19 図	小穴	23	第 52 図	第 11 号溝	55
第 20 図	遺物包含層 VI 層	24	第 53 図	第 12 号溝	55
第 21 図	土器集中部 遺物出土状況	24	第 54 図	第 1 号性格不明遺構	56
第 22 図	遺物包含層 VI 層 出土遺物 (1)	25	第 55 図	遺構外 出土遺物	57
第 23 図	遺物包含層 VI 層 出土遺物 (2)	26	第 56 図	プレス試料およびリン (P) とカルシウム (Ca) の元素	60
第 24 図	遺物包含層 VI 層 出土遺物 (3)	27	第 57 図	位置関係と配置順	61
第 25 図	遺物包含層 VII 層	29	第 58 図	縄文時代における特監塚遺跡	62
第 26 図	遺物包含層 VII 層 出土遺物 (1)	30	第 59 図	特監塚遺跡第 4 次調査出土の土器群	64
第 27 図	遺物包含層 VII 層 出土遺物 (2)	31	第 60 図	6～7 世紀における立地変遷	65
第 28 図	古代の遺構配置図	32	第 61 図	刺突土器の器形	66
第 29 図	第 1 号竪穴建物	33	第 62 図	刺突文の位置関係と計測値	66
第 30 図	第 1 号竪穴建物 出土遺物	34	第 63 図	SD03 の概念図	67
第 31 図	第 2 号竪穴建物・出土遺物	35	第 64 図	暗渠排水の形式	67
第 32 図	第 3 号竪穴建物	37	第 65 図	第 1 次調査にみられる暗渠形式	67
第 33 図	第 3 号竪穴建物 出土遺物 (1)	38			

表目次

第1表	発掘・整理作業工程表	2	第12表	遺物包含層 VII層 出土遺物観察表	31
第2表	将監塚遺跡 基本土層対比表	9	第13表	第1号竪穴建物 出土遺物観察表	34
第3表	第5号竪穴建物 出土遺物観察表	15	第14表	第2号竪穴建物 出土遺物観察表	36
第4表	第4号土坑 出土遺物観察表	16	第15表	第3号竪穴建物 出土遺物観察表 (1)	39
第5表	第6号土坑 出土遺物観察表	17	第16表	第3号竪穴建物 出土遺物観察表 (2)	40
第6表	第9号土坑 出土遺物観察表	21	第17表	第4号竪穴建物 出土遺物観察表	41
第7表	第1号埋設土器 出土遺物観察表	22	第18表	第2号溝 出土遺物観察表	44
第8表	第2号埋設土器 出土遺物観察表	23	第19表	第8号溝 出土遺物観察表	47
第9表	小穴計測表	24	第20表	第10号溝 出土遺物観察表	49
第10表	遺物包含層 VI層 出土遺物観察表 (1)	28	第21表	小穴計測表	52
第11表	遺物包含層 VI層 出土遺物観察表 (2)	29	第22表	遺構外 出土遺物観察表	57
			第23表	分析対象試料	58
			第24表	半定量分析結果 (mass%)	59

写真目次

図版 1

将監塚遺跡の位置 (上が北)
A区全景 完掘状況 (北東から)
A区全景 完掘状況 (南西から)

図版 2

B区全景 完掘状況 (北東から)
B区全景 完掘状況 (南西から)
C区全景 完掘状況 (北東から)
C区全景 完掘状況 (南西から)

図版 3

第5号竪穴建物 完掘状況 (西から)
第5号竪穴建物 土層 A-A' 断面 (東から)
第5号竪穴建物 遺物出土状況 1 (北から)
第5号竪穴建物 遺物出土状況 2 (南から)
第5号竪穴建物 遺物出土状況 3 (南から)
第5号竪穴建物 竪 完掘状況 (西から)
第5号竪穴建物 竪 土層断面 (南東から)
第5号竪穴建物 竪 被熱部断面 (南東から)

図版 4

第4号土坑 完掘状況 (北西から)
第4号土坑 遺物出土状況 (南西から)

第6号土坑 完掘状況 (南東から)

第6号土坑 遺物出土状況 (南から)
第9号土坑 遺物出土状況 (東から)

図版 5

第9号土坑 完掘状況 (南東から)
第9号土坑 土層断面 (南東から)
第9号土坑 遺物取り上げ後状況 (東から)
第9号土坑 土層断面 (遺物下堆積状況) (東から)
第1号埋設土器 完掘状況 (北東から)
第1号埋設土器 掘り方 土層断面 (南西から)
第1号埋設土器 土層断面 (上半部) (南東から)
第1号埋設土器 土層断面 (下半部) (南東から)

図版 6

第2号埋設土器 完掘状況 (北西から)
第2号埋設土器 掘り方 土層断面 (北西から)
C区VI層土器集中 (南東から)
C区深掘りトレンチ北端部 堆積状況 (南から)
第1号竪穴建物 完掘状況 (北から)
第1号竪穴建物 掘り方 完掘状況 (北から)
第1号竪穴建物 遺物出土状況 (南東から)
第1号竪穴建物 土層 A-A' 断面 (南東から)

図版 7

第 2 号竪穴建物 完掘状況 (南から)
第 2 号竪穴建物 掘り方 完掘状況 (南から)
第 2 号竪穴建物 遺物出土状況 (南東から)
第 3 号竪穴建物 完掘状況 (南西から)
第 3 号竪穴建物 掘り方 完掘状況 (南から)
第 3 号竪穴建物 土層 B-B' 断面 (北から)
第 3 号竪穴建物 土層 A-A' 断面 (東から)
第 3 号竪穴建物 焼土範囲 検出状況 (南西から)

図版 8

第 4 号竪穴建物 完掘状況 (西から)
第 4 号竪穴建物 土層 A-A' 断面 (南東から)
第 1 号土坑 完掘状況 (北西から)
第 2 号土坑 完掘状況 (北西から)
第 2 号土坑 土層 A-A' 断面 (南西から)
第 3 号土坑 完掘状況 (西から)
第 5 号土坑 土層断面 (北西から)
第 7 号土坑 完掘状況 (北西から)

図版 9

第 2 号溝 完掘状況 (西から)
第 2 号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)
第 5・6 号溝 完掘状況 (東から)
第 5・6 号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)
第 7 号溝 完掘状況 (南東から)
第 7 号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)
第 8 号溝 完掘状況 (西から)
第 8 号溝 土層 B-B' 断面 (東から)

図版 10

第 9 号溝 完掘状況 (西から)
第 9 号溝 土層 A・B 断面 (北西から)
第 10 号溝 完掘状況 (西から)
小穴群 [B 区中央部] 完掘状況 (西から)
第 1 号溝 土層断面 (北から)
第 3 号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)
第 11 号溝 土層 B-B' 断面 (北西から)
第 12 号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)

図版 11

第 5 号竪穴建物 出土遺物

図版 12

第 4 号土坑 出土遺物
第 6 号土坑 出土遺物
第 9 号土坑 出土遺物 (1)

図版 13

第 9 号土坑 出土遺物 (2)

図版 14

第 1 号埋設土器 出土遺物
第 2 号埋設土器 出土遺物

図版 15

包含層 VI 層 出土遺物 (1)

図版 16

包含層 VI 層 出土遺物 (2)

図版 17

包含層 VII 層 出土遺物

図版 18

第 1 号竪穴建物 出土遺物
第 2 号竪穴建物 出土遺物
第 3 号竪穴建物 出土遺物 (1)

図版 19

第 3 号竪穴建物 出土遺物 (2)

図版 20

第 4 号竪穴建物 出土遺物
第 2 号溝 出土遺物
第 8 号溝 出土遺物
第 10 号溝 出土遺物
第 11 号溝 出土遺物
遺構外 出土遺物

第1章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯

令和4年4月15日(金)、本市市共栄116番地先道路において、道路改良工事を計画している本市都市整備部道路整備課道路街路係より、同開発予定地に関する『埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて(照会)』の照会文書が、本市教育委員会に提出された。

これを受けて、市教育委員会は、埼玉県教育委員会発行の『埼玉県遺跡地図』(平成31年度版)をもとに、同地が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しているか照会を行ったところ、照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である将監塚遺跡(埼玉県遺跡番号No.53-108)の包蔵地内に所在していることが判明した。

そのため、市教育委員会では、当該事業計画地について遺跡保存のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、令和4年6月13日(月)、7月29日(金)、9月26日(月)～同月28日(水)にわたり、現地調査を実施した。

試掘調査の結果、事業予定地内にて保存対象となる埋蔵文化財として、竪穴建物、溝、縄文時代の遺物包含層等が検出された。

この試掘調査の結果に基づいて、事業主と開発予定地に所在する埋蔵文化財の保存について協議を実施したが、計画変更等は困難であるため、事業予定地内において、工事により保存されない範囲を発掘調査し、記録保存の措置をとることとなった。

かくして、本市都市整備部道路整備課の発掘調査事業について、令和5年1月4日付けで本市教育委員会事務局文化財保護課が執行委任を受け、現地における発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査に関わる通知は、事業主より文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」(令和4年4月15日付)が、本市教育委員会の進達文(令和5年1月10日付本教文発第393号)を副えて、埼玉県教育委員会に提出されている。

また、本市教育委員会より文化財保護法第99条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」(令和5年3月9日付本教文発第490号)が、埼玉県教育委員会に提出されている。

また、埼玉県教育委員会から、開発工事着工前に発掘調査を実施する旨の指示が記された「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」(令和5年2月24日付教文資第4-1928号)が事業主に通知されている。

なお、現地における発掘調査は令和5年3月6日(月)から同年4月19日(水)の日程で行われた。
(本市教育委員会事務局)

第2節 調査の経過

発掘調査は令和5年3月6日～同年4月19日にかけて実施した。3月2日に工用看板の設置と調査範囲の確認を行った。3月6日から作業員を呼集し、安全教育訓練を実施したのちにA区の遺構調査を開始した。3月9日には同区完掘状態の全景撮影を行った。引き続き、3月14日からB区の遺構検出を開始し、3月30日に全景撮影を行った。C区の調査は、4月4日から遺構検出を開始し、

遺構と縄文時代遺物包含層の掘削を4月5日から19日まで行った。全景撮影は4月18日に実施し、調査区埋戻しと撤収作業を行い、現地作業は終了した。整理作業・報告書作成は、令和5年4月20日～同年12月20日にかけて実施した（第1表）。

第3節 調査の方法

現地調査について

表土はバックホウ（0.25㎡）によって除去を行い、ジョレン・移植コテ等を用いて人力で遺構の検出を行った。遺構の検出は、原則的にローム層上面で行ったが、C区の大部分では縄文時代遺物包含層が堆積していたため、この上面や同包含層を掘削中に都度、遺構の確認を行った。遺構掘削の際は、覆土の堆積状況を観察し、埋没状況の把握に努めた。検出された遺構の平面と断面の計測は、トータルステーションによる器械測量を基本とし、写真測量も併用した。写真記録は、デジタル一眼レフカメラ（Nikon D5100）を使用し撮影した。遺物出土状況は、遺存状態の良いものや特殊な遺物について出土状況図の作成と写真撮影を行って位置等を記録し、その他の遺物については、出土遺構・出土層位の記録に留めた。

整理・報告書作成作業について

出土物の注記は原則的に「53-108 4次 調査区 出土地点」とした。接合は主に溶剤型接着剤（セメダインC）を用いて行い、復元については土器修復材（電気化学工業株式会社デンカキューテックスを主剤とする混合剤）を用いた。風化の激しい個体に関しては表面コート剤（株式会社新成田総合社ナチュラルコート）を塗布し、補強した。遺物撮影はデジタルミラーレス一眼カメラ（Canon R5）を用いて実施した。土器実測および、石器実測は手描きと写真を用いて行い、デジタルトレースはともにAdobe Illustratorで行った。版組はAdobe InDesignを用いて行った。

第1表 発掘・整理作業工程表

施工内容		令和4年度				令和5年度								
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
発掘調査	本調査			—————										
	遺物洗浄・注記				—————									
整理作業	遺物接合・復元				—————	—————								
	遺物実測・トレース					—————	—————							
	科学分析							—————	—————					
	原稿執筆					—————	—————	—————	—————					
	編集・校正									—————	—————			
	印刷・製本・発行											—————	—————	

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

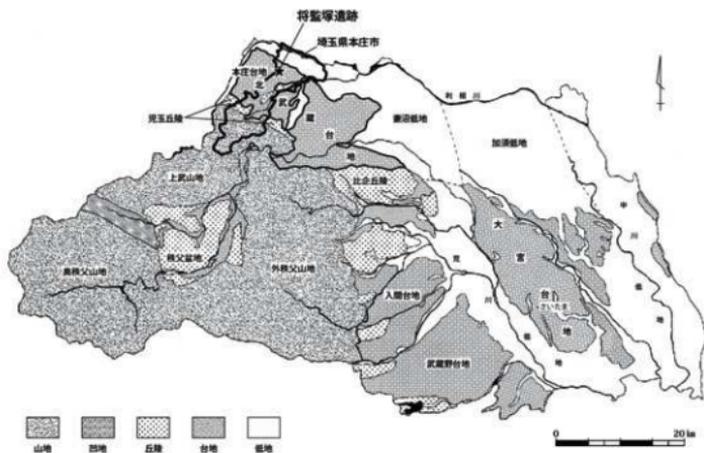
第1節 地理的環境

埼玉県の地形は、西・中央・東の地域に分けられる。西部地域には、奥秩父山地・上武山地・外秩父山地からなる秩父山地があり、その中に秩父盆地が広がる。中部地域は主に上武山地と外秩父山地から延びる丘陵、北武蔵台地・入間台地・武蔵野台地・大宮台地に囲まれ、南東に流れる荒川とそれに伴った荒川低地が広がる。東部地域は低地がほとんどを占めており、利根川流域には妻沼低地・加須低地、中川流域には中川低地が広がる（第1図）。

その中で将監塚遺跡は、中部地域の北武蔵台地に包括される本庄台地に立地しており、その背後には上武山地が連なる。本遺跡の南方では、同じく上武山地から女堀川と小山川（旧身馴川）が北東に流れ、女堀川は小山川に合流する。小山川は志戸川と合流し、深谷市域を経由して利根川へそそがれる。また上武山地では、九州地方の八代から四国を経て延びる中央構造線が通り、群馬県下仁田町から埼玉県東松山市周辺の比企丘陵まで露出する。その南側には、三波川変成帯が広がって露出していることから、周囲では結晶片岩が採取できる。

第2節 歴史的環境

将監塚遺跡は埼玉県本庄市に位置する遺跡である（第2図）。以下では、本次調査で確認された縄文・弥生・古墳・古代（飛鳥～平安時代）・近代における周囲の様相を述べていく。なお、将監塚遺跡第1～4次調査の概要については第三章1節で詳細を述べる。



第1図 埼玉県の地形

縄文時代

縄文時代草創期・早期・前期では、遺構・遺物の分布が少なく、以降良好に確認できるのは、縄文時代中期からである。将監塚遺跡(2)、古井戸遺跡(8)、新宮遺跡(11)では、勝坂式末期～加曾利Ⅳ式期の環状集落が3つ近接して併存しており、全国的にみても極めて珍しい。竪穴建物は将監塚遺跡で114軒、古井戸遺跡で154軒、新宮遺跡で40軒検出されており、共に加曾利EⅡ式新段階で居住域が最大となる。加曾利EⅢ式新段階以降では環状の集落形態が崩壊し、集落外縁部の将監塚東遺跡(23)、平塚遺跡(26)で加曾利EⅢ式新段階～加曾利EⅣ式に帰属する竪穴建物や土坑が検出されるようになり、本次調査(1)でも該期の遺構・遺物が確認されている。後期・晩期は遺跡数が少なく、藤塚遺跡(29)では堀之内Ⅰ式の屋外埋設土器や後・晩期の縄文土器を包含する遺物包含層が検出されている。平塚遺跡でも後期の縄文土器が採取されている。

弥生時代

弥生時代においては、発見された遺跡が少ない。弥生時代中期・後期の遺跡は児玉丘陵上に立地しており、女堀川流域の低地開発については比較的低調であったと思われる。共和小学校校庭遺跡(38)では、弥生時代中期の土坑が検出されており、本次調査でも後期の弥生土器が出土している。

古墳時代

古墳時代では、弥生時代までの遺跡立地とは異なって、女堀川流域や本庄台地縁辺部に分布するようになる。前期は堀向遺跡(28)、柿島遺跡(31)、皂樹原遺跡(47)、榎下遺跡(48)、塚高遺跡(32)、藤塚遺跡で竪穴建物が少数検出されており、古井戸遺跡では該期の土器器が出土している。中期は、前期の集落から継続して営まれる堀向遺跡、藤塚遺跡、塚高遺跡に加え、古井戸南遺跡(9)、今井原屋敷遺跡(21)、古井戸遺跡、新宮遺跡、平塚遺跡が新出する。続く後期でも増加傾向が認められている。古墳は7世紀末頃に青柳古墳群四軒在家支群(A)、青柳古墳群元阿保支群(B)、大御堂古墳群(C)、本郷古墳群(D)が本遺跡周辺に造営される。

古代(飛鳥～平安時代)

7世紀以降遺跡数が増加する。本遺跡の北東側にあたる立野南遺跡(5)、八幡太神南遺跡(6)、熊野太神南遺跡(7)、今井遺跡群(20)、今井原屋敷遺跡では、集落の一端が検出されている。竪穴建物の軒数は9世紀代に隆盛し、10世紀以降には遺構が極めて希薄になる。遺物では、今井遺跡群から7世紀後半に帰属する製鉄関連遺物が、八幡太神南遺跡から7世紀後半の畿内系土器器皿が出土している。

本遺跡の南東側には藤塚遺跡、柿島遺跡が存在し、9世紀代の竪穴建物が数軒検出されている。平安時代中期以降になると蛭川坊田遺跡(37)が出現し、10世紀～11世紀代の竪穴建物と掘立柱建物が確認されるようになる。このうち特筆されるのは、11世紀代に帰属する2×3間の4面廂付建物が3棟と、溝による方形区画の検出、および竪穴建物と掘立柱建物の検出数が逆転する現象であり、これらは中世的な居住形態の初現であると指摘されている(恋河内2007)。

本遺跡の南西側には南共和遺跡(10)、辻ノ内遺跡(40)、真下境東遺跡(41)、真下境西遺跡(42)、新宮遺跡、塚高遺跡等が広がる。居住域は7世紀～9世紀頃まで形成され、その様相は北東地域と同様である。

本遺跡の北西側には、大御堂油免遺跡(49)、日月遺跡(50)、田中西遺跡(51・53)、田中前遺跡(52)、皂樹原遺跡、榎下遺跡が位置する。7世紀代にはすでに居住域が確認されており、皂樹原遺跡、榎下

遺跡、大御堂油免遺跡では9世紀後半頃まで、田中前遺跡、田中西遺跡、日月遺跡では11世紀後半まで営まれる。遺構では、皂樹原遺跡、檜下遺跡で鍛冶工房跡や土師器窯跡が検出されており、遺物では石・鉄製の紡錘車などが出土している。

また特筆すべき遺構としては、女堀川流域に位置する児玉条里遺跡（Ⅰ）、今井条里遺跡（Ⅱ）で確認された条里形水田や、本遺跡（第Ⅰ・Ⅱ次調査）や真下境東遺跡で検出された幅8m以上を測る大溝がある。水田域については、児玉条里遺跡が7世紀末頃（鈴木1991）、今井条里遺跡が7世紀後半に開墾されたとしている（岩田1998）。大溝は「真下大溝」と呼称されており、開削時期が7世紀末～8世紀初頭頃と考えられている。生活用水としての利用（岩瀬1988）や、灌漑用水の水量調節としての利用が指摘されている（鈴木1989）。大溝の流路は、古井戸遺跡、八幡太神南遺跡、熊野太神南遺跡でも類似した溝が検出されていることから、北東方向へ直線的に流れ、その後東西に分岐すると考えられている（岩瀬1988）。

中世

当地域は平安末から鎌倉時代において名をはせた児玉党の本拠地である。児玉党とは武蔵七党の一派で、最大の規模を有していたとされている。遺構が確認されているのは、内手遺跡（25）、将監塚東遺跡、古井戸遺跡、塚高遺跡、藤塚遺跡等で、居館や竪穴状遺構が検出されている。

近代

ここでは児玉飛行場について焦点を当てる。児玉飛行場は戦時中に建設された陸軍の飛行場で、飛行場範囲内は現在工業団地として姿を変えているが、様々な痕跡が今も残っている。立野南公民館（ア）は旧兵舎の部材を転用して移築された建物で、その北西には記念碑や焼夷弾破片（イ）が位置する。また、近年までは「飛行場落とし」と呼ばれたコンクリート製の有蓋側溝（ウ）も現存していた。宝蔵寺の石灯籠（オ）は空襲による弾痕が今でも確認でき、当時の状況を鮮明に伝えている。以下は聞き取り調査や文献で伝わる児玉飛行場の概略についてまとめる。

（施設）

児玉飛行場は管理・整備施設区域と離着陸区域に分けられる。施設区域は長方形の突出部を指し、格納庫5～6棟、兵舎2棟、自動車給水塔、炊事場、風呂場等が作られた。滑走路は一边約1,500mの正方形の芝地を離着陸区域として整備している。作戦飛行場移行後は、一部の両端部を250m延ばして、全長2,000mまで延長したとされているが、施工途中で終戦を迎えたため、未完工である。当初はローラーによる転圧のみで舗装をしていたが、延長時は玉石を基盤に埋め込み、転圧をかけて構築している。滑走路下には、穿孔されたコンクリート製のヒューム管が暗渠として布設されており、排水は施設区域との境界に布設された有蓋側溝にそそぎ、女堀川へ流れる。

（経過）

昭和16年12月 太平洋戦争勃発。

昭和17年3月 陸軍航空本部による地主向けの集会を開催し、土地買収に着手。

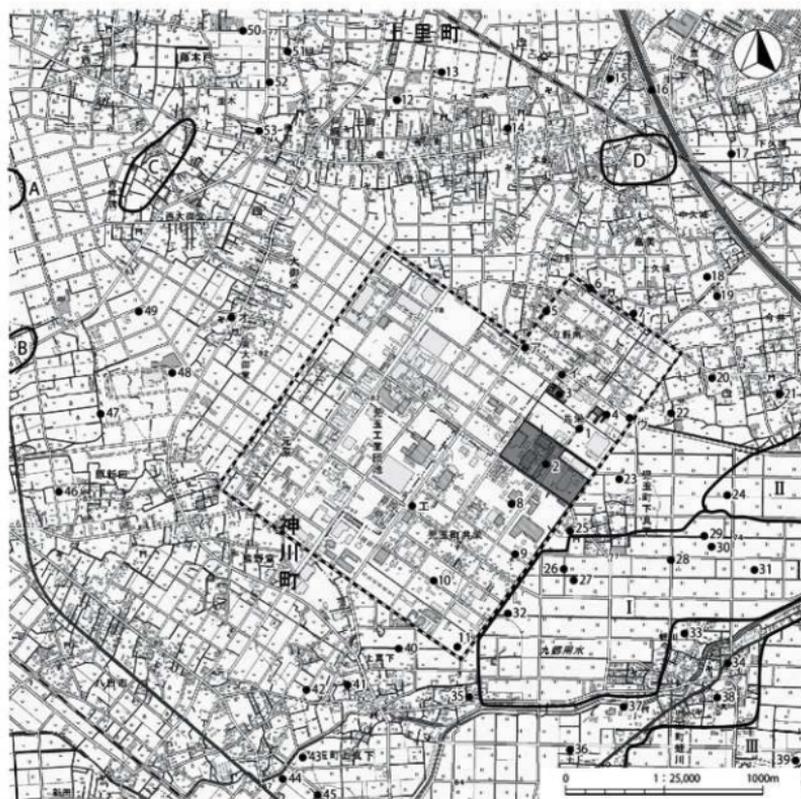
同年5月～12月 児玉飛行場建設前の測量事業を開始し、施設の建設に着手。

昭和19年3月 児玉飛行場が完成し、熊谷飛行学校児玉分校として発足。同年7月に解散。

同年8月 飛行学校改め、作戦飛行場として運用開始。爆撃機や飛行大隊が駐屯。

昭和20年8月14日 日本はボツダム宣言による無条件降伏を受け入れる。

同年10月 飛行場跡地の農地開墾に着手。



- 1: 将監塚遺跡第4次調査 2: 将監塚遺跡 3: 将監塚遺跡B地点(第2次調査) 4: 将監塚遺跡第3次調査 5: 立野南遺跡 6: 八幡太神南遺跡 7: 熊野太神南遺跡 8: 古井戸遺跡 9: 古井戸南遺跡 10: 南共和遺跡 11: 新宮遺跡 12: 中堀遺跡 13: 耕安地B地点遺跡 14: 耕安地遺跡 15: 本郷下遺跡 16: 本郷東遺跡 17: 下廓遺跡 18: 往来北遺跡 19: 久城前遺跡 20: 今井遺跡群 21: 今井原屋敷遺跡 22: 九塚1号墳 23: 将監塚東遺跡 24: 前田甲遺跡 25: 内手遺跡 26: 平塚遺跡 27: 真下氏館跡 28: 堀向遺跡 29: 藤塚遺跡 30: 藤塚 31: 柿島遺跡 32: 塚高遺跡 33: 左口遺跡 34: 蛭川氏館跡 35: 上真下東遺跡 36: 辻堂遺跡 37: 蛭川坊田遺跡 38: 共和小学校校庭遺跡 39: 城の内遺跡 40: 辻ノ内遺跡 41: 真下境東遺跡 42: 真下境西遺跡 43: 八雲神北遺跡 44: 八雲神南遺跡 45: 反り町遺跡 46: 金屋遺跡 47: 包樹原遺跡 48: 榎下遺跡 49: 大御堂油免遺跡 50: 日月遺跡 51: 第一次田中西遺跡 52: 田中前遺跡 53: 第二次田中西遺跡
- A: 青柳古墳群四軒在家支群 B: 青柳古墳群元阿保支群 C: 大御堂古墳群 D: 本郷古墳群
 I: 兎玉条里遺跡 II: 今井条里遺跡 III: 蛭川条里遺跡
- 兎玉飛行場推定範囲
 ア: 立野南公民館 イ: 兎玉飛行場記念碑と焼夷弾 ウ: 有蓋側溝(消滅) エ: 兎玉工業団地完成記念碑
 オ: 宝蔵寺の石灯籠とマキの木

第2図 周辺の主要遺跡

第3節 過年度調査の成果

将監塚遺跡は旧石器時代～近代まで続く複合遺跡である。調査は第1～3次調査まで行われており、総調査面積は173.228㎡にも及ぶ(第3・4図)。成果としては、縄文時代中期の環状集落と古代(飛鳥～平安時代)の大集落を発見したことである。

第1次調査では、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物が認められている。遺跡の主体は縄文時代と古代で、縄文時代では勝坂式末期～加曾利EⅣ式期の竪穴建物が114軒、古代では7世紀後半～10世紀前半の竪穴建物が180軒以上検出されている。なお、隣接する古井戸遺跡は古代の同一集落とみなされている。遺物では古代の緑釉陶器、銅製品(帯金具)、金銅製品(装身具)の出土が目される。

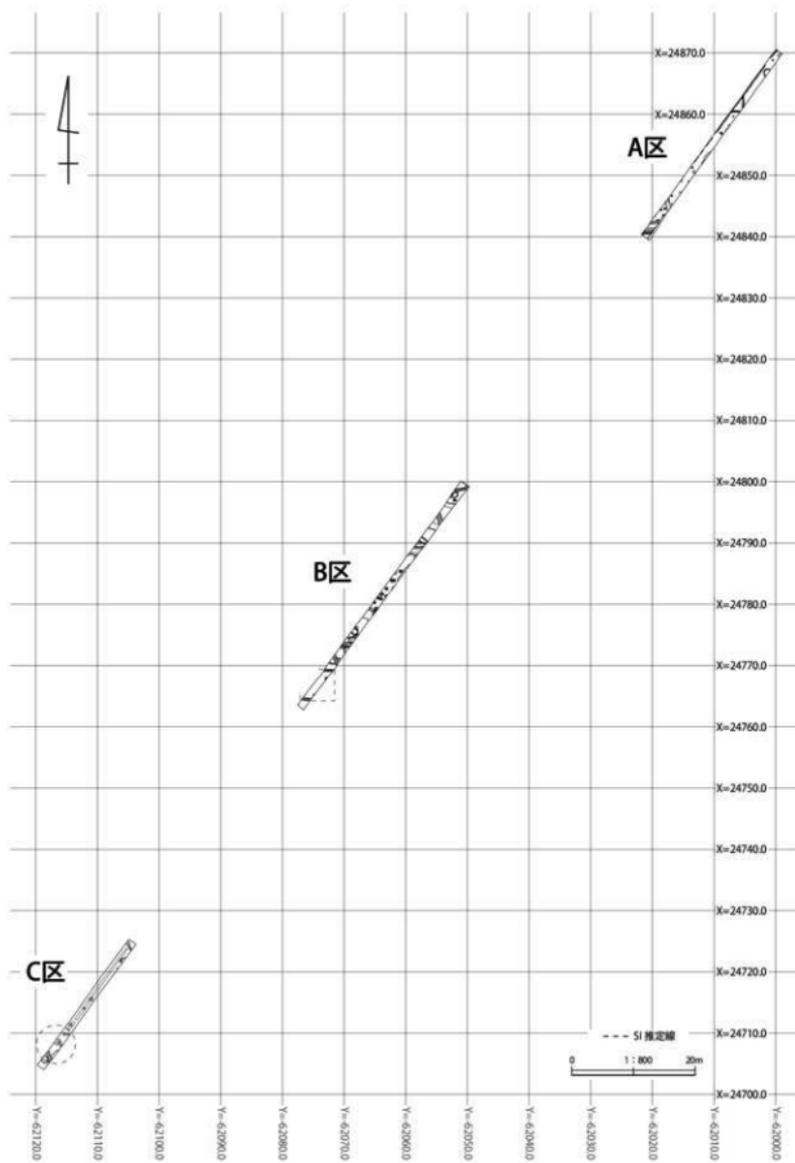
第2次調査では、縄文時代・古代・近世・近代の遺構・遺物が認められている。遺跡の主体は縄文時代と古代で、縄文時代では勝坂式段階の竪穴建物が2軒、古代では8世紀～9世紀の竪穴建物が12軒検出されている。また、近代の児玉飛行場に伴う溝と考えられるものが3条検出されており、布設されていた外面に穿孔を伴うコンクリート製のヒューム管を排水管と考えている(長谷川1993)。遺物では古代の銅製品(鈴)の出土が目される。

第3次調査では、縄文時代・古墳時代・古代の遺構・遺物が認められている。遺跡の主体は古代で、8世紀～9世紀の竪穴建物が16軒検出されている。遺物では古代の銅製品(巡方)の出土が目される。

なお、前節で述べた「真下大溝」が、第1・2次調査で北東～南西方向に延びて検出されている。第3次調査において、大溝から分岐した支溝が、第1次調査の延長上で検出されている。集落については、縄文時代では加曾利EⅢ式中段階で規模が最大となり、新段階以降縮小していくとみられており(石塚1986)、古代では大溝と分岐した支溝に規制されながら集落が変遷していく様相を推定している(赤熊1988、高橋2009)。



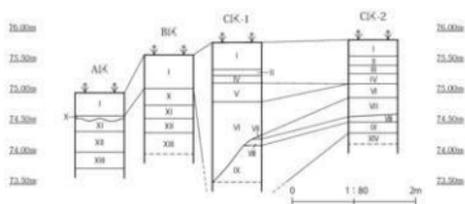
第3図 調査区位置図



第4図 将監塚遺跡第4次調査 全測図

第Ⅲ章 基本土層

A～C区の土層は13層に分層された(第5図)。そのうち、V～IX層はC区のみで確認できた。I層は表土である。黄灰色を呈する砂質シルトで、As-Aが多く混じり、ローム粒や粘土粒も含まれる。II層は黄灰色砂質シルトで、近現代の耕作土と考えられる。層厚は最大0.24mで、As-Aや細砂が多く混じり、炭化物をわずかに含む。III層は黄灰色砂質シルトで、中近世の耕作土と考えられる。層厚は最大0.24mで、As-Bや細砂を多量に含み、垂円礫もわずかに混じる。IV層は黄灰色砂質シルトで、8世紀末～9世紀初頭の遺構を被覆することとAs-Bを含まないことから、9世紀～11世紀の堆積と推測される。灰黄褐色土ブロックと白色砂粒を少量含む。C区では黄褐色土粒が少量混じる。V層はにぶい黄褐色砂質シルトで、層厚は最大0.45m、白色砂粒がわずかに混じる。洪水層と考えられ、土師器小片が少量含まれることから、古墳時代以降に堆積した可能性がある。VI層は黒色粘質シルトで、縄文時代中期～後期の遺物包含層である。層厚は最大1.62mで、白色砂粒や炭化物がわずかに混じり、縄文土器が多量に含まれている。VII層は黒褐色粘質シルトで、縄文時代中期の遺物包含層である。層厚は最大0.48mで、白色砂粒や縄文土器が少量含まれる。VIII層は黒色粘質シルトで、層厚は最大0.3mを測る。白色砂粒や黄色砂粒を少量含む。IX層は褐色粘質土で、層厚は最大0.2mを測る。白色砂粒が多量、極細砂が少量、礫がわずかに混じる。X層は暗褐色砂質シルトで、層厚は最大0.25mである。ローム粒や白色砂粒、黄色砂粒が多量に混じる。XI～XIV層はいわゆるローム層で、XI層がソフトローム、XII～XIV層がハードロームである。XI層はAs-YPが多量に混じる明黄褐色ローム層で、粘性がやや弱く、しまりがやや強い。XII層はにぶい黄褐色ローム層で、粘性・しまりともにやや強い。XIII層は明黄褐色ローム層で粘性・しまりともにやや強い。XIV層は黄色ローム層で、粘性がやや弱く、しまりはやや強い。第2表は過年度調査との対表であるが、第2次調査の土層や表に記載されていない土層は、検証ができていない。遺構確認はA・B区がXI層の上面、C区はVI～VIII層とXI層の上面で行った。



第5図 基本土層

第2表 将監塚遺跡 基本土層対比表

	第4次	第1次	第3次
表土	I	—	I
耕作土 (近現代)	II	I	I
耕作土 (中近世)	III	—	—
	IV	—	—
V～IX	—	—	—
X	—	II	—
ソフト ローム	XI	III	III
	XII	IV	IV
ハード ローム	XIII	V	V・VI
	XIV	VI	—
粘土層	—	—	VII
砂質 土層	—	VII	—
砂礫層	—	VII	VII

第IV章 検出された遺構と遺物

第1節 将監塚遺跡第4次調査の概要

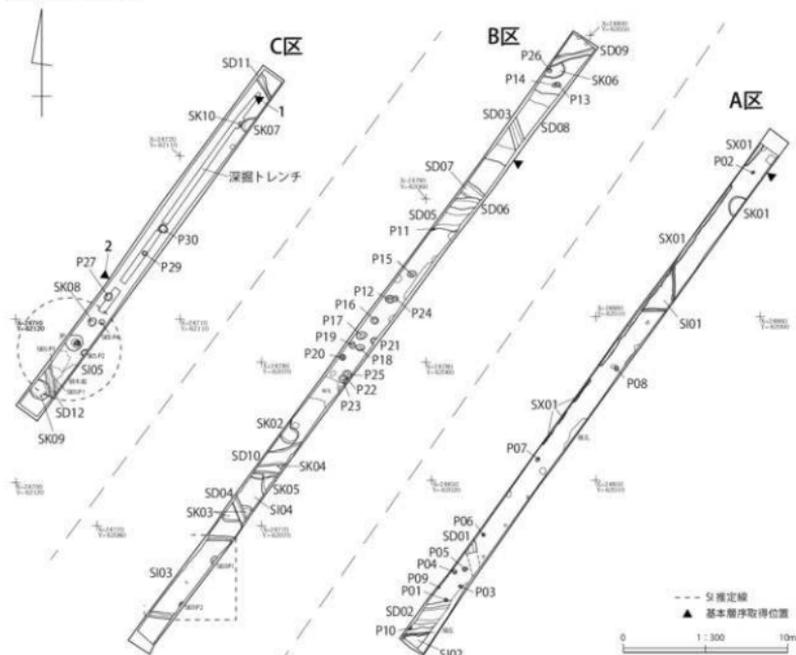
本次調査では、縄文時代～中世・近代の遺構・遺物が確認されており、そのうち縄文時代・古代・近代が遺跡の主体となる（第6図）。

縄文時代では竪穴建物1軒、土坑3基、埋設土器2基、小穴3基、遺物包含層、土器集中が検出されている。遺構では中期後半に属するものが検出されており、遺物では中期中葉～後期の土器及び石器・石製品が出土している。

古代では竪穴建物4軒、土坑5基、溝7条、小穴26基が検出されている。遺構・遺物ともに6世紀末～9世紀前葉まで確認されている。遺物は土師器、墨書土器、ロクロ土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄製品、石製品、焼成粘土塊が出土している。

近代では見玉飛行場のものと思われる溝が5条検出され、遺物もコバルト軸を施軸した磁器製急須蓋が出土している。

遺構外では、弥生時代後期の甕や古墳時代のS字状口縁台甕・形象埴輪、中世の瓦器塼・内耳鍋が出土している。

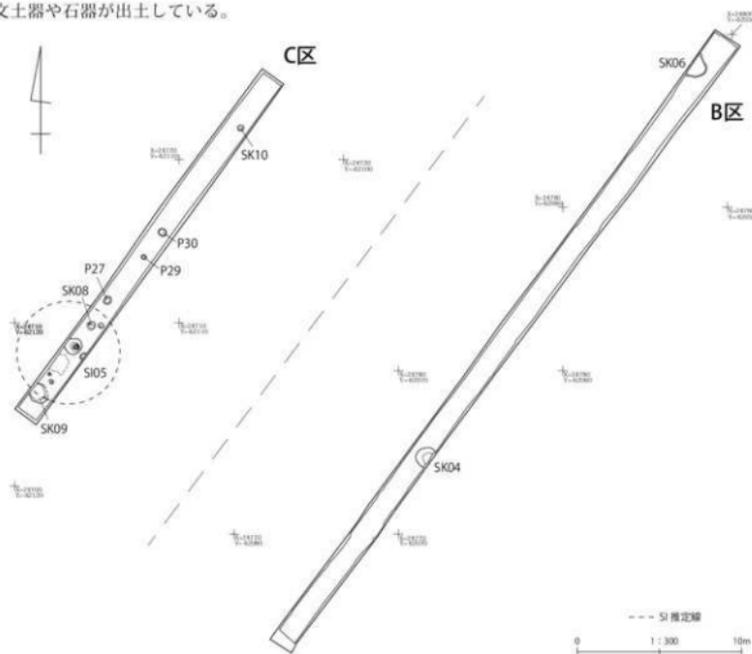


第6図 遺構配置図

本次調査は、第1・3次調査の位置的な空隙を埋めるものである。縄文時代は、第1次調査で検出された環状集落の縁辺部にあたる。古代についても、集落の範囲内である。近代では、第2次調査で検出された見玉飛行場の排水溝と同様な溝が検出されており、飛行場の様相を知る手がかりになりうる。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代中期中葉～後期までの遺構と遺物が確認された。遺構はB・C区において竪穴建物1軒(SI05)、土坑3基(SK04・06・09)、埋設土器2基(SK08・10)、小穴3基(P27・29・30)が検出されており、遺物包含層2面(VI・VII層)とVI層中の土器集中も確認された(第7図)。遺物は縄文土器や石器が出土している。



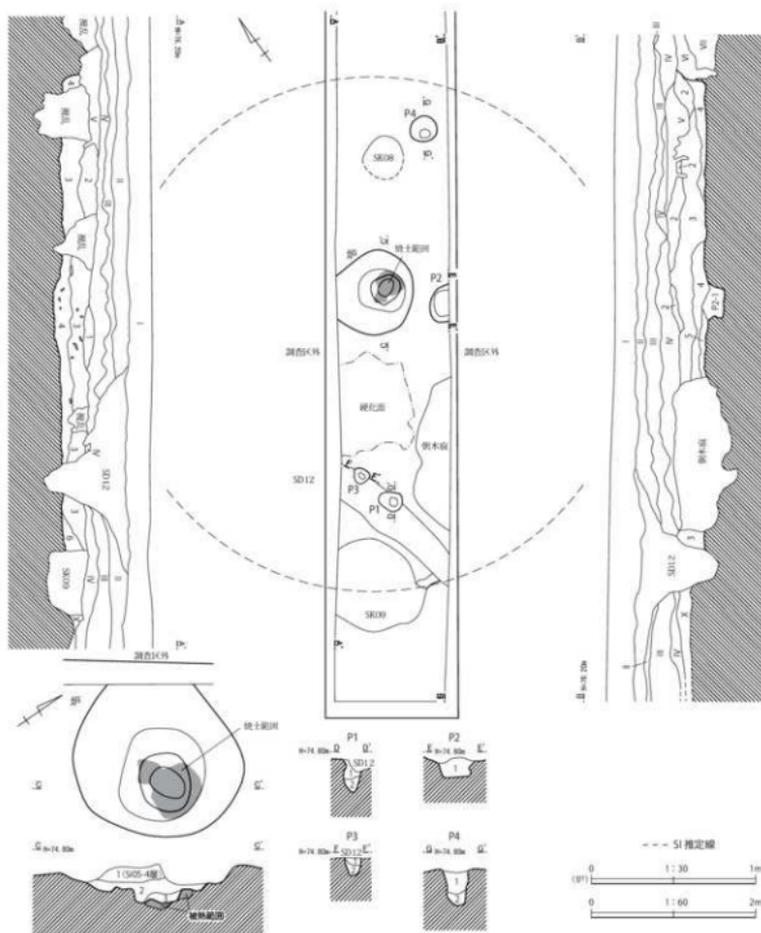
第7図 縄文時代の遺構配置図

(1) 竪穴建物 (SI)

今回の調査では、縄文時代の竪穴建物がC区で1軒検出されている。

C区第5号竪穴建物 (SI05 第8～10図、第3表、図版3・11)

本建物はC区南西部で検出された。XI層(ローム層)が北東方向へ下っていく傾斜変換点に構築されており、遺構上端は削平され上面はIV層・V層に被覆されている。SK08・SK09・SD12と重複し、それらよりも古い。検出部は竪穴建物の中央部約1/3と推定され、南西際壁はSK09によって一部壊

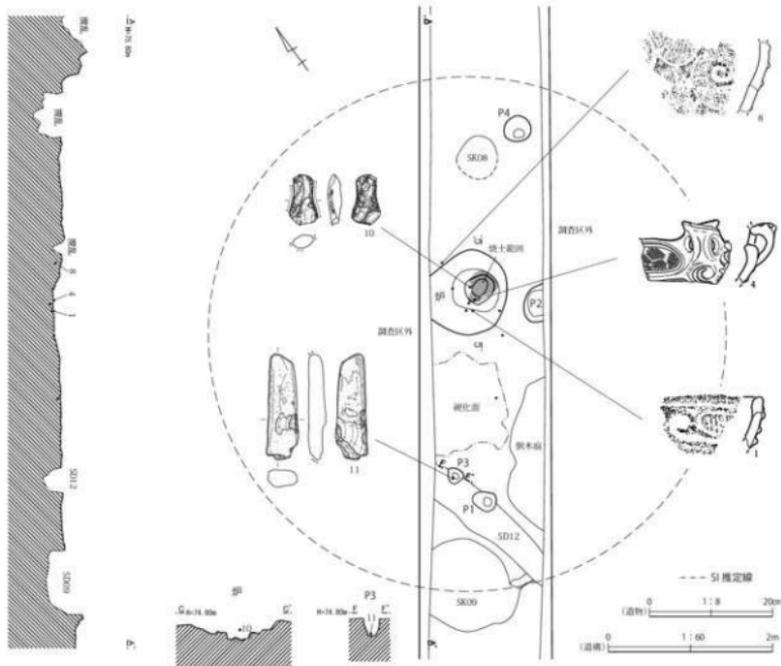


- S05
- 1 黒灰色砂質シルト (I0YR4/3) 粘質土、しまりや中硬、ローム粒・白色砂粒・焼土 (径 1mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 2 黒褐色砂質シルト (I0YR3/3) 粘質や中硬、しまりや中硬、白色砂粒少量、ローム粒・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 3 黒褐色砂質シルト (I0YR3/2) 粘質や中硬、しまりや中硬、白色砂粒少量、ローム粒・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 4 黒褐色砂質シルト (I0YR3/1) 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒少量、炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 5 黒褐色砂質シルト (I0YR2/1) 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒少量、炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 6 黒褐色砂質シルト (I0YR3/2) 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒少量、白色砂粒わずかに含む。
- S05-併
- 1 S05A 跡土層一
 - 2 黒灰色砂質シルト (I0YR4/1) 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒・焼土 (径 10mm 以下) 炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 3 黄褐色砂質シルト (I0YR2/6) 粘質や中硬、しまりや中硬、焼土 (径 10mm 以下) 多量、ローム粒少量含む。

- S05-P1
- 1 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/2)
 - 2 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/2)
- S05-P2
- 1 黒灰色砂質シルト (10YR4/1)
- S05-P3
- 1 黒灰色砂質シルト (10YR4/1)
 - 2 灰黄褐色砂質シルト (10YR3/2)
- S05-P4
- 1 黒色砂質シルト (10YR2/1)
 - 2 黒褐色砂質シルト (10YR3/1)

- S05-P1
- 1 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
- S05-P2
- 1 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
- S05-P3
- 1 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒・ロームブロック (径 10 ~ 100mm) 多量、炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
- S05-P4
- 1 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 2 粘質や中硬、しまりや中硬、ローム粒・炭化物 (径 10mm 以下) わずかに含む。

第 8 図 第 5 号竪穴建物



第9図 第5号竪穴建物 遺物出土状況

される。壁は南側でわずかに検出され、(柱穴P1～4)の位置と併せて建物の平面形は円形と推定される。

規模 推定で直径は約6.30mを測る。

壁高 床面から検出面まで0.24mを測る。調査区壁の断面から確認できる壁高は0.36mを測り、垂直に立ち上がる。

主軸方位 不明である。

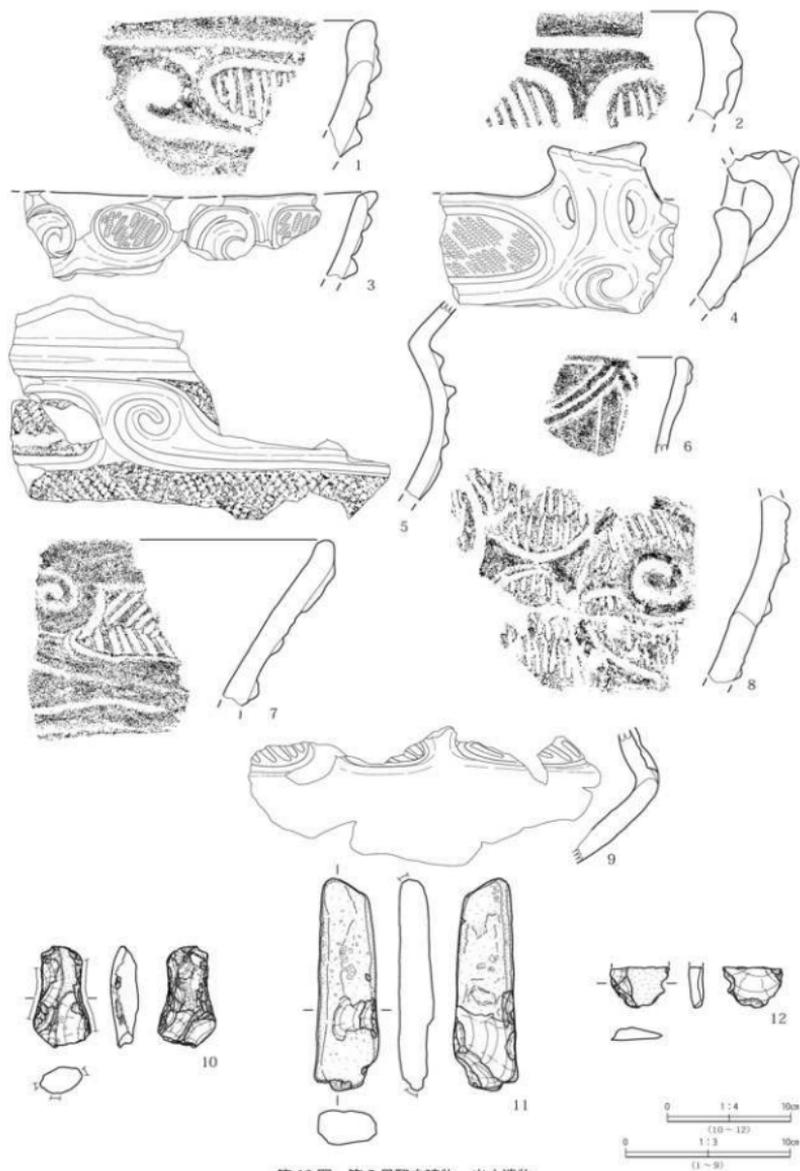
壁溝 検出されず。

床面 硬化面が炉の南西側で検出されており、平坦で硬く締まっていた。

炉址 本建物中央部やや北東寄りにあり、上半部は廃絶時に壊されている。平面形は不整形円形を呈しており、長軸1.05m、短軸0.96m、床面からの深さ0.21mを測る。炉底は被熱・赤化しており、残存する被熱範囲は長軸0.43m、短軸0.33m、主軸方向はN-73°-Eを測る。礫や土器囲いの痕跡は確認できなかった。

柱穴 4基(P1～4)検出された。床面からの深さはP1 = 0.39m、P2 = 0.18m、P3 = 0.22m、P4 = 0.44mを測り、規模と配置からP1・4が主柱穴と考えられる。

遺物 覆土・床面から土器・石器が計24,665g出土しており、そのうち図示できたのは土器9点(I



第10図 第5号竪穴建物 出土遺物

第3表 第5号竪穴建物 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	口縁部高 底径(mm)	胎土	焼成	色調	残存部位	文様の特徴	備考
1	甕土4層	甕土上層	深鉢	(6.5)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：10YR8/3 浅黄緑 外面：10YR6/3 にぶい黄緑	口縁部 破片	口縁部に上下を隆帯で区画。隆帯と沈線による渦巻文を配し、区画内には短沈線を充填する。	加曾利EⅡ～Ⅲ式段階
2	甕土	甕土上層	深鉢	(6.5)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：2.5YR5/6 明赤褐 外面：5YR6/6 赭	口縁部 破片	口縁部には隆帯と沈線による区画文を配し、区画内には短沈線を充填する。	加曾利EⅢ式段階
3	甕土	甕土上層	深鉢	(5.3)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR4/6 赤褐	口縁部 破片	口縁部には隆帯と沈線による渦巻文と区画文を配し、区画内には短沈線を充填する。	加曾利EⅡ～Ⅲ式段階
4	甕土4層	甕土上層	深鉢	(9.8)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 赭	口縁部 破片	口縁部に楕円把手を付す。隆帯と沈線による渦巻文と区画文を配し、区画内には短沈線を充填する。	加曾利EⅢ式段階
5	甕土	甕土上層	浅鉢	(12.2)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR5/3 にぶい黄	口縁部 破片	口縁部は無文。隆帯と沈線による渦巻文と区画文を配し、区画内には短沈線を充填する。	加曾利EⅢ式段階
6	甕土	甕土上層	深鉢	(5.9)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：5YR4/3 にぶい赤褐 外面：5YR5/6 明赤褐	口縁部 破片	口縁部には隆帯による弧状の区画文を配する。胴部には縦位の沈線を施す。	連気文系土器 加曾利EⅢ式段階
7	甕土	甕土上層	深鉢	(10.2)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：5YR6/6 赭 外面：5YR5/6 明赤褐	口縁部 胴部 破片	口縁部は隆帯と沈線による渦巻文と区画文を配し、区画内には短沈線を充填する。胴部・断面には楕円隆帯を施す。	曾利系土器 曾利Ⅲ式段階併行
8	甕土4層	甕土上層	深鉢	(11.4)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：10YR6/2 灰黄緑 外面：7.5YR5/6 明黄	胴部 破片	胴部には隆帯と沈線による曾利系文を配し、断面には両端から短沈線を充填する。	曾利系土器 曾利Ⅲ式段階併行
9	甕土	甕土上層	浅鉢	(8.9)	微細石英・粘土・内閉石・片石・絹雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：10YR7/3 にぶい黄緑 外面：10YR6/3 にぶい黄緑	口縁部 破片	胴部には隆帯と沈線による区画文を配し、区画内には短沈線を充填する。	加曾利EⅡ～Ⅲ式段階

No.	出土位置	種類	器種	備考
10	伊賀土2層	石器	打製石斧	安山岩製 長さ8.3cm 幅4.7cm 厚み2.3cm 重量85.9g 完形
11	P3甕土2層	石器	打製石斧未成品	結晶片質製 長さ17.3cm 幅5.2cm 厚み2.9cm 重量44.5g 完形
12	伊賀土2層	石器	削器	安山岩製 長さ3.3cm 幅4.8cm 厚み1.2cm 重量19.2g 上半部欠損

～9)、石器3点(10～12)である。1～4・6～8は深鉢で、口縁部に渦巻文や楕円形区画を有する。その中でも、4は口縁部に楕円把手を付し、7は区画内に矢羽根状文を充填している。1・3は加曾利EⅡ～Ⅲ式段階、それ以外は加曾利EⅢ式段階である。6は連気文系土器で、隆帯による弧状の区画を配する。8は唐草文系の土器で、器面に雨だれ状の短沈線を施す。5・9は浅鉢で、5は渦巻文と楕円形区画を有する加曾利EⅢ式段階のもの、9は楕円形区画に短沈線を充填する加曾利EⅡ～Ⅲ式段階である。10～12は石器である。10が打製石斧、11が打製石斧未成品、12が削器で、石材は10・12が安山岩、11が結晶片岩である。

時期 出土遺物および重複関係から加曾利EⅢ式段階と考えられる。

(2) 土坑 (SK)

土坑はB・C区で3基検出された。

B区第4号土坑 (SK04 第11図、第4表、図版4・12)

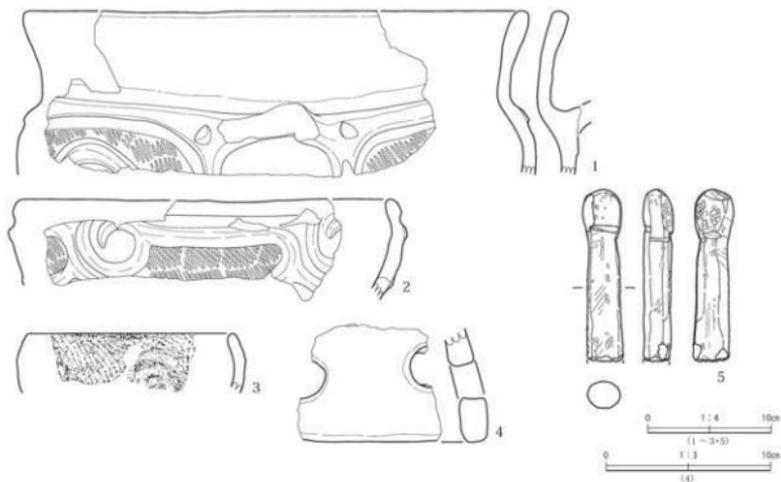
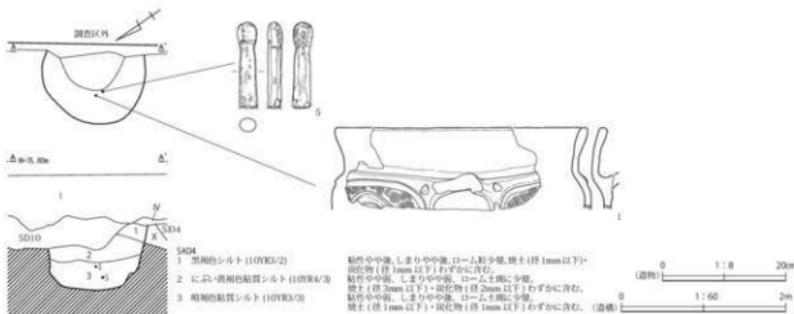
B区南西部のXI層(ローム層)上面で検出された。土層断面の観察から、X層から掘りこまれて構築されているが、遺構上端は削平されている。SD10と重複しており、それよりも古い。平面形は円形で、断面形はU字状を呈する。

規模 検出長で、長径1.24m×短径0.87m×深さ0.57mを測る。

遺物 覆土から土器が計2.282g出土し、そのうち図示できたのは縄文土器4点(1～4)、石製品1点(5)である。1～3は深鉢で、1・2は加曾利EⅢ式段階、3は加曾利EⅣ式である。1は口縁部無文で、胴部上端に把手を付す。2は隆帯と沈線による渦巻文と区画文を配して、単節縄文を充填する。3は胴部文様帯が口縁直下までせり上がる。4は台形土器で、円孔が2ヶ所存残する。5は下半部が欠損する石棒で、石材は結晶片岩である。

時期 出土遺物から、縄文時代中期後葉と考えられる。

第IV章 検出された遺構と遺物



第 11 図 第 4 号土坑・出土遺物

第 4 表 第 4 号土坑 出土遺物観察表

No.	出土位置	種別	器種	口径 器高 底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	文様の特徴	備考
1	覆土 3層	縄文 土器	深鉢	40.0 (13.4) —	黄褐色石英・粘土・角閃石・斜雲母・白色砂粒・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面: 7.5YR5/3 赤い・黒 外面: 10YR7/4 赤い・黒褐色	口縁部・腹部 破片	口縁部は無文。腹部小端に降帯を巡らし、把手を付す。腹部と沈殿で文様を描き、器面には紅、縄文を施す。	加賀利 E Ⅱ式陶器
2	覆土 3層	縄文 土器	深鉢	60.0 (8.3) —	黄褐色石英・角閃石・斜雲母・白色砂粒・赤色砂粒	良好	内面: 10YR6/4 赤い・黒褐色 外面: 10YR7/6 明黄褐色	口縁部 破片	口縁部には降帯と沈殿による渦巻文と区画文を配し、区画文内には紅、縄文を施す。	加賀利 E Ⅱ式陶器
3	覆土 3層	縄文 土器	小形深鉢	16.4 (4.8) —	黄褐色石英・角閃石・斜雲母・白色砂粒・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面: 7.5YR4/3 黒 外面: 7.5YR6/6 黒	口縁部 破片	沈殿による逆り字状の文様を描し、器面には紅、縄文を施す。	加賀利 E Ⅱ式陶器
4	覆土 3層	縄文 土器	台形土器	— (7.0) (10.0)	黄褐色石英・角閃石・片石・斜雲母・赤色砂粒・黒粒	良好	内面: 5YR5/6 明赤褐色 外面: 5YR6/6 黒	台形部 破片	無文で、円孔が 2 箇所。	

No.	出土位置	種別	器種	編者		
5	覆土 3層	石製品	石碇	結晶片割製	長さ (14.1)cm 幅 3.3cm 厚み 2.5cm 重量 161.7g	下部部欠損

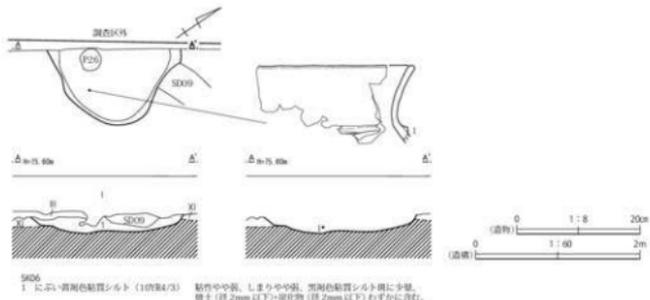
B区第6号土坑 (SK06 第12図、第5表、図版4・12)

B区北東部のXI層（ローム層）上面で検出された。土層断面の観察から、X層から掘りこまれて構築されているが、遺構上端は削平されている。SD09・P26と重複し、それらより古い。平面形は不整形と推定され、断面形は皿状を呈する。

規模 検出長で、長径1.63m×短径0.92m×深さ0.18mを測る。

遺物 覆土から土器が277g出土しており、そのうち図示できたのは縄文土器1点である。1は深鉢である。口縁部無文で、胴部上端に隆帯を巡らす。

時期 出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第12図 第6号土坑・出土遺物

第5表 第6号土坑 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	口径 器高 器厚 (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	文様の特徴	備考
1	覆土層	縄文土器	深鉢	(12.7)	黄緑石質・長石・内閉石・ 珩質・白色砂粒・赤色 砂粒・黒色砂粒	直焼	内面: 5YR5/6 明赤褐 外面: 5YR5/8 明赤褐	口縁部・ 胴部 破片	口縁部は無文、胴部上端には隆帯を巡らす。	加野利EⅢ式陶器か

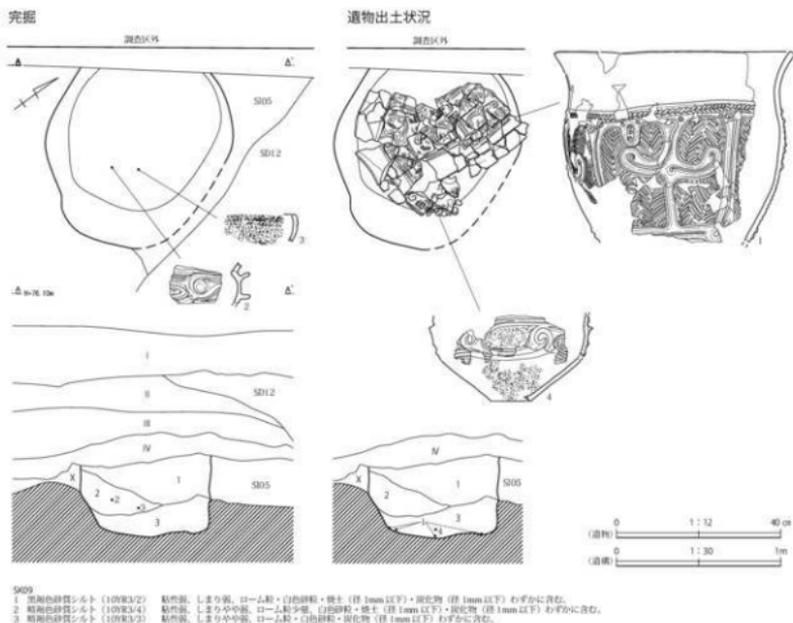
C区第9号土坑 (SK09 第13～15図、第6表、図版4・5・12・13)

C区南西部のSI05南西隅に重複して検出された。X・XI層（ローム層）を掘りこんで構築されており、遺構上端は削平されている。平面形は円形と推定され、断面形は箱形を呈する。壁は垂直に掘りこまれており、底面は平坦である。

規模 検出長で、長径1.21m×短径1.05m×深さ0.27m、調査区壁の断面から確認できるIV層直下から底面までの深さは0.49mを測る。

遺物 覆土・底面からは土器が計 10,856g 出土しており、そのうち縄文土器 4 点 (1～4) を図示した。1・3 は深鉢で、2・4 が浅鉢である。1 はいわゆる「大型甕形土器」(石塚 1986) や「連結渦巻文土器」(宮井 1989) と呼ばれているもので、埼玉県北部から群馬県南部で確認されている唐草文系と曾利系の要素を併せもつ一群である。4 つの大形破片がさらに破碎された状態で、底面から出土している。いずれも文様を上面にして敷かれており、大形破片同士は重なり合っていた。大形破片は 2 片ずつ接合可能だったが、接合された破片同士は接合しなかった。底部は出土しておらず、復元すると全体の 3/5 程度になる。口縁部は無文で、胴部上端に 2 条の隆帯と横位矢羽根状文を巡らす。胴部下端に横位隆帯を巡らし、隆帯による区画文と意匠文を施し、器面には縦位矢羽根状文を施す。曾利Ⅲ式段階併行。2 は渦巻文を立体的に施す。3 は刺突を伴う平行沈線と波状沈線を施している。4 は 1 と共伴して出土した。器面には櫛歯状工具による条線を施す。2・4 は加曾利 E Ⅲ式段階で、3 は連弧文系土器である。

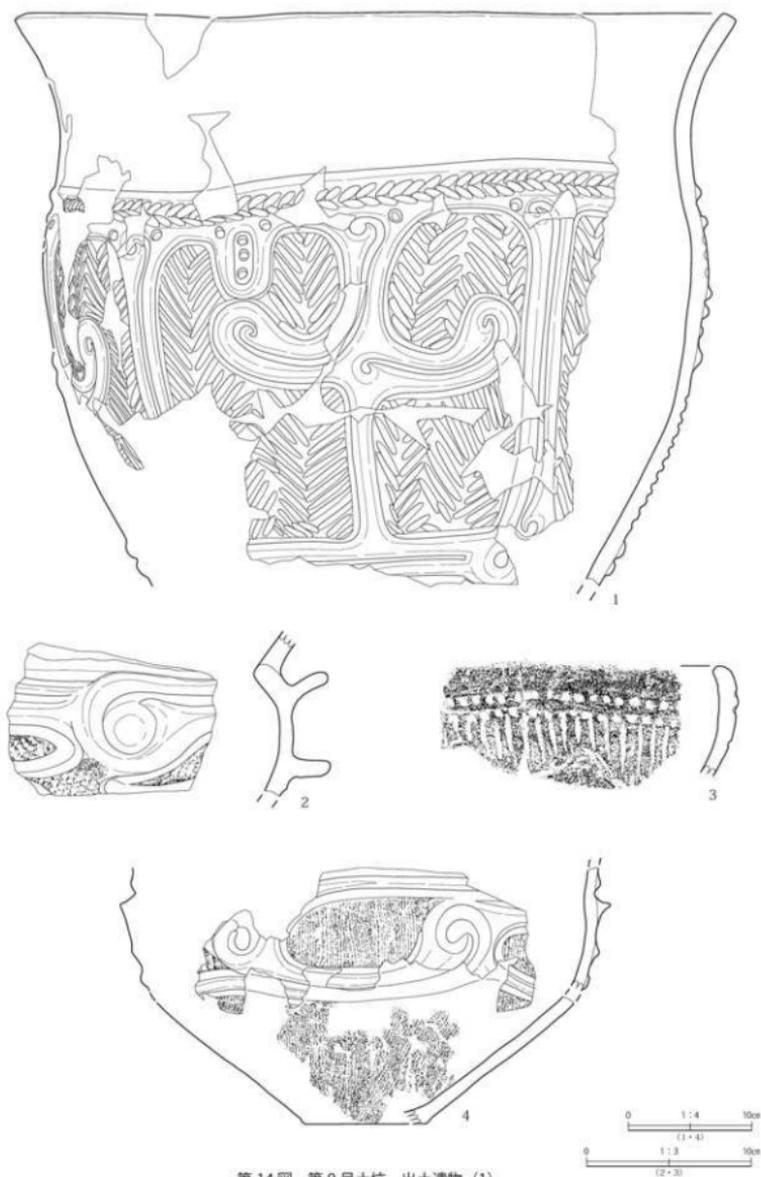
時期 加曾利 E Ⅲ式段階と考えられる。



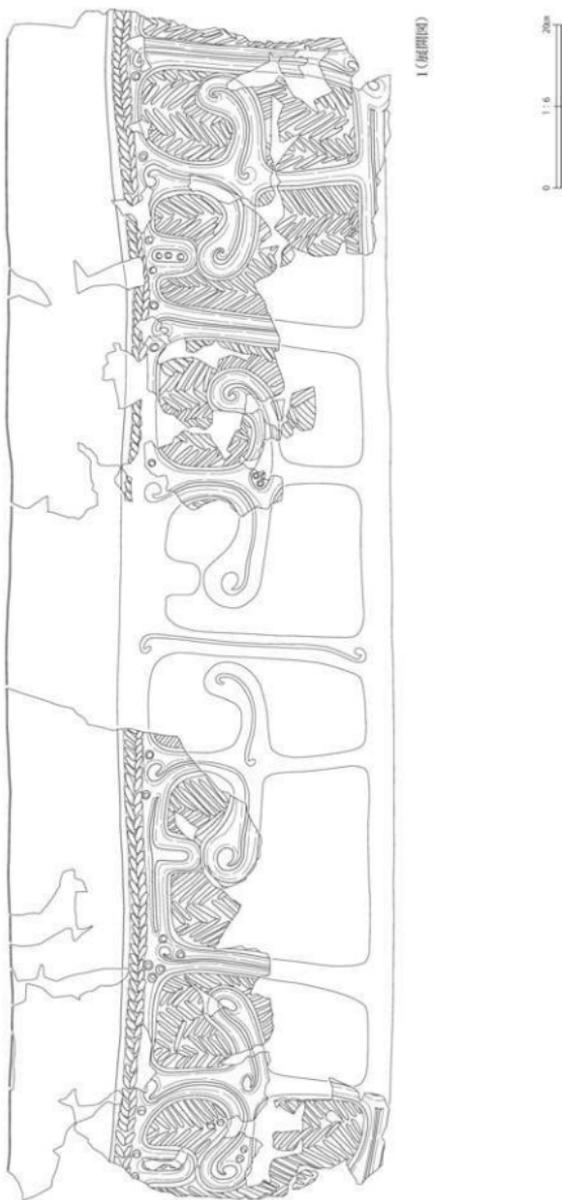
S105

- 1 常陸色砂質シムト (100%以下) 粘質泥、しまり質、ローム粒・白色砂粒・焼土 (径 1mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 2 常陸色砂質シムト (100%以下) 粘質泥、しまりや中硬、ローム粒少量、白砂粒・焼土 (径 1mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 3 常陸色砂質シムト (100%以下) 粘質泥、しまりや中硬、ローム粒・白色砂粒・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。

第 13 図 第 9 号土坑・遺物出土状況



第14図 第9号土坑 出土遺物(1)



第15図 第9号土坑 出土遺物 (2)

第6表 第9号土坑 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	1層器底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	文様の特徴	備考
1	底面	縄文土器	深鉢	56.2 (46.8)	微細石英・粘土・内閉石・片石・新雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR4/4 黒 外面：5YR4/0 赤黒	1層部～ 1/5	1層部は無文。胴部上端には2本の隆帯を巡らし、隆帯間に大形斜交文を施す。胴部は下部に縦帯の隆帯を巡らし、さらに隆帯間と沈線によって表面を区画する。区画内には隆帯と沈線による十字状に密着する意匠文を施し、胴面には縦帯が前面斜交文を充填する。	加曾利EⅢ式段階行
2	胴上之部	縄文土器	浅鉢	— (10.1)	微細石英・粘土・内閉石・片石・新雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR0/4 に近い暗 外面：7.5YR5/3 に近い赤	1層部 破片	全体の内隆帯と沈線による渦巻文と区画を配し、胴面には沈線 風文を施す。	加曾利EⅢ式段階
3	胴上之部	縄文土器	深鉢	— (6.7)	微細石英・粘土・内閉石・片石・新雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR5/4 に近い赤黒	1層部 破片	1層部下に横色の平行沈線を巡らし、沈線内に波線斜交文を施す。下部には高気沈線を巡らし、縦帯沈線を充填する。	濃灰文系土器 加曾利EⅢ式段階行 特殊赤色顔彩か
4	底面	縄文土器	浅鉢	— (20.9 9.8)	微細石英・粘土・内閉石・片石・新雲母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：10YR5/2 灰黒期	1層部～ 底面 1/5	隆帯と沈線による渦巻文と区画を配し、胴面には磨削状工具による条線を施す。	加曾利EⅢ式段階

(3) 埋設土器 (SK08・10)

埋設土器はC区で2基検出されている。なお、現地調査時では土坑としていたが、整理作業段階で第1号埋設土器 (SK08)・第2号埋設土器 (SK10) とした。

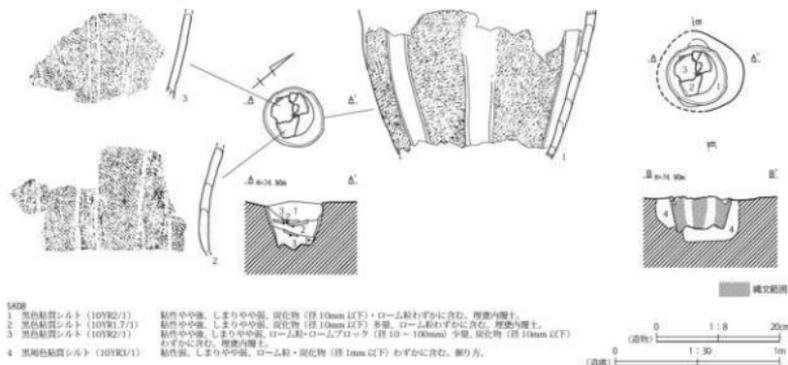
C区第1号埋設土器 (SK08 第16・17図、第7表、図版5・14)

C区南西部で、S105北東部に重複して検出された。Ⅶ・XI層(ローム層)を掘りこんで構築されており、遺構上端は削平されている。掘り方の平面形は楕円形を呈しており、土器よりも一回り大きく掘削し、深鉢胴部のみを正位の状態にて埋設している。埋設土器内の覆土は人為的埋土で、大形の土器片が数点混入していた。覆土2層中では径20mm以下の炭化物が7g出土した。

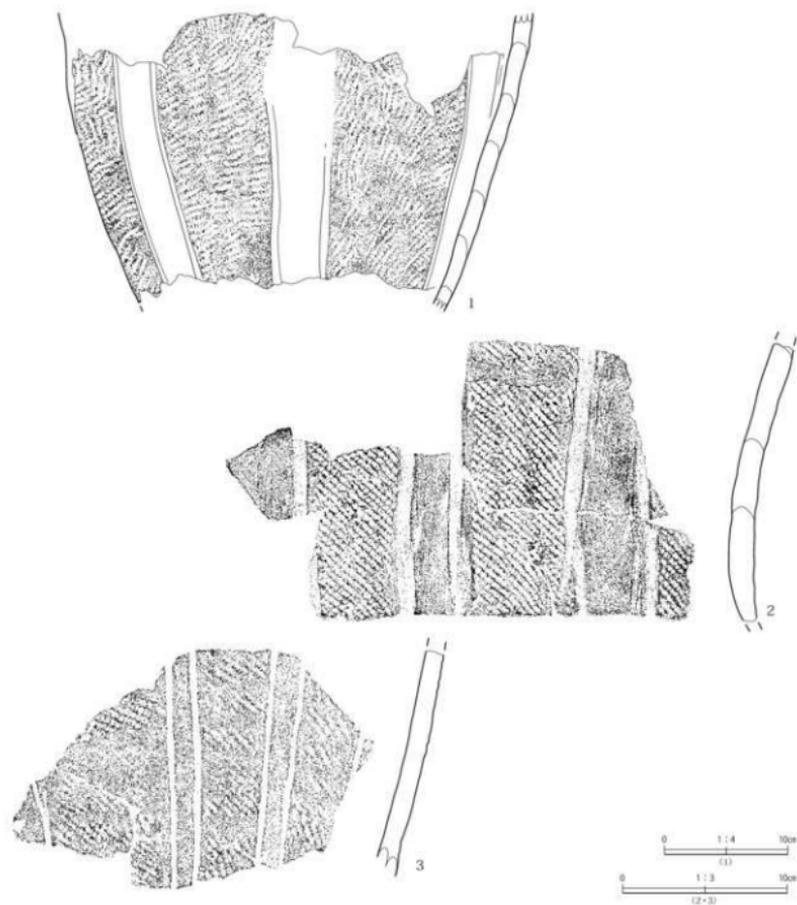
規 模 長径0.54m×短径0.49m×深さ0.27m

遺 物 埋設土器内からは計2,227g出土しており、1は埋設土器本体、2・3は埋設土器内から出土した別個体の土器である。1～3は深鉢で、加曾利EⅢ式段階である。胴部文様は、1・3が縦帯沈線による区画内に縄文を充填し、2は縄文を施文後、沈線間を磨り消す。

時 期 加曾利EⅢ式段階と考えられる。



第16図 第1号埋設土器



第17図 第1号埋設土器 出土遺物

第7表 第1号埋設土器 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	口径 器高 底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	文様の特徴	備考
1	埋設土器	縄文土器	深鉢	(24.3)	微細石英・長石・内閉石・片石・硝子砂・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR5/4 に近い黄	胴部	2条1単位の縦位の平行沈線を描し、区画内にはLR 縄文を充填する。	加曽利EⅡ式段階
2	埋設土器	縄文土器	深鉢	(17.0)	微細石英・長石・内閉石・片石・硝子砂・赤色砂粒・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR5/4 に近い黄 外面：7.5YR6/6 橙	胴部 底片	胴面にはLR 縄文を描す。2条の縦位沈線で断面を分割し、沈線の縄文を押し出す。	加曽利EⅡ式段階 断面由厚粒
3	埋設土器	縄文土器	深鉢	(13.8)	微細石英・長石・内閉石・片石・硝子砂・チャート・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：5YR6/6 橙 外面：7.5YR6/6 橙	胴部 底片	2条1単位の縦位の平行沈線を描し、区画内にはLR 縄文を充填する。	加曽利EⅡ式段階 下部部にス欠存

C区第2号埋設土器 (SK10 第18図、第8表、図版6・14)

C区北東部のⅦ層上面で検出された。構築はⅦ層上面、または中位からである可能性が高く、Ⅶ・Ⅷ層を掘りこんでいる。掘り方の平面形は円形で、断面形はU字状を呈する。埋設土器は、深鉢の口縁部～胴部上半を正位の状態で埋めている。埋設土器内の覆土はⅦ層土を主体としている。

規模 長径0.37m×短径0.36m×深さ0.22m

遺物 1は加曾利EⅢ式土器で、口縁に推定4単位の突起を付す。口縁部は隆帯と沈線によって渦巻文・区画文を施し、区画文内にRL縄文を充填する。胴部文様は、沈線による縦位区画が施されており、区画内にRL縄文を充填する。

時期 加曾利EⅢ式段階と考えられる。



第18図 第2号埋設土器・出土遺物

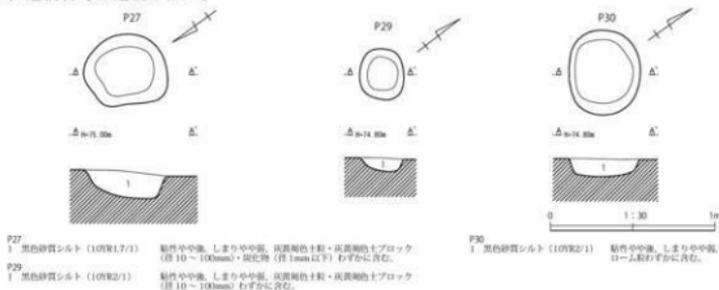
第8表 第2号埋設土器 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	口径・高さ・底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	文様の特徴	備考
1	埋設土器	縄文土器	深鉢	26.8 (16.3)	磨細石英・長石・角閃石・片岩・黒雲母・赤色磁鉄・黒色磁鉄	良好	内・外面: 10YR5/4 に近い黄褐色	1. 胴部・胴部	口縁部に突起を推定4単位付す。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文と区画文を施し、区画文内には縦、横文を充填する。胴部は縦位区画を区画し、区画内には縦、横文を施して彫り沈線を配する。	加曾利EⅢ式段階・胴部断面厚減

(4) 小穴 (P)

C区第27・29・30号小穴 (P27・P29・P30 第19図、第9表)

C区中央部から南西部にかけてのⅦ層上面で検出された。いずれも同層を掘りこんで構築されており、覆土はⅥ層土を主体としている。遺構は計測値を一覧として、以下にまとめた。なお、欠番があり、遺構番号は連続しない。



第19図 小穴

第9表 小穴計測表

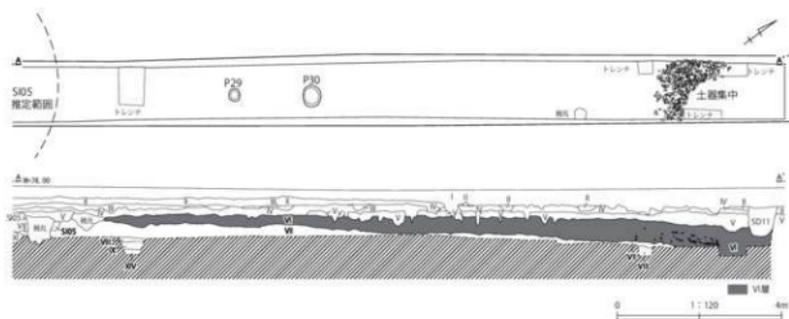
遺構名	検出層位	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	新旧関係	出土遺物 (個)	備考
P27	Ⅴ層	隅丸方形	直状	0.51	0.43	0.16		縄文土器 (370g)	
P28							欠部		
P29	Ⅴ層	隅丸方形	直状	0.31	0.27	0.08		縄文土器 (34g)	
P30	Ⅴ層	隅円形	直状	0.52	0.43	0.11		縄文土器 (120)	

(5) 遺物包含層

Ⅵ・Ⅶ層は、C区に堆積する遺物包含層である。土器はⅥ・Ⅶ層合わせてコンテナ6箱分出土しており、総重量は約141.052gである。石器はコンテナ1箱分で、総重量は約3,800gである。

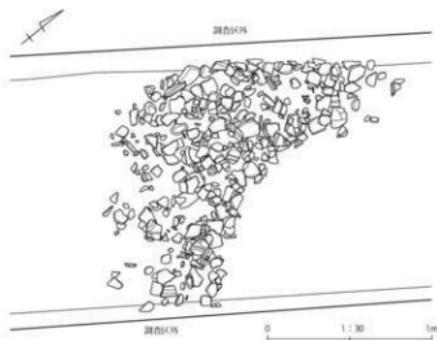
C区Ⅵ層 (第20～24図、第10・11表、図版6・15・16)

Ⅵ層は、縄文時代中期後葉～後期の土器が多く包含される黒色粘質シルト層で、調査区北端から16.4mの範囲で認められた。同層は、北東方向へ緩やかに傾斜して、C区内の深掘りトレンチ北東部で急激に落ち込み、最大層厚1.62mを測る。また同層中の北東部で、土器の出土密度が高い土器集層が確認された。



第20図 遺物包含層 Ⅵ層

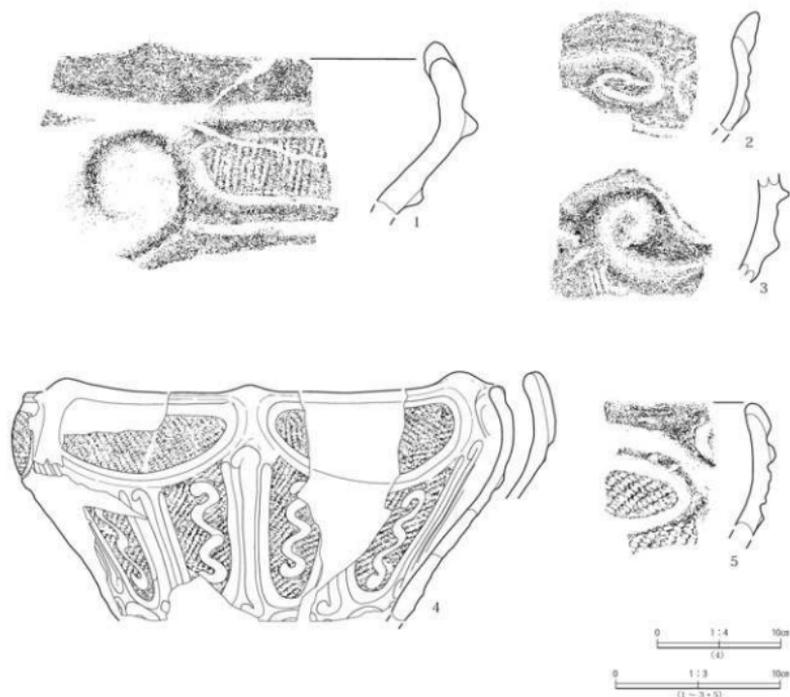
土器集中 C区北東部のⅥ層中で検出されたが、周囲には人為的な掘り込みが検出されなかった。北西側、南東側ともに調査区外まで範囲が広がると推定される。規模は検出部で東西1.12m×南北2.22mである。出土遺物は加曽利EⅢ～IV式段階が多く確認される。小・中形破片を主体としており、破片断面が磨耗している個体や、同一個体の破片が離れた位置から出土する例も認められた。



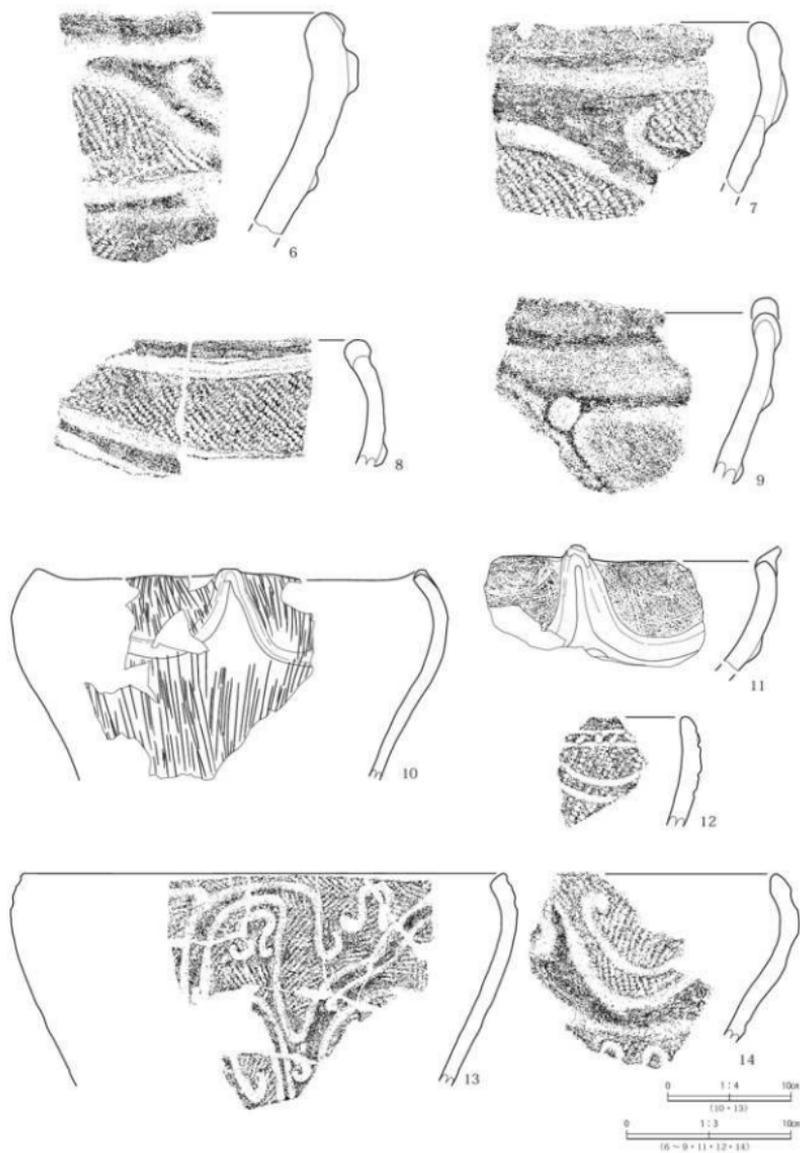
第21図 土器集中部 遺物出土状況

遺物 総重量は約95,000gで、そのうち土器集中からは約37,000g出土しており、加曾利EⅡ～Ⅳ式土器の他、連弧文系土器が確認できる。図示できたのは縄文土器22点(1～22)と石器12点(23～34)で、そのうち1・4・6・8・10・11・13・15は土器集中部からの出土である。1～21が深鉢で、22が浅鉢である。1～9は、加曾利E式系統に認められる隆帯による渦巻文や楕円形区画文を配している。10～12は、隆帯や沈線による弧状の区画文や弧状の平行沈線文を施す連弧文系土器である。胴部文様では、加曾利EⅣ式段階の口縁部直下まで隆帯と沈線で曲線的な文様を描くもの(13～15)や、区画文内部に文様を施すもの(16)、加曾利EⅢ式段階の2条の縦位沈線間の縄文を磨り消すもの(20・21)などがある。22は沈線のみで文様から、後期のものである可能性がある。23～34は石器で、23～26が打製石斧、27が打製石斧未成品、28・29・31が削器、30が搔器、32が使用痕のある剥片、33が凹石・砥石、34が磨石・敲石である。石材は23が結晶片岩、24・25・31が安山岩、26・29が頁岩、27・33が砂岩、28がホルンフェルス、32が黒曜石、34がヒン岩である。

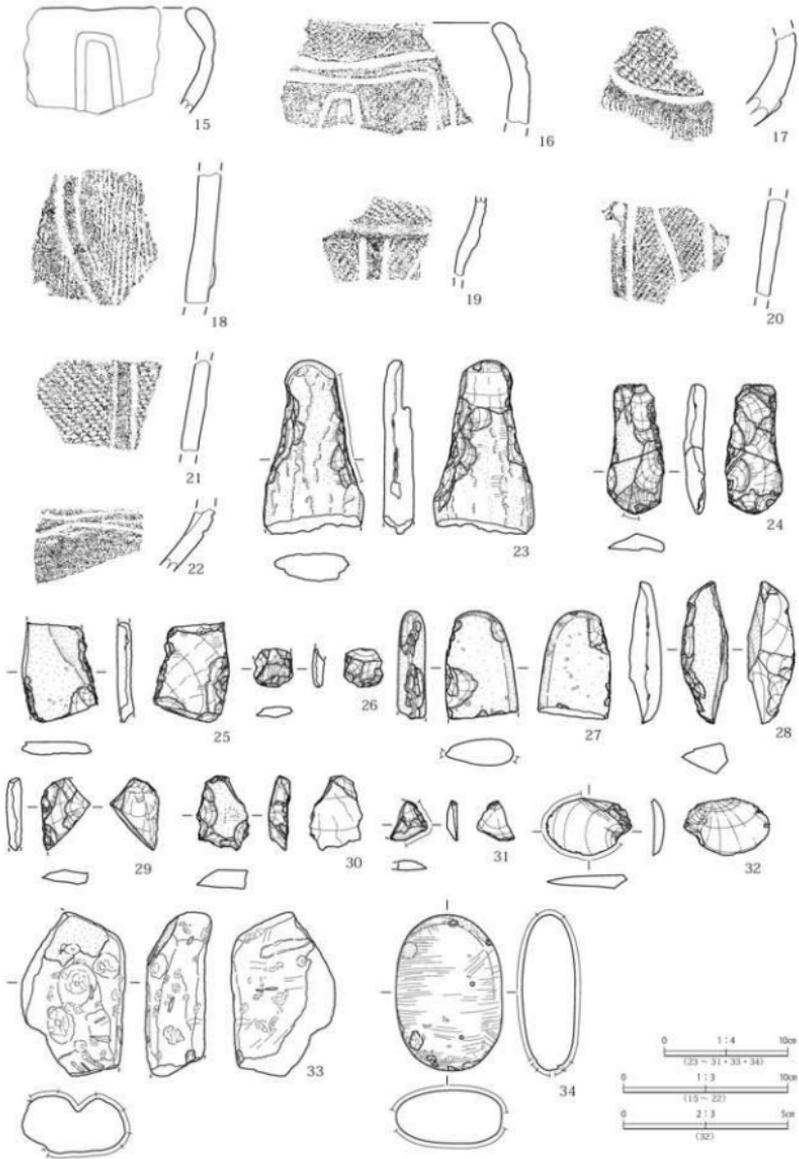
時期 形成時期は加曾利EⅢ式段階以降と考えられる。



第22図 遺物包含層 VI層 出土遺物(1)



第23図 遺物包含層 VI層 出土遺物(2)



第24図 遺物包含層 VI層 出土遺物 (3)

第IV章 検出された遺構と遺物

第10表 遺物包含層 V層 出土遺物観察表 (1)

No.	出土位置	層別	深層	口徑 底径 底径 (cm)	形状	土質	構成	色調	埋存部位	文様の特徴	備考
1	土層 集中	縄文 上層	深層	(10.5)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/6 橙	1層部 破片	1層部上端には山形突起を帯び付ける。1層部には隣層と区別による渦巻文と横内帯区画を配し、区画内には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
2	V層	縄文 上層	深層	(7.2)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：10YR6/4 に近い黄褐色 外面：7.5YR6/4 に近い黄褐色	1層部 破片	1層部は波状1線が、隣層と区別による渦巻文と区画を配する。	加賀市EⅡ式段階
3	V層	縄文 上層	深層	(6.6)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・赤色砂粒・ 黒色砂粒	良好	内・外面：10YR7/4 に近い黄褐色	1層部 破片	1層部には隣層による渦巻文を施す。断面には3条1線の区画を施す。	加賀市EⅡ式段階
4	土層 集中	縄文 上層	深層	(38.3) (20.4)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・赤色砂粒・ 黒色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 橙	1層部 破片 1/2	1層部上端には2単位の小型突起が埋存。1層部には隣層と区画による渦巻文と横内帯区画を配し、区画内には丸縄文を充填する。断面には丸縄文を施す。1字状波紋文、蛇行波紋、わらび字文を施す。	加賀市EⅡ式段階
5	V層	縄文 上層	深層	(6.2)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：5YR5/4 に近い赤褐色 外面：7.5YR6/6 橙	1層部 破片	1層部には隣層と区画による渦巻文と横内帯区画を配し、区画内には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
6	土層 集中	縄文 上層	深層	(13.6)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：10YR7/6 明黄褐色	1層部 破片	1層部には隣層と区画による渦巻文と横内帯区画を配し、区画内には丸縄文を充填する。断面には丸縄文を施す。	加賀市EⅡ式段階
7	V層	縄文 上層	深層	(10.4)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 橙	1層部 破片	1層部には隣層と区画による渦巻文と横内帯区画を配し、区画内には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
8	土層 集中	縄文 上層	深層	(7.7)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/6 橙 外面：5YR6/6 橙	1層部 破片	1層部には隣層と区画による区画文を配し、区画内には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
9	V層	縄文 上層	浅層	(11.4)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/6 橙	1層部 破片	隣層による区画文と円形突起が施される。区画内には1条縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
10	土層 集中	縄文 上層	深層	(31.4) (17.2)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR4/4 藍 外面：10YR6/3 に近い黄褐色	1層部 破片 1/5	1層部には隣層による縦位の区画文を配し、その端部を1層部上端で区画文として繋ぎ合わせる。断面には条線を施す。	透気係土層 加賀市EⅡ式段階併行
11	土層 集中	縄文 上層	深層	(7.3)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/6 に近い黄褐色 外面：7.5YR5/4 に近い黄褐色	1層部 破片	1層部には隣層による縦位の区画文を配し、その端部を1層部上端で区画文として繋ぎ合わせる。断面には条線を施す。	透気係土層 加賀市EⅡ式段階併行
12	V層	縄文 上層	深層	(6.7)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・赤色砂粒・ 黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/6 橙	1層部 破片	断面には1条縄文を施す。1層部下には波状の帯状区画を施す。1層部下には縦位の区画文を配し、区画内には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階併行
13	土層 集中	縄文 上層	深層	(39.0) (17.3)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/6 橙 外面：7.5YR6/4 に近い黄褐色	1層部 破片 1/5	端部に渦巻文を伴う区画文を施す。断面には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
14	V層	縄文 上層	深層	(10.3)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/4 に近い黄褐色 外面：7.5YR7/4 に近い黄褐色	1層部 破片	軸位の隣層と端部に渦巻文を伴う区画文を施す。断面には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
15	土層 集中	縄文 上層	深層	(6.4)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・赤色砂粒・ 黒色砂粒	良好	外面：5YR5/6 明黄褐色 内面：7.5YR5/6 明黄褐色	1層部 破片	区画による逆U字状の文様を施す。	加賀市EⅡ式段階
16	V層	縄文 上層	深層	(6.2)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR7/6 橙 外面：5YR6/6 橙	1層部 破片	1層部には1条縄文。断面は区画による区画文を施し、内に区画による逆U字状の文様と縦位の丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
17	V層	縄文 上層	深層	(5.7)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/4 に近い黄褐色	1層部 破片	1層部には隣層と区画による区画文を配し、区画内には丸縄文を充填する。断面には条線が施される。	加賀市EⅡ式段階
18	V層	縄文 上層	深層	(6.0)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR5/6 明黄褐色	破片	断面には帯状文を施す。隣層を帯び付ける。	加賀市EⅡ式段階併行
19	V層	縄文 上層	深層	(4.8)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・赤色砂粒・ 黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/4 に近い黄褐色 外面：10YR6/4 に近い黄褐色	1層部 破片	1層部は縦位の隣層と区画によって区画される。断面は2条の縦位の区画文によって区画され、区画間の縄文を伴って逆U字状の区画文を施す。断面には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
20	V層	縄文 上層	深層	(5.9)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・チャート・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：5YR6/6 橙 外面：7.5YR6/4 に近い黄褐色	破片	2条の縦位の区画で断面を分割し、区画間の縄文を伴って逆U字状の区画文を施す。区画内には丸縄文を充填する。	加賀市EⅡ式段階
21	V層	縄文 上層	深層	(5.5)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・網目母・赤色砂粒・ 黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/6 橙 外面：5YR6/6 橙	破片	断面には縦帯1条、縄文を施す。2条の縦位の区画で断面を分割し、区画間の縄文を伴って逆U字状の区画文を施す。	加賀市EⅡ式段階併行
22	V層	縄文 上層	浅層	(3.8)	—	縄織石莖・長石・内閉石・ 片貝・赤色砂粒	良好	内面：5YR4/3 に近い赤褐色 外面：7.5YR4/3 藍	破片	断面に2条の逆U字状の区画文を施す。	後期か

第11表 遺物包含層 VI層 出土遺物観察表 (2)

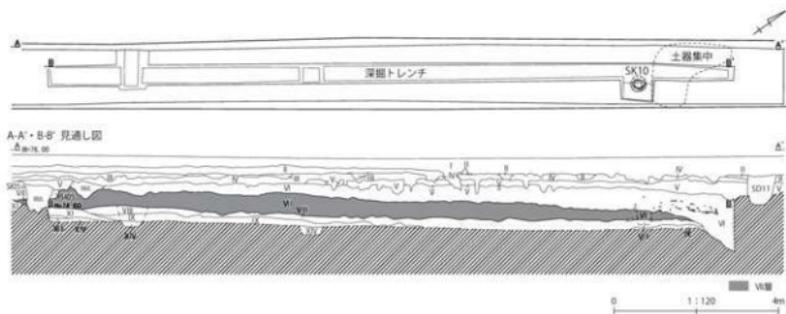
No	出土位置	種類	細類	備考
23	V層	石器	打製石斧	結晶片石製 長さ14.2cm 幅8.1cm 厚み2.5cm 重量329.5g 刃部欠損
24	V層	石器	打製石斧	結晶片製 長さ10.6cm 幅4.6cm 厚み1.7cm 重量87.6g 刃部 刃部に顕著な使用痕あり
25	V層	石器	打製石斧	結晶片製 長さ8.2cm 幅0.1cm 厚み1.4cm 重量82.7g 基・刃部欠損 焼痕
26	V層	石器	打製石斧	結晶片製 長さ13.1cm 幅3.1cm 厚み1cm 重量10.0g 刃部破片 刃部に顕著な使用痕あり
27	V層	石器	打製石斧未成器	結晶片製 長さ8.8cm 幅5.9cm 厚み2.3cm 重量182.3g
28	V層	石器	削器	ホルンフェルス製 長さ11.6cm 幅3.8cm 厚み2.6cm 重量103.6g 刃部
29	V層	石器	削器	ガラス質結晶片製 長さ15.9cm 幅4cm 厚み1.2cm 重量27.0g 右・下端部欠損
30	V層	石器	種器	結晶片製 長さ6.1cm 幅4.2cm 厚み1.7cm 重量50.1g 刃部
31	V層	石器	削器	結晶片製 長さ13.3cm 幅3cm 厚み0.9cm 重量7.2g 左平部欠損
32	V層	石器	使用痕のある削片	結晶片製 長さ1.8cm 幅2.6cm 厚み0.5cm 重量1.8g 刃部 左側部～下端に微細刻線痕あり
33	V層	石器	凹石・砥石	砂岩製 長さ13.4cm 幅8.4cm 厚み5.4cm 重量355.6g 左・下端部欠損
34	V層	石器	磨石・砥石	珪石製 長さ12.7cm 幅8.6cm 厚み4.5cm 重量727.7g 刃部

C区VII層 (第25～27図、第12表、図版6・17)

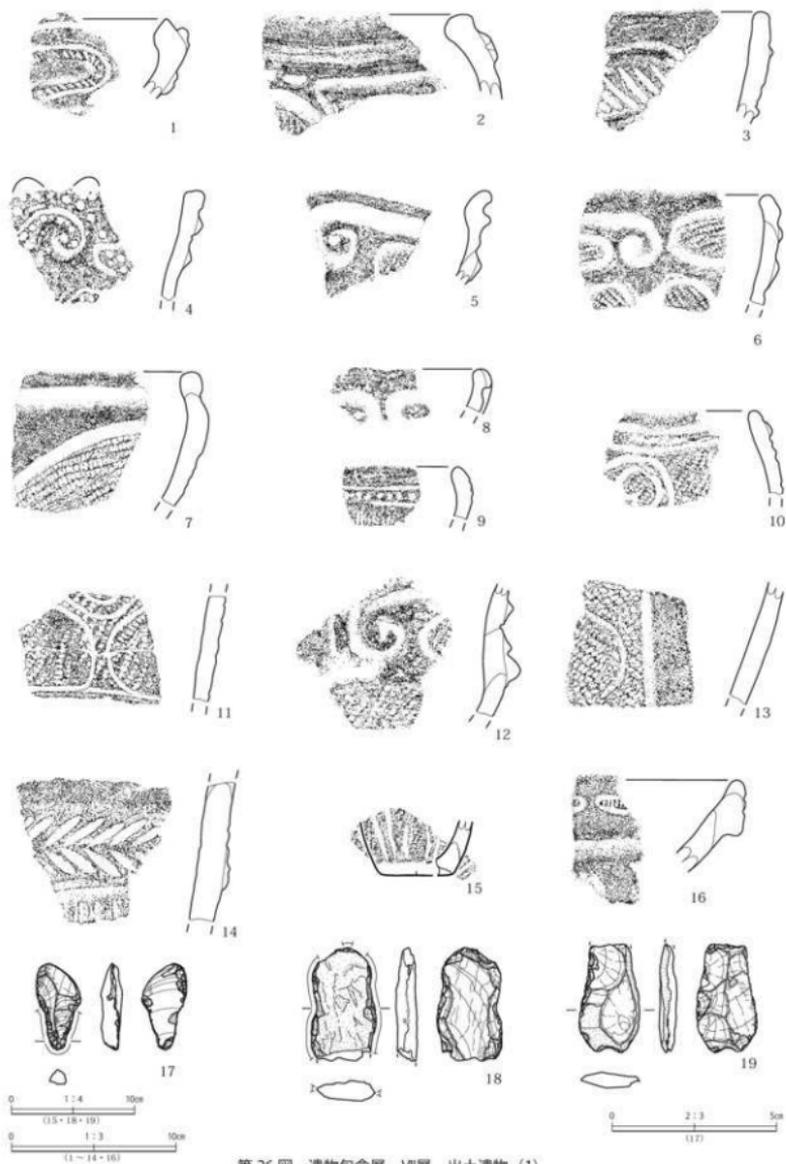
VII層は暗褐色粘質シルトで、C区北端から南東方向16.6mの範囲で確認されており、最大層厚は0.48mを測る。北東方向へ傾斜しつつ堆積し、IV層落ち込み部で途切れる。

遺物 土器・石器が合計37,770g出土しており、勝坂2式～加曾利EⅢ式段階までの遺物が確認されている。そのうち縄文土器16点(1～16)と、石器6点(17～22)を図示した。1～15は深鉢で、16は浅鉢である。1は勝坂式で、隆帯区画内に刻目を施した隆帯で文様を施す。2～8・10・12は、隆帯や沈線による渦巻文や楕円形区画文を配し、そのうち4は頂部が二叉状で、円形押圧を施す唐草文系の土器である。10は沈線のみによる渦巻文を施す。その他、連弧文系の沈線文を施すもの(9・11)、唐草文系の区画隆帯上に横位矢羽根状文を施すもの(14)が認められる。胴部文様では、加曾利EⅢ式段階の2条の縦位沈線間の縄文を磨り消すもの(13・15)がある。16は楕円形内に刻目を施したモチーフを口縁部に配する。17～22は石器で、17が石錐、18～20が打製石斧、21・22がピエス・エスキューである。石材は17・21・22が黒曜石、18が結晶片岩、19・20が安山岩である。

時期 VII層との上下関係や出土遺物及びSK08・10が本層を掘り込んで構築されていることから、加曾利EⅢ式段階以前の堆積と考えられる。



第25図 遺物包含層 VII層



第26図 遺物包含層 VII層 出土遺物 (1)



第27図 遺物包含層 VII層 出土遺物(2)

第12表 遺物包含層 VII層 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	形状	口徑 高さ 底径 (cm)	胎土	構成	色調	残存部位	文様の特徴	備考
1	V層	縄文土器	深鉢小	(4.9)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR4/6 赤褐色	1層部 破片	隆帯で器面を区画し、隆帯上に沈線と斜目文を施す。	加付料EⅡ式陶器
2	V層	縄文土器	深鉢	(5.2)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 褐色	1層部 破片	隆帯と沈線による区画文を配し、区画内には斜目文を充填する。隆帯上に斜目文を施す。	加付料EⅡ式陶器
3	V層	縄文土器	深鉢	(6.9)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR5/6 明赤褐色	1層部 破片	1層部には隆帯と沈線による横内区画文を配し、区画内には赤褐色斜位の沈線文を充填する。	加付料EⅡ式陶器
4	V層	縄文土器	深鉢	(6.7)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR5/6 明赤褐色	1層部 破片	波状沈線で、胴部が二分状になる。隆帯で器面を区画し、沈線と斜目文を施す。	香取文系土器 加付料EⅡ式陶器併行
5	V層	縄文土器	深鉢	(5.7)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR5/4 に赤い網罟母 外面：5YR5/4 に赤い赤褐色	1層部 破片	隆帯と沈線による器面を区画し、横内区画文を配し、区画内には斜目文を充填する。	加付料EⅡ式陶器
6	V層	縄文土器	深鉢	(6.8)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：5YR5/6 明赤褐色 外面：5YR6/6 褐色	1層部 破片	1層部には隆帯と沈線による器面を区画し、横内区画文を配し、区画内には斜目文を充填する。胴部も区画文内に斜目文を充填する。	加付料EⅡ式陶器
7	V層	縄文土器	深鉢	(6.2)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR5/4 に赤い網罟母 外面：7.5YR4/4 に赤い赤褐色	1層部 破片	1層部には隆帯と沈線による区画文を配し、区画内には斜目文を充填する。	加付料EⅡ式陶器
8	V層	縄文土器	深鉢	(2.6)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：5YR5/6 明赤褐色	1層部 破片	1層部には隆帯と沈線による器面を区画し、区画内には斜目文を充填する。	加付料EⅡ式陶器
9	V層	縄文土器	小形深鉢	(3.2)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・チャート・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/4 に赤い網罟母	1層部 破片	1層部には横帯平行沈線を施す。沈線間に連続斜目文を施す。胴部には赤褐色を施す。	香取文系土器 加付料EⅡ式陶器併行
10	V層	縄文土器	深鉢	(5.1)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・チャート・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR5/4 に赤い網罟母 外面：5YR6/6 褐色	1層部 破片	胴部には斜目文を施す。1層部下には1条の沈線と沈線を施す。1層部には沈線による器面を区画する。	加付料EⅡ式陶器
11	V層	縄文土器	深鉢	(6.4)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：5YR6/4 に赤い網罟母 外面：7.5YR6/4 に赤い網罟母	1層部 破片	胴部には斜目文を施す。1層部下は横帯平行沈線を施す。1層部には沈線と文様を施す。	香取文系土器 加付料EⅡ式陶器併行
12	V層	縄文土器	深鉢	(6.1)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR5/4 に赤い網罟母 外面：5YR5/6 明赤褐色	1層部 破片	1層部には斜目文を施す。胴部には斜目文を配する。胴部には斜目文を施す。	加付料EⅡ式陶器
13	V層	縄文土器	深鉢	(7.5)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR4/4 褐色 外面：7.5YR6/4 に赤い網罟母	胴部 破片	胴部には波状1L沈線を施す。2条の褐色沈線で器面を区画し、沈線間の斜目文を施す。区画内には斜目文を施す。	加付料EⅡ式陶器
14	V層	縄文土器	深鉢	(6.5)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/3 に赤い網罟母 外面：7.5YR5/4 に赤い網罟母	1層部 破片	1層部下は横帯平行沈線を施す。隆帯上に横帯平行沈線文を施す。胴部には横帯平行沈線を施す。	香取文系土器 加付料EⅡ式陶器併行
15	V層	縄文土器	小形深鉢	(4.5) (6.0)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/4 に赤い網罟母 外面：7.5YR5/4 に赤い網罟母	底部 2/3	胴部には斜目文を施す。沈線による縦位の区画文を施し、沈線間の斜目文を施す。	加付料EⅡ式陶器
16	V層	縄文土器	浅鉢	(5.6)	黄緑石英・長石・内閉石・片貝・網罟母・赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/8 褐色	1層部 破片	1層部には沈線で横内モチーフの内に斜目文を施す。	横帯3式陶器併行

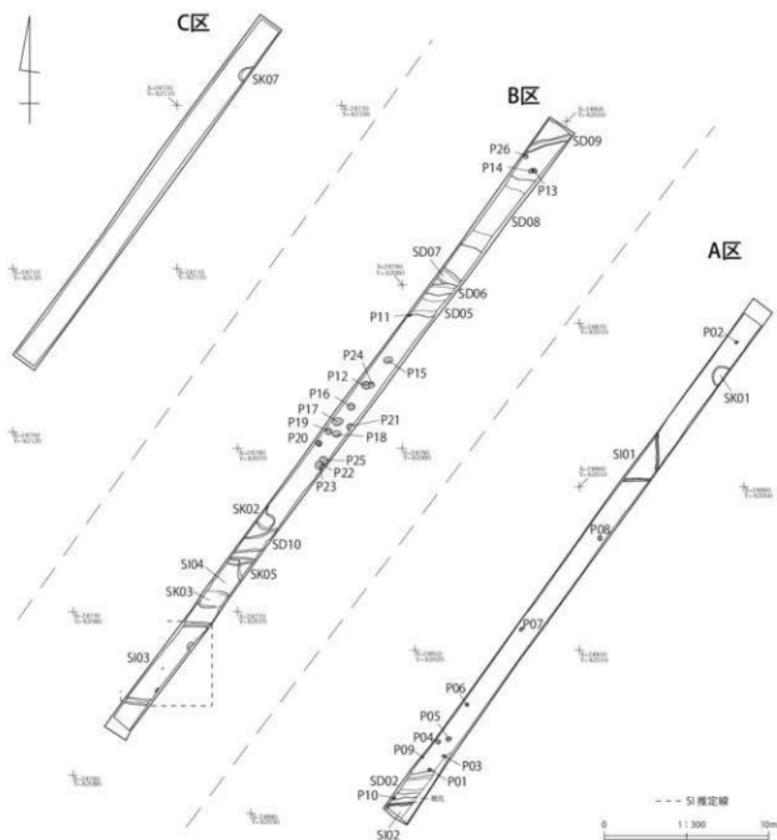
No.	出土位置	種類	形状	備考
17	V層	石器	石鏃	黒曜石製 長さ2.6cm 幅1.4cm 厚み0.7cm 重量1.8g 完形 胴部に溝あり
18	V層	石器	打製石片	結晶片割製 長さ19.3cm 幅5.3cm 厚み1.7cm 重量113.6g 刃部欠損
19	V層	石器	打製石片	安山岩割製 長さ18.6cm 幅4.9cm 厚み1.4cm 重量59.8g 基部欠損 両側
20	V層	石器	打製石片	安山岩割製 長さ17.7cm 幅13.9cm 厚み1.5cm 重量39.8g 基部・刃部欠損 両側
21	V層	石器	ピレス・エスキュー	黒曜石製 長さ2.4cm 幅1.5cm 厚み1.7cm 重量5.3g 完形
22	V層	石器	ピレス・エスキュー	黒曜石製 長さ1.8cm 幅1.1cm 厚み0.6cm 重量0.6g 完形

第3節 古代の遺構と遺物

飛鳥～平安時代の遺構と遺物が確認された。遺構は竪穴建物4軒(SI01～04)、土坑5基(SK01～03・05・07)、溝7条(SD02・05～10)、小穴26基(P01～26)で、SK07以外はA・B区で検出されている(第28図)。遺物は土師器(甕・坏・甗等)、ロクロ土師器(高台付坏)、須恵器(甕・坏・高台付坏・埴)、灰軸陶器(長頸瓶)、鉄製品(鎌・刀子・釘)、石製品(砥石・こも編み石)、焼成粘土塊が出土している。

(1) 竪穴建物(SI)

竪穴建物はA・B区で検出されている。カマドが検出されたのはSI02のみである。竪穴建物はいずれも主軸方位が近似している。



第28図 古代の遺構配置図

A区第1号竪穴建物 (S101 第29・30図、第13表、図版6・18)

本建物はA区北東部のXI層(ローム層)上面で検出されており、同層を掘りこんで構築されている。遺構上端は削平されており、上面をIV層が被覆している。SX01と重複し、それよりも古い。検出部は竪穴建物の南東部約1/3である。竪穴建物の東・南壁は直線的に延びることから、平面形は方形もしくは長方形であると推定される。

規模 検出長で、東西2.25m×南北2.96mを測る。

主軸方位 東壁でN-1°-Wを測る。

壁高 床面から検出面まで0.15mを測り、垂直に立ち上がる。

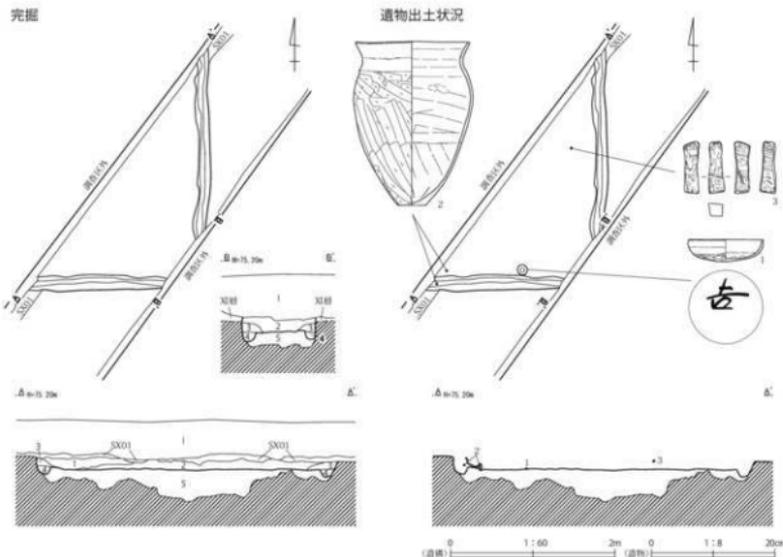
壁溝 東・南壁際で検出された。幅0.18m、深さ0.09mを測る。

床面 ロームブロックとにぶい黄褐色土を混合した埋土の上面を床面としている。平坦で締りはやや弱く、硬化面と貼り床は確認できなかった。

カマド 検出されなかった。焼土や炭化物の分布も確認されなかったことから、調査区外に構築されていると推定される。

柱穴 検出されなかった。

遺物 覆土・床面・掘り方から土師器・石製品類が合計918g出土しており、そのうち床面から



S101

1 褐色粘りシルト (10YR4/4)

2 褐色粘りシルト (10YR4/4)

3 褐色粘りシルト (10YR4/3)

4 にぶい黄褐色粘りシルト (10YR4/3)

5 にぶい黄褐色粘りシルト (10YR4/3)

粘りや中粘、しまりや中粘、褐色粘りシルト類に少粘、焼土 (径 2mm 以下)・炭化物 (径 3mm 以下) わずかに含む。

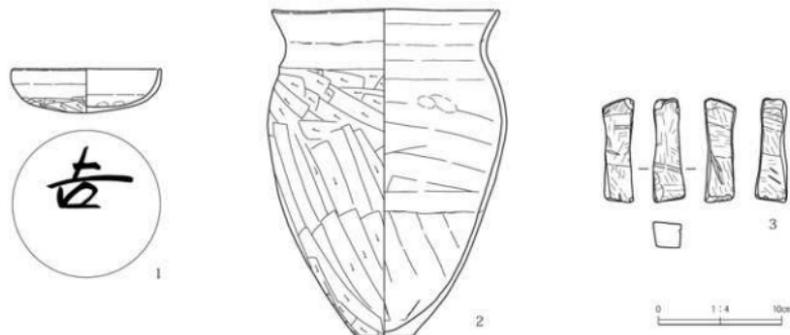
粘りや中粘、しまりや中粘、ローム土・焼土 (径 2mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。

粘りや中粘、しまりや中粘、ローム土・焼土 (径 1mm 以下) わずかに含む。

粘りや中粘、しまりや中粘、ローム土・焼土 (径 1mm 以下) わずかに含む。均質。

粘りや中粘、しまりや中粘、ローム土・ロームブロック やや多く、炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。掘り方。

第29図 第1号竪穴建物



第30図 第1号竪穴建物 出土遺物

第13表 第1号竪穴建物 出土遺物観察表

No.	種別	器種	口径 底径 高さ (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	手法の特徴	備考	
1	土師器	環	12.0 3.6 10.6	黄緑石英・角閃石・ 銅雲母・白色砂粒	良好	内面：7.5XR5/8 外面：7.5XR6/6	明細 器	完形	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部筋直押正。 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。	底部外面「吉」の墨書あり
2	土師器	甕	18.2 26.7 4.6	黄緑石英・粘土・角閃石・ 赤色砂粒・黑色砂粒	良好	内面：7.5XR5/6 外面：7.5XR6/6	明細 器	口縁部～ 底部 3/4	内面：口縁部ヨコナデ、胴部筋直押正、胴部～底部ヘ ラケズリ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。	
備考										
3	覆土2層	石製品	硖石	砂岩製	長さ8.5cm 幅3.1cm 厚み2.5cm 重量50.0g	完形	縦面6面			

出土した土師器2点(1・2)、石製品1点(3)を図示した。1は、やや平底気味を呈する環である。口縁部は内湾しながら緩く垂直に立ち上がる。底部外面にはヘラケズリ調整が施され、「吉」の墨書が確認できる。2は武蔵型の甕である。口縁部は外反しながら「く」の字状に緩く立ち上がり、胴部上位で最大径を測る。内面はナデ調整を行っており、外面はヘラケズリ調整を施している。3は砂岩製の柱状砥石で、荒砥としての用途が考えられる。

時期 出土遺物から、本建物の時期は8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

A区第2号竪穴建物 (S102 第31図、第14表、図版7・18)

本建物はA区南西部のⅪ層(ローム層)上面で検出されており、同層を掘りこんで構築されている。遺構上端は削平されており、上面をⅣ層が被覆している。重複する遺構はない。検出部は竪穴建物の北東部約1/5である。北壁が直線的に延びることから、平面形は方形もしくは長方形であると推定される。カマド袖の一部とカマドに由来する焼土が、調査区西壁断面で確認された。

規模 検出長で東西1.62m×南北0.93mを測る。

主軸方位 北壁でN-94°-Wを測る。

壁高 床面から検出面まで0.30mを測り、垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁際で一部検出された。幅0.18m、深さ0.12mを測る。

床面 ロームブロックとにぶい黄褐色土を混合した埋土の上面を床面としている。貼り床は確認できなかったが、カマド袖付近は硬く締まっていた。

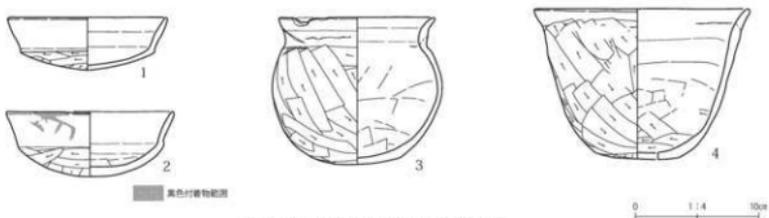
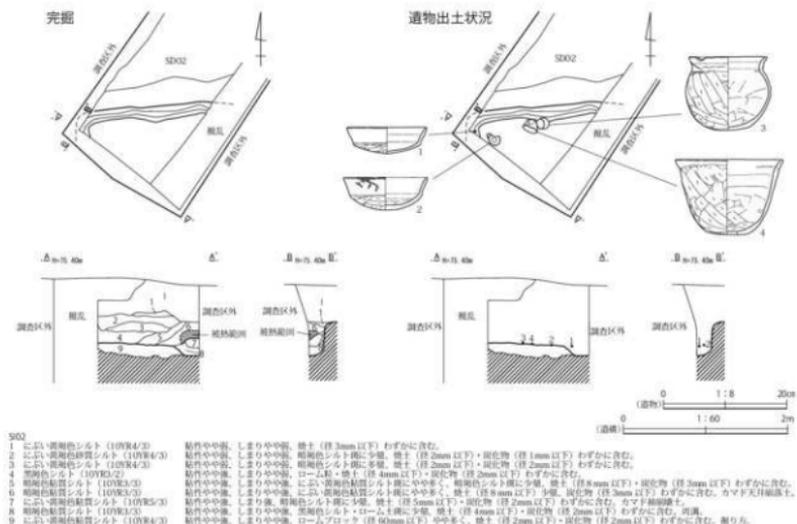
カマド 調査区西壁断面で検出された。覆土6層はカマド天井の崩落土、覆土7層はカマドの袖

が崩壊した土と考えられる。カマドはにぶい黄褐色粘質土で構築されており、袖部はやや黄色みが強い。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 覆土・床面・掘り方およびカマド崩落土からは土師器が計 207g 出土しており、そのうち、カマド崩落土と床面直上で出土した土師器 4 点 (1~4) を図示した。1・2 は丸底の坏である。口縁部は外傾しながらやや膨らみをもって立ち上がり、底部はヘラケズリ調整を行っている。1 に比べ 2 はやや大振りで、胎土が粗く、口縁部外面に文字状の黒色の付着物がみられる。3 は小形甕である。器形は球胴状で、口縁部は短くコの字状を呈し、一部焼成前に片口状に整形している。胴部から底部はヘラケズリ調整である。4 は単孔の小形甕である。底部は平底気味で、胴部が緩く外傾しながら立ち上がり、口縁部は外傾して短く立ち上がる。胴部から底部はヘラケズリ調整を行い、調整後に穿孔される。

時 期 出土遺物から、本建物の時期は 6 世紀末~7 世紀前葉と考えられる。



第 31 図 第 2 号壁穴建物・出土遺物

第IV章 検出された遺構と遺物

第14表 第2号竪穴建物 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	口径 底径 底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	手法の特徴	備考
1	カマド 前段上	土師器	杯	12.7 4.3 —	鉄耀石莖・白色砂料・ 赤色砂料・黒色砂料	良好	内・外面：7.5YR5/6 橙	口縁部～ 底部 1/3	内面：口縁部～底部はコナデ、底部は磨理仕。 外面：口縁部コナデ、底部ヘラケズリ。	
2	床面	土師器	杯	13.4 5.3 —	鉄耀石莖・長石・内閉石・ 赤色砂料・黒色砂料	良好	内面：10YR5/4 に近い黄褐色 外面：7.5YR5/4 に近い橙	ほぼ完存	内面：口縁部コナデ、体部ヘラケズリ。 外面：口縁部コナデ、体部ヘラケズリ。	文字状の黒色付着物
3	床面	土師器	小形甕	12.5 12.0 6.9	鉄耀石莖・長石・内閉石・ 赤色砂料・黒色砂料	良好	内面：5YR5/4 に近い赤褐色 外面：5YR5/4 に近い橙	ほぼ完存	内面：口縁部コナデ、胴部～底部ヘラケズリ。 外面：口縁部コナデ、胴部～底部ヘラケズリ。	口縁部1/3破
4	床面	土師器	甕	17.1 12.3 7.0	鉄耀石莖・長石・内閉石・ 赤色砂料・黒色砂料・ 細砂	良好	内・外面：2.5YR5/6 明赤褐色	ほぼ完存	内面：口縁部コナデ、胴部ヘラケズリ、底部厚乳瓦、ヘラケズリ。 外面：口縁部コナデ、胴部～底部ヘラケズリ。	焼成前穴 孔径3.4cm

B区第3号竪穴建物 (S103 第32～34図、第15・16表、図版7・18・19)

本建物はB区西部のXI層（ローム層）上面で検出されており、断面の観察からX・XI層を掘りこんで構築されている。遺構上端は削平されており、上面をIV層が被覆している。重複する遺構はない。検出部は竪穴建物の中央部約1/3と推定される。北壁と南壁が直線的に延び、北東隅が検出されていることから、推定される東壁は南壁よりも短く、平面形は長方形であると推定される。

規模 北東隅が検出されていることから、東西推定5.2m程度×南北5.1mを測る。

主軸方位 北壁でN-86°-Wを測る。

壁高 床面から検出面まで0.40mを測る。調査区壁の断面から確認できる壁高は0.51mを測り、垂直に立ち上がる。

壁溝 南・北壁際で検出された。幅0.38m、深さ0.16mを測る。

床面 ロームブロックとにぶい黄褐色土を混合した埋土の上面を床面としている。平坦で堅く締まっており、貼り床は確認できなかったが、竪穴建物中央部の床面は硬化していた。

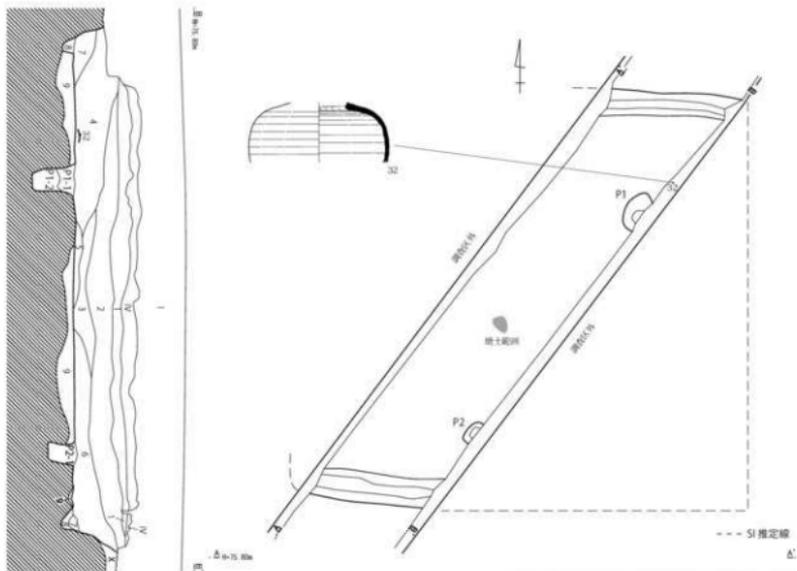
カマド 検出されなかったが、竪穴建物中央部のやや南西寄り、床面が被熱により赤化していた。被熱範囲は楕円形を呈しており、周囲には炭化物、灰等は確認できなかったが、直上の覆土には粘土が混じっていた。

柱穴 2基（P1・2）検出された。床面からの深さはP1 = 0.51m、P2 = 0.35mを測る。配置や深さから、主柱穴と考えられるものはP1のみと推定される。

遺物 覆土・床面・掘り方から土器・鉄製品・焼成粘土塊が合わせて14,787g出土しており、そのうち土器32点、鉄製品5点を図示した。土器は1～23が土師器、24がロクロ土師器、25～31が須恵器、32は灰軸陶器である。33～37は鉄製品である。1～15は杯で、そのうち11以外は平底を呈している。2・6は他の個体と比べ、胎土が精製されている。器形は、体部が外傾し口縁端部がやや外反するもの（1・2）、底部から体部にかけて強く屈曲し緩やかに内湾しながら立ち上がるもの（3・4）と短く直線的に立ち上がるもの（5）、体部と口縁部が内湾しながら立ち上がるもの（6～8）、体部が緩やかに内湾し口縁部が垂直に立ち上がるもの（9）がある。10は口径が約7cmと小形である。11～15は放射状や螺旋状の暗文を施すもので、そのうち11・13は沈線状の暗文が施される。また5・7・12・14・15は、体部に竹管状工具による刺突が施されている。16～20は武蔵型甕で、17・18は、口縁部がややコの字形に屈曲する。18は他の個体と比べ、胎土が砂質で器面がざらつく。20は、カマドの構築材と考えられる粘土と煤が付着している。21・22は台付甕の台部である。22は胎土が砂質で器面がざらついている。23は甕を転用した甕で、内面からの打ち欠きで

穿孔される。24はロクロ土師器である。器種は高台付坏で、底部は回転系切り後に高台部を貼り付けている。胎土は絹雲母が多く入り、密で精錬されている。25～29は坏身、30は高台付坏、31は埴である。25～29は底部回転系切り後未調整で、31は周辺部に回転ヘラケズリを施す。胎土からいずれも南比企産、末野産と推定される。32は長頸瓶である。胎土は緻密で、肩が強く張っている。33は刀子、34は鎌、35～37は釘である。33は木質が残存しており、34は小形の鎌と推定される。焼成粘土塊は計約890g出土している。スサが多く混入し、平坦面を持つものと塊状のものがある。

時 期 出土遺物から本建物の時期は8世紀末～9世紀前葉と考えられる。

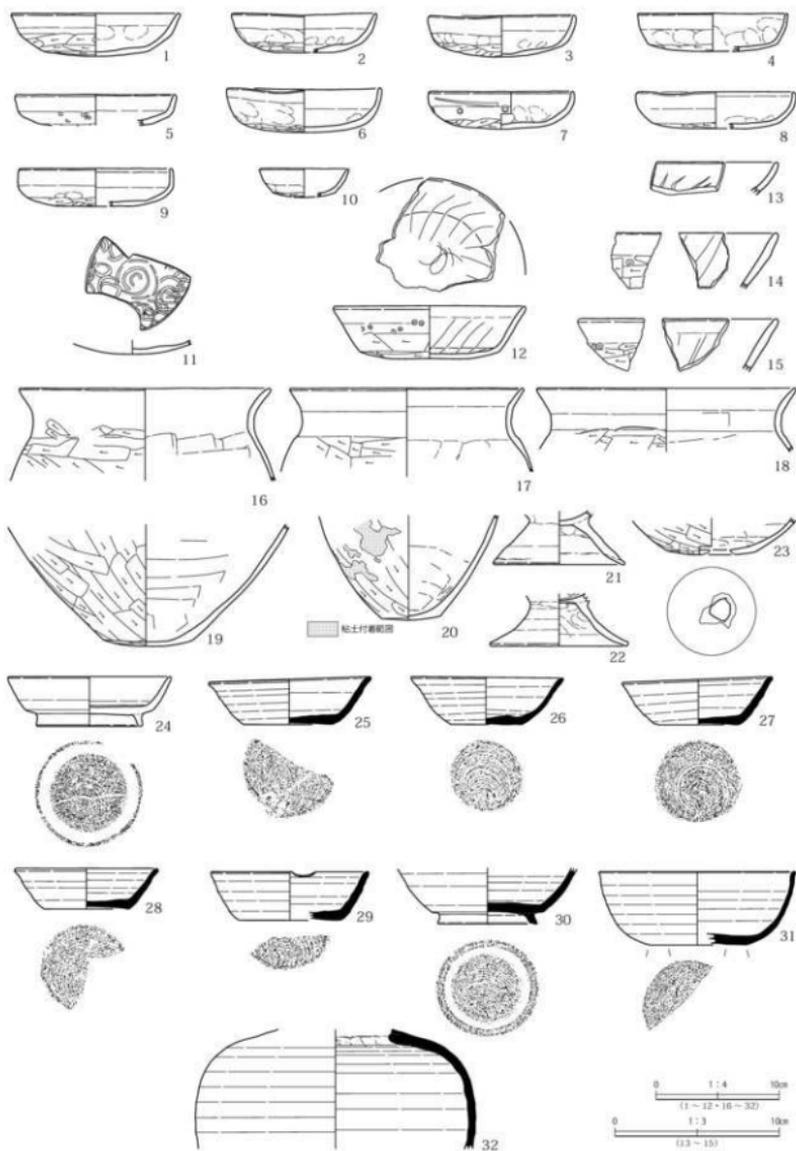


- S51
 1 黒褐色粘質シルト (10YR2/2)
 2 黒褐色粘質シルト (10YR3/2)
 3 黒褐色粘質シルト (10YR2/2)
 4 にじみ・黒褐色粘質シルト (10YR4/3)
 5 黒褐色粘質シルト (10YR4/2)
 6 黒褐色シルト (10YR3/2)
 7 黒褐色粘質シルト (10YR3/1)
 8 黒褐色粘質シルト (10YR3/3)
 9 にじみ・黒褐色粘質シルト (10YR4/3)
 10 黒褐色土 (10YR3/2)
- S52 P1
 1 黒褐色粘質シルト (10YR3/2)
 2 黒褐色粘質シルト (10YR3/3)
- S53 P2
 1 黒褐色粘質シルト (10YR4/2)

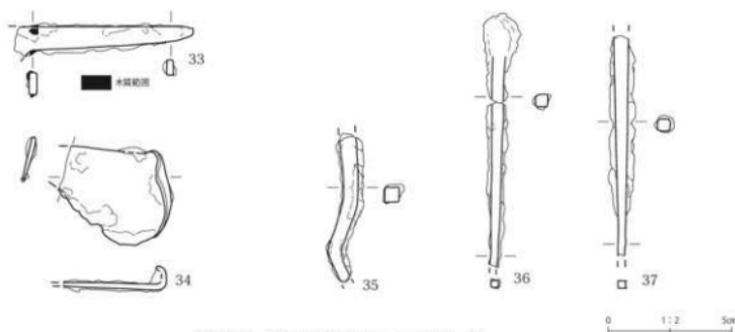
粘質中砂、しまり中砂、円礫 (径 5mm 以下) 多量、焼土 (径 2mm 以下)・炭化物 (径 2mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土・ロームブロック (径 10～20mm) 少量、焼土 (径 5mm 以下)・炭化物 (径 4mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、焼土 (径 15mm 以下)・炭化物 (径 10mm 以下) 少量、ローム土塊に少量含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土塊に少量、ローム粒・焼土 (径 20mm 以下)・炭化物 (径 15mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土塊に少量、焼土 (径 2mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土塊に少量、焼土 (径 10～20mm) 多量 (径 10～20mm) 以下)・炭化物 (径 3mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土塊に少量、焼土 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土塊に少量、炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土塊に少量、焼土 (径 3mm 以下)・炭化物 (径 2mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、ローム土塊に少量、焼土 (径 3mm 以下)・炭化物 (径 2mm 以下) わずかに含む。
 粘質中砂、しまり中砂、黒褐色粘質シルト層にやや多く、炭化物 (径 2mm 以下) わずかに含む。

(遺物) 0 1:8 20cm
 (遺物) 0 1:60 2m

第32図 第3号竪穴建物



第33図 第3号竪穴建物 出土遺物 (1)



第34図 第3号竪穴建物 出土遺物(2)

第15表 第3号竪穴建物 出土遺物観察表(1)

No.	出土位置	種別	器種	口径 器高 底径 (cm)	出土	構成	色調	保存部位	手法の特徴	備考
1	甕上 下層	土師器	杯	(13.4) 3.7 (8.4)	黄緑石英・角閃石・白色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/6	口縁部～ 底部 1/2	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部～底部 部押圧。 外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。	
2	甕上 下層	土師器	杯	(10.6) 3.2 9.1	黄緑石英・角閃石・黒 雲母・白色砂粒	良好	内・外面：5YR6/4 に近い色調	口縁部～ 底部 1/2	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部部部押圧。 外面：口縁部ヨコナデ、体部部ナデ部部押圧。 底部ヘラケズリ。	
3	甕上 下層	土師器	杯	11.7 3.4 10.2	黄緑石英・角閃石・黒 雲母・白色砂粒	良好	内面：7.5YR6/6 程度	口縁部～ 底部 3/5	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部部部押圧。 外面：口縁部ヨコナデ、体部部部押圧、底部 ヘラケズリ。	
4	甕上	土師器	杯	(12.0) 3.1 (10.4)	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒	良好	内・外面：5YR6/4 に近い色調	口縁部～ 底部 1/2	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部部部押圧。 外面：口縁部ヨコナデ、体部部部押圧、底部 ヘラケズリ。	
5	甕上	土師器	杯	(12.8) (2.5)	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒・赤色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 程度	口縁部～ 底部 端片	内面：口縁部～底部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・竹管状工 具による刺突。底部ヘラケズリ。	
6	甕上 下層	土師器	杯	(12.3) 3.6 10.0	黄緑石英・長石・角閃石・ 白色砂粒・黒雲母	良好	内・外面：5YR6/4 に近い色調	口縁部～ 底部 1/2	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部部部押圧。 外面：口縁部ヨコナデ、体部部ナデ部部押圧。 底部ヘラケズリ。	
7	甕上 下層	土師器	杯	(11.6) 3.1 9.3	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒・赤色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/4 に近い色調	口縁部～ 底部 1/2	内面：口縁部～底部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部部ナデ・竹管状 工具による刺突と沈蝕。底部ヘラケズリ。	
8	甕上	土師器	杯	(12.7) 3.0 (10.3)	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/6 程度	口縁部～ 底部 1/5	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部部部押圧。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラ ケズリ。	
9	甕上	土師器	杯	(12.2) 3.1 8.2	黄緑石英・角閃石・黒 雲母・白色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 程度	口縁部～ 底部 1/4	内面：口縁部～底部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・部部押圧。 底部ヘラケズリ。	
10	甕上	土師器	小皿状	0.1 2.3 (0.0)	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 程度	口縁部～ 底部 1/3	内面：口縁部～底部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラ ケズリ。	
11	甕上 下層	土師器	杯	(1.1)	黄緑石英・角閃石	良好	内・外面：7.5YR6/4 に近い色調	底部	内面：腹反り陶文。 外面：底部ヘラケズリ。	
12	甕上	土師器	杯	(15.4) 4.3 (11.2)	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 程度	口縁部～ 底部 1/4	内面：口縁部～底部ヨコナデ、口縁部～底部 腹反り陶文。底部部部陶文。 外面：口縁部ヨコナデ、口縁部～体部部竹管状 工具による刺突。体部～底部ヘラケズリ。	
13	甕上 下層	土師器	杯	(2.0)	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒・赤色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/6 程度	口縁部 端片	内面：口縁部ヨコナデ・腹反り陶文。 外面：口縁部ヨコナデ。	
14	甕上 下層	土師器	杯	(3.4)	黄緑石英・角閃石・白色 砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 程度	口縁部～ 体部 端片	内面：口縁部～体部ヨコナデ・腹反り陶文。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデヘラケズリ。 竹管状工具による刺突。	
15	甕上 下層	土師器	杯	(3.2)	黄緑石英・角閃石・黒 雲母・白色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 程度	口縁部～ 体部 端片	内面：口縁部～体部ヨコナデ・腹反り陶文。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・竹 管状工具による刺突。	
16	甕上	土師器	盃	(20.2) (7.6)	黄緑石英・角閃石・黒 雲母・白色砂粒・赤色 砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/4 に近い色調	口縁部～ 底部	内面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。 外面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	

第IV章 検出された遺構と遺物

第16表 第3号竪穴建物 出土遺物観察表(2)

No.	出土位置	種類	器種	口径 底径 底径(㎝)	胎土	焼成	色調	残存部位	手法の特徴	備考	
17	甕土	土師器	甕	(18.9 6.8)	黄緑石英・角閃石・絹 雲母・白色砂粒・赤色 砂粒	良好	内・外面：2.5YR5/6 明赤褐	口縁部～ 胴部 1/3	内面：口縁部ヨコナデ、胴部筋面押圧・ナデ、 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。		
18	甕土	土師器	甕	(20.8) (5.2)	黄緑石英・角閃石・絹 雲母・白色砂粒・細砂	良好	内面：7.5YR6/4 にぶい暗 外面：5YR6/6 暗	口縁部～ 胴部 1/3	内面：口縁部上位ヨコナデ、下位～胴部ナデ、 外面：口縁部上位ヨコナデ、下位ナデ、胴部 ヘラケズリ。		
19	甕土	土師器	甕	(10.0) 7.2	黄緑石英・角閃石・絹 雲母・白色砂粒	良好	内面：5YR5/6 明赤褐 外面：7.5YR5/6 明暗	胴部～ 底面 底面は圧定付	内面：胴部～底部ヘラケナデ、 外面：胴部～底部ヘラケズリ。		
20	甕土	土師器	甕	(8.5) 4.8	黄緑石英・角閃石・絹 雲母・白色砂粒・赤色 砂粒	良好	内面：5YR5/4 にぶい赤褐 外面：5YR4/3 にぶい赤褐	胴部～ 底面 底面圧定付	内面：胴部～底部ヘラケナデ、 外面：胴部～底部ヘラケズリ。	外面カマド構築 材付着	
21	甕土	土師器	台付甕	(4.1) 10.3	黄緑石英・角閃石・金 雲母・白色砂粒・赤色 砂粒	良好	内面：5YR5/4 にぶい赤褐 外面：7.5YR5/4 にぶい暗	台座 底面	内面：底面ナデ、右部上位筋面押圧、下位ヨ コナデ。 外面：台座上位ナデ、下位ヨコナデ。		
22	甕土	土師器	台付甕	(4.3) (10.9)	黄緑石英・長石・角閃石・ 絹雲母・赤色砂粒	良好	内・外面：5YR6/6 暗	台座 4/5	内面：底面ヘラケナデ、台座上位筋面押圧、下 位ヨコナデ。 外面：台座上位ナデ、下位ヨコナデ。		
23	甕土	土師器	甕	(3.0) 7.2	黄緑石英・角閃石・白 色砂粒・赤色砂粒	良好	内・外面：5YR5/6 明赤褐	底面 底面	内面：胴部～底部ヘラケナデ、筋面押圧。 外面：胴部～底部ヘラケズリ。	甕の転用 内面からの穿孔	
No.	出土位置	種類	器種	口径 底径 底径(㎝)	胎土	焼成	色調	残存部位	手法の特徴	焼成	備考
24	ロケ口 土師器	高台付 杯	杯	(13.0 4.1 8.3 9.2)	黄緑石英・長石・絹雲母・ 白色砂粒・黒色砂粒	酸化 灰	内・外面：5YR8/8 暗	口縁部～ 高台部 1/2	右回転ロケ口成形。 内面：口縁部～底面ロケ口ナデ、 外面：口縁部～体部ロケ口ナデ、底面 右回転車切り後、未調整。高台部筋り付け。	—	
25	甕土	須恵器	杯	(12.8) 3.9 7.8	黄緑石英・長石・赤色 砂粒・黒色砂粒	還元	内・外面：10YR7/1 灰白	口縁部～ 底面 1/2	右回転ロケ口成形。 内面：口縁部～底面ロケ口ナデ、 外面：口縁部～体部ロケ口ナデ、底面 右回転車切り後、未調整。	未野	
26	甕土	須恵器	杯	12.2 3.9 (5.7) 8.8	黄緑石英・角閃石・片岩・ 白色砂粒・赤色砂粒	還元	内面：10YR5/1 暗灰 外面：10YR5/2 灰黄褐	口縁部～ 底面 1/2	右回転ロケ口成形。 内面：口縁部～底面ロケ口ナデ、 外面：口縁部～体部ロケ口ナデ、底面 右回転車切り後、未調整。	未野	
27	甕土	須恵器	杯	12.0 3.9 6.5 8.8	黄緑石英・角閃石・片岩・ 白色砂粒・赤色砂粒	還元	内・外面：10YR6/2 灰黄褐	口縁部～ 底面 1/2	右回転ロケ口成形。 内面：口縁部～底面ロケ口ナデ、 外面：口縁部～体部ロケ口ナデ、底面 右回転車切り後、未調整。	未野	
28	甕土	須恵器	杯	(11.8 3.3 6.8 7.3)	黄緑石英・長石・片岩・ 白色砂粒・黒色砂粒	還元	内・外面：10YR5/1 暗灰	口縁部～ 底面 1/2	右回転ロケ口成形。 内面：口縁部～底面ロケ口ナデ、 外面：口縁部～体部ロケ口ナデ、底面 右回転車切り後、未調整。	未野	
29	甕土	須恵器	杯	(12.6) 3.9 (8.2) (8.2)	黄緑石英・長石・赤色 砂粒・黒色砂粒	還元	内・外面：10YR6/1 暗灰	口縁部～ 底面 1/4	右回転ロケ口成形。 内面：口縁部～底面ロケ口ナデ、 外面：口縁部～体部ロケ口ナデ、底面 右回転車切り後、未調整。	未野	口縁部付口尻
30	甕土	須恵器	高台付 杯	(4.0) 8.0 8.6	黄緑石英・長石・赤色 砂粒	還元	内面：N4/0 灰 外面：N5/0 灰	体部～ 高台部 1/5	右回転ロケ口成形。 内面：体部～底面ロケ口ナデ、 外面：体部ロケ口ナデ、底面右回転車 切り後、未調整。高台部筋り付け。	未野	
31	甕土	須恵器	埴	(15.8) (6.0) (7.8) (10.2)	黄緑石英・長石・黒色 砂粒・チャート・海緑 片岩	還元	内面：7.5YR7/2 明暗灰 外面：10YR7/1 暗灰	口縁部～ 底面 1/3	右回転ロケ口成形。 内面：口縁部～底面ロケ口ナデ、 外面：口縁部～体部ロケ口ナデ、底面 右回転車切り後、段縁部右回転ヘラケ ズリ。	南氏企	
32	甕土	反輪 陶器	長頸瓶	(9.7) —	黄緑石英・白色砂粒・ 赤色砂粒・黒色砂粒	還元	内面：2.5Y4/2 暗灰黄 外面：5Y4/1 灰	胴部～ 製部 1/2	右回転ロケ口成形。 内面：胴部筋面押圧・ナデ、胴部ロケ 口ナデ。 外面：胴部～製部ロケ口ナデ。	脇段	外面灰層付着
No.	出土位置	種類	器種	備考							
33	甕土	鉄製品	刀子	長さ 7.3cm、厚さ 0.3cm、重さ 8.3g 水漬あり							
34	甕土	鉄製品	鉄錐	長さ 4.6cm、厚さ 0.2cm、重さ 17.7g							
35	甕土	鉄製品	釘	長さ 約 1.1cm、厚さ 0.06cm、重さ 13.1g							
36	甕土	鉄製品	釘	長さ (10.4)cm、厚さ 0.5cm、重さ 14.8g							
37	甕土	鉄製品	釘	長さ 約 0.8cm、厚さ 0.5cm、重さ 11.4g							

主軸方位 北壁でN-86°-Wを測る。

壁 高 床面から検出面まで0.07mを測る。調査区壁の断面から確認できる壁高は0.22mを測り、垂直に立ち上がる。

壁 溝 北壁際で検出された。幅0.33m、深さ0.14mを測る。

床 面 貼り床はロームブロックと褐灰色土の混合土である。厚さは約0.04mを測り、平坦で締りはやや弱く、硬化面は確認できなかった。

カマド 検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 覆土から土器が計1,376g出土しており、そのうち土師器1点(1)、須恵器1点(2)を図示した。1は甕である。口縁部がややコの字形に屈曲する。2は坏身である。底部から緩く内湾して立ち上がり、口縁部をやや丸く仕上げる。底部は回転糸切り後未調整である。胎土には海綿骨針が含まれており、南比企産であると推定される。

時 期 本建物の時期は8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

(2) 土坑 (SK)

検出された土坑は5基(SK01～03・05・07)で、覆土にはAs-Bを含むものと含まないものに分けられ、前者はSK02、後者はSK01・03・05・07である。そのことから、SK02はAs-B下降後、それ以外は11世紀以前のものと考えられる。

A区第1号土坑 (SK01 第36図、図版8)

A区北東部のXI層(ローム層)上面で検出された。同層を掘りこんで構築されており、遺構上端は削平されている。平面形は推定円形で、断面形は皿状を呈する。

規 模 検出長で、長軸1.29m×短軸0.72m×深さ0.10mを測る。

遺 物 出土せず。

時 期 覆土から、11世紀以前のものと考えられる。

B区第2号土坑 (SK02 第36図、図版8)

B区中央部南西寄りのXI層(ローム層)上面で検出された。断面の観察から、X・XI層を掘りこんで構築されており、遺構上端は削平されている。平面形は不定形で、断面形は箱形を呈する。覆土1層には、As-Bが多く含まれている。

規 模 検出長で、長軸1.15m×短軸0.90m×深さ0.19mを測る。

遺 物 覆土から須恵器甕の口縁部破片が出土したが、図示はできなかった。

時 期 出土遺物と覆土から、平安時代末以降と考えられる。

B区第3号土坑 (SK03 第36図、図版8)

SI04の南部とSD04に重複して検出された。SD04より古く、SI04より新しい。XI層(ローム層)を掘りこんで構築されており、上面をIV層が被覆している。土坑中央部はSD04によって壊されている。平面形は長方形で、断面形は箱状を呈する。

規 模 検出長で、長軸1.78m×短軸1.15m×深さ0.09m、調査区壁の断面から確認できるIV層直下から底面までの深さは0.57mを測る。

遺 物 覆土から土師器等がわずかに出土したが、図示はできなかった。

時 期 出土遺物と重複関係から、9世紀代と考えられる。

B区第5号土坑 (SK05 第36図、図版8)

SI04の北東部に重複して検出された。SI04より新しい。X・XI層(ローム層)を掘りこんで構築されている。遺構上端は削平されており、上面をIV層が被覆している。平面形は円形または不定形と推定され、断面形は階段状を呈する。

規模 検出長で、長軸1.02m×短軸0.98m×深さ0.27m。調査区壁の断面から確認できるIV層直下から底面までの深さは0.69mを測る。

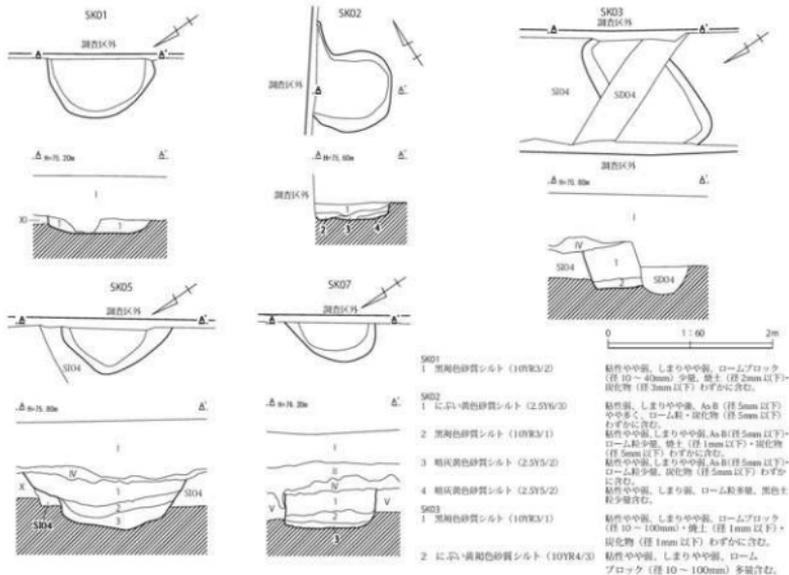
遺物 土師器等が出土したが、図示はできなかった。

時期 出土遺物と重複関係から、9世紀代と考えられる。

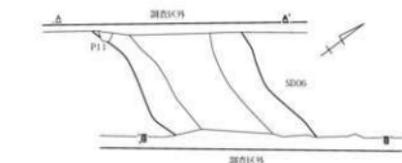
C区第7号土坑 (SK07 第36図、図版8)

C区北東部のVI層上面で検出された。断面の観察から、V～VI層を掘りこんで構築されている。遺構上端は削平されており、上面をIV層が被覆している。平面形は円形または楕円形と推定され、断面形は箱状を呈する。

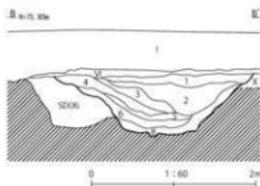
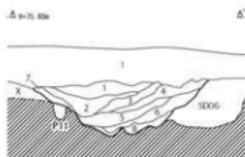
規模 検出長で、長軸0.92m×短軸0.85m×深さ0.19m。調査区壁の断面から確認できるIV層直下から底面までの深さは0.48mを測る。



第36図 土坑



- SD05
- 1 明褐色シルト (7.5YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、白粉粒・微土 (径 3mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 2 に近い暗褐色粘質シルト (10YR4/2) 粘性中～強、しまり中～強、腐植層に中～多量、ローム粒・微土 (径 3mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 3 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、微土 (径 1mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 4 灰黄褐色粘質シルト (10YR4/2) 粘性中～強、しまり中～強、白粉粒 (径 1mm 以下)・微土 (径 2mm 以下) わずかに含む。
 - 5 黒褐色粘質シルト (10YR3/2) 粘性中～強、しまり中～強、微土 (径 1mm 以下)・炭化物 (径 2mm 以下) わずかに含む。
 - 6 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性中～強、しまり中～強、微土 (径 2mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 7 灰黄褐色粘質シルト (10YR4/2) 粘性中～強、しまり中～強、ローム・土間に中～多量、ローム・微土 (径 1mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 8 明褐色粘質シルト (10YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、ローム・土間に中～多量、ローム・微土 (径 1mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。



第 38 図 第 5 号溝

規模 検出長で、長さ 2.64m × 幅 1.42m × 深さ 0.59m を測る。

方向 N-84° -E を測る。

遺物 出土せず。

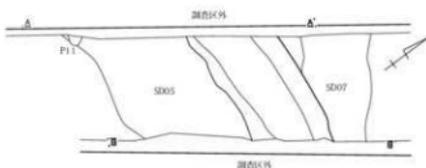
時期 覆土中に As-B が含まれていないことから、11 世紀以前と考えられる。

B 区第 6 号溝 (SD06 第 39 図、図版 9)

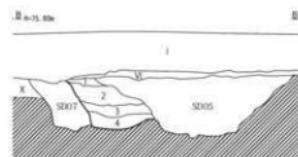
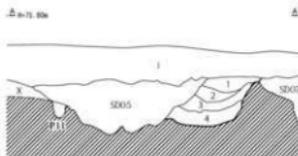
B 区中央部北東寄りの XI 層 (ローム層) 上面で検出された。X～XI 層を掘りこんで構築されている。遺構上端は削平されており、上面には IV 層が堆積している。SD05・SD07 と重複し、SD05 よりも古く、SD07 より新しい。平面形は直線の、断面形は逆台形であると考えられ、東西方向に調査区外へ延びる。

規模 検出長で、長さ 2.01m × 幅 0.82m × 深さ 0.53m を測る。

方向 N-87° -W を測る。

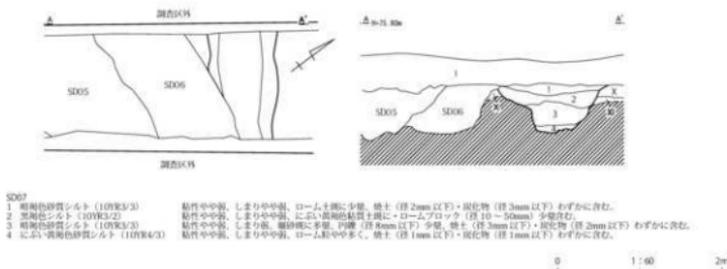


- SD06
- 1 灰黄褐色粘質シルト (10YR4/2) 粘性中～強、しまり中～強、微土 (径 2mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 2 暗褐色粘質シルト (10YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、微土 (径 2mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 3 暗褐色シルト (10YR3/2) 粘性中～強、しまり中～強、微土 (径 2mm 以下)・炭化物 (径 1mm 以下) わずかに含む。
 - 4 灰黄褐色粘質シルト (10YR4/2) 粘性中～強、しまり中～強、ローム・土間に (径 10～30mm) 少量、微土 (径 3mm 以下)・炭化物 (径 2mm 以下) わずかに含む。

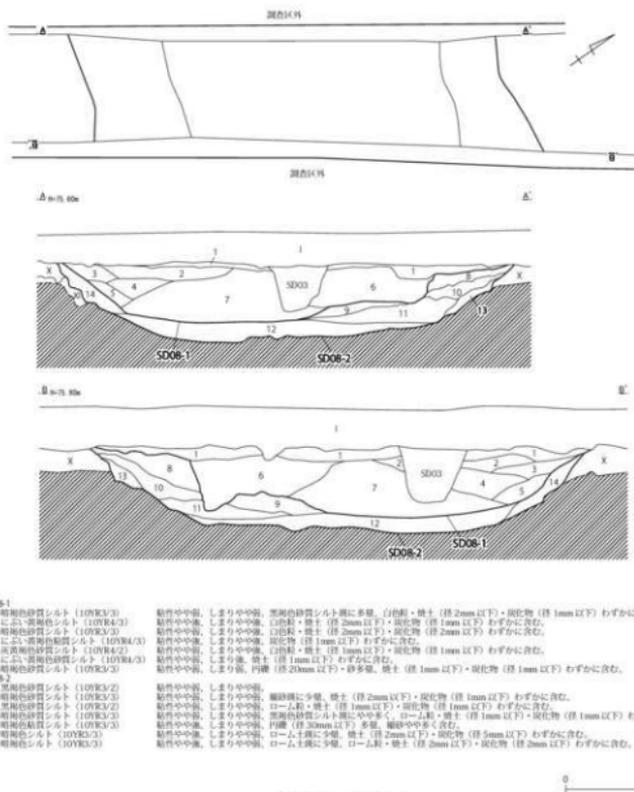


第 39 図 第 6 号溝

第IV章 検出された遺構と遺物



第40図 第7号溝



第41図 第8号溝

遺物 出土せず。

時期 覆土中にAs-Bが含まれていないことから、11世紀以前と考えられる。

B区第7号溝 (SD07 第40図、図版9)

B区中央部北東寄りのXI層(ローム層)上面で検出された。断面の観察から、X～XI層を掘りこんで構築されており、遺構上端は削平されている。SD06と重複し、それよりも古い。平面形は直線的で、断面形は逆台形であり、北西～南東方向に調査区外へ延びる。覆土中位には砂がブロック状に混入していた。

規模 検出長で、長さ1.35m×幅0.81m×深さ0.41mを測る。

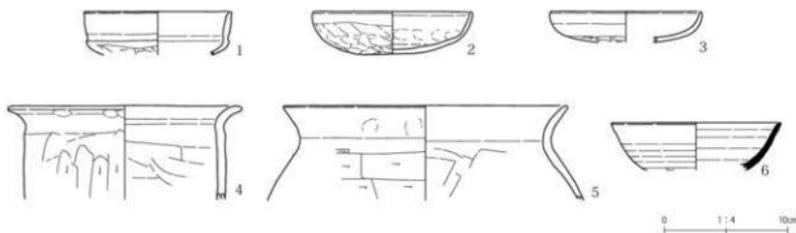
方向 N-51°-Wを測る。

遺物 混入と考えられる弥生土器が1点出土している。

時期 覆土中にAs-Bが含まれていないことから、11世紀以前と考えられる。

B区第8号溝 (SD08 第41・42図、第19表、図版9・20)

B区北東部のXI層(ローム層)上面で検出された。断面の観察から、X～XI層を掘りこんで構築されており、遺構上端は削平されている。SD03と重複し、それよりも古い。平面形は直線的で、断面



第42図 第8号溝 出土遺物

第19表 第8号溝 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	口径 底径 (cm)	胎土	地質	色調	残存部位	手法の特徴	備考	
1	覆土	土師器	杯	(11.8) —	黄緑石英・赤色砂粒・ 黒煤	良好	内面・外面：7.5YR6/6 橙	口縁部～ 体部 1/5	内面：口縁部～体部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。		
2	覆土	土師器	杯	12.7 3.5	黄緑石英・角閃石・ 白色砂粒	良好	内・外面：7.5YR6/2 灰黒	ほぼ完全	内面：口縁部～底部ヨコナデ、体部指頭押圧。 外面：口縁部ヨコナデ、体部上段ヘラナデ、下 段指頭押圧、底部ヘラケズリ。	内外面段付着 黒色塗料か	
3	覆土	土師器	杯	(12.1) 2.5 底径	黄緑石英・角閃石・ 白色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR5/6 明橙 外面：7.5YR6/4 に近い橙	口縁部～ 底部 1/6	内面：口縁部～底部ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。		
4	覆土	土師器	甕	(18.8) (7.7) —	黄緑石英・長石・角閃石・ 赤色砂粒	良好	内面：7.5YR5/4 に近い橙 外面：7.5YR6/4	口縁部～ 胴部 1/6	内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 外面：口縁部指頭押圧・ヨコナデ、胴部ヘラナ デ・ヘラケズリ。		
5	覆土	土師器	甕	(22.9) (7.7) —	黄緑石英・角閃石・ 赤色砂粒	良好	内・外面：5YR6/8 橙	口縁部～ 胴部 1/5	内面：口縁部指頭押圧・ヨコナデ、胴部ヘラ ナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。		
No.	出土位置	種類	器種	口径 底径 (cm)	胎土	地質	色調	残存部位	手法の特徴	産地	備考
6	覆土	須恵系	杯	(13.6) 3.9 底径	黄緑石英・角閃石・ 白色砂粒・赤色砂粒・ 黒色砂粒	黄化 灰	内・外面：10YR6/4 に近い黄橙	口縁部～ 体部 1/6	右縁部クロコ成形。 内面：口縁部～体部クロコナデ。 外面：口縁部～体部クロコナデ、右 縁部ヘラケズリ。	本野	

形は逆台形状であり、北西—南東方向に調査区外へ延びる。覆土中層にはV層に類似した砂質土や砂礫が大量に含まれており、洪水や流水の痕跡である可能性が考えられる。なお、6層と8層の層理面が垂直に立ち上がっていることから、再掘削(SD08-1)が考えられる。なお、SD08-1のほかにも小規模ながら再掘削の可能性のある痕跡が認められる。

規 模 SD08-1：調査区壁の断面観察で、幅 6.03m × 深さ 0.86m を測る。

SD08-2：検出長で、長さ 2.69m × 幅 5.01m × 深さ 0.71m を測り、調査区壁の断面から確認できるI層直下から底面までの深さは 1.03m を測る。

方 向 N-77°-W を測る。

遺 物 覆土からは土器が計 2,204g 出土しており、縄文土器・土師器・内耳鍋・瓦質陶器が確認されている。そのうち図示できたのは土師器(1～5)、須恵器(6)の6点である。1～3は坏で、その内の1はいわゆる模倣坏である。2・3はやや平底気味を呈しており、体部から口縁部かけて緩やかに内湾して立ち上がる。4・5は甕である。4は胴部が直線的で、5は肩部が張っており、口縁部の屈曲も異なる。6は須恵器坏で、やや還元している。

時 期 SD08-1 および SD08-2 から出土した土器の年代観に隔たりがあることから、開削時期は6世紀末～7世紀前葉、再掘削時期は8世紀後半と思われる。

B区第9号溝(SD09 第43図、図版10)

B区北東端のXI層(ローム層)上面で検出された。断面の観察から、X～XI層を掘りこんで構築されており、遺構上端は削平されている。重複する遺構はない。平面形は直線的で、断面形は逆台形であり、北東—南西方向に調査区外へ延びる。遺構上面には砂礫が堆積しており、洪水による堆積の可能性が考えられる。

規 模 検出長で、長さ 3.00m × 幅 0.43m × 深さ 0.12m、調査区壁の断面から確認できるI層直下から底面までの深さは 0.31m を測る。

方 向 N-72°-E を測る。

遺 物 覆土から土師器甕の大形破片が出土したが、図示できなかった。

時 期 覆土中にAs-Bが含まれていないことから、11世紀以前と考えられる。

B区第10号溝(SD10 第44・45図、第20表、図版10・20)

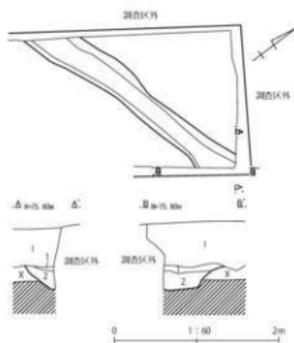
B区中央部南西寄りのXI層(ローム層)上面で検出された。断面の観察から、X～XI層を掘りこんで構築されている。遺構上端は削平されており、覆土最上層の凹地にはIV層が堆積している。SK04と重複し、それよりも新しい。平面形はやや直線的で、断面形は逆台形であり、東西方向に調査区外へ延びる。

規 模 検出長で、長さ 2.74m × 幅 1.25m × 深さ 0.12m、調査区壁の断面から確認できるI層直下から底面までの深さは、0.46m を測る。

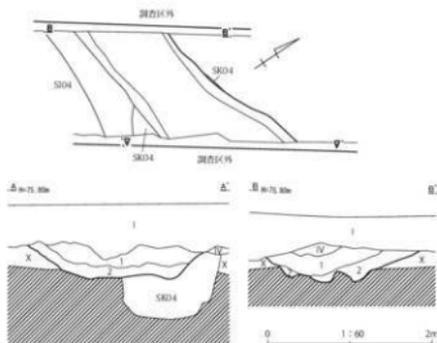
方 向 N-85°-E を測る。

遺 物 覆土からは土器が計 3,556g 出土した。ほとんどが混入と考えられる縄文土器破片であったが、そのうち須恵器2点(1・2)を図示した。1は坏で、口径が大きく、底部周縁は回転ヘラケズリを行っている。2は甕の口縁部である。

時 期 重複関係と出土遺物から、8世紀後半には埋没していたと考えられる。



SD09
 1 灰褐色砂質シルト (10YR5/2) 粘性質、しまり弱、明褐色砂質シルト層に少量存在。
 2 明褐色砂質シルト (10YR3/3) 粘性質、しまり中強、ローム土層に少量。白色砂・粘土 (径1mm以下)・炭化物 (径1mm以下) わずかに含む。



SD10
 1 黒褐色砂質シルト (10YR3/2) 粘性質、しまり中強、ローム土層に少量。粘土 (径2mm以下)・炭化物 (径1mm以下) わずかに含む。
 2 黒褐色砂質シルト (10YR3/2) 粘性質、しまり中強、ローム土層に多量。ローム土 (径2mm以下)・炭化物 (径1mm以下) わずかに含む。

第43図 第9号溝

第44図 第10号溝



第45図 第10号溝 出土遺物



第20表 第10号溝 出土遺物観察表

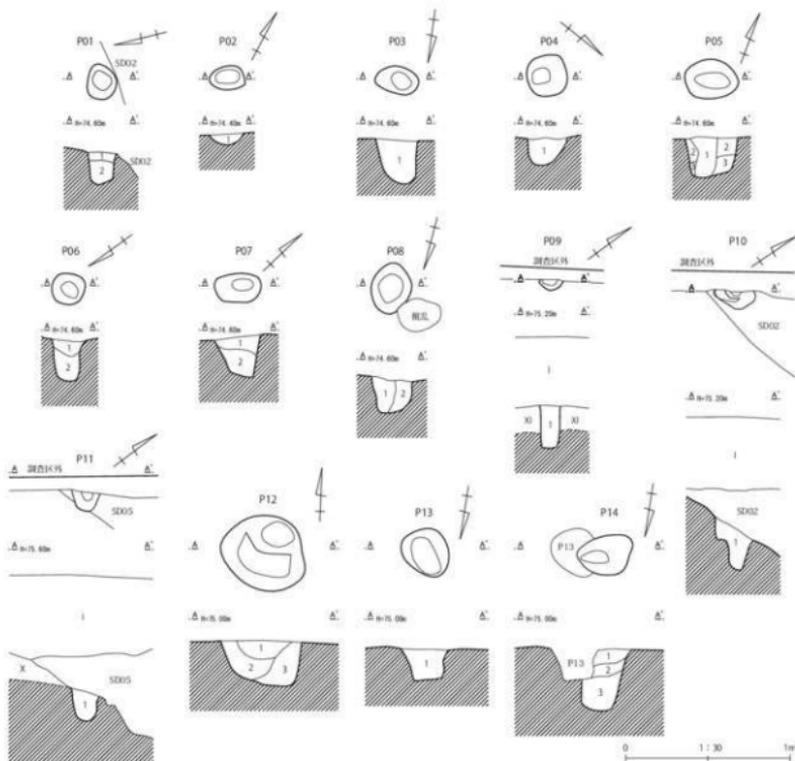
No.	出土位置	種類	器種	口径 高さ 底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存部位	手法の特徴	産地	備考
1	覆土	須恵器	杯	13.7 3.6 8.0 (8.4)	黄緑石英・白色砂粒・ 磁珠・海砂付針	還元	内・外面：2.5Y6/2 灰黄	1(縁部)～ 底部 1/5	右縁部口クロ成形。 内面：1(縁部)～底部口クロナデ。 外面：1(縁部)～底部口クロナデ。底 部切り離し方法不明。両縁部右縁 部ヘラケスリ。	南比企	
2	覆土	須恵器	鏝	Ø7.7 (3.5) —	黄緑石英・粘土・ 白色砂粒・赤色砂粒・ 灰色砂粒	還元	内面：2.5Y5/1 黄灰 外面：N4/0 灰	1(縁部) 破片	右縁部口クロ成形。 内面：1(縁部)口クロナデ。 外面：1(縁部)口クロナデ。	本野	

(4) 小穴 (P)

A区第1～10号小穴、B区第11～26号小穴 (P01～26 第46・47図、第21表、図版10)

A・B区のXI層 (ローム層) 上面で検出された。小穴はB区中央部に集中して構築されている。平面形は円形、楕円形、不整楕円形、不整円形、隅丸方形で、断面形はU字状、箱状、階段状、逆台形状、皿状を呈する。覆土はX層を基調としている。遺構の計測値は一覧として表にまとめた。出土遺物は、ほとんどが土器破片である。図示可能な遺物はない。時期は重複関係や覆土、出土遺物から奈良・平安時代と考えられる。

第IV章 検出された遺構と遺物



- P01
1 黒色砂質シルト (10YR4/1)
2 黒色砂質シルト (10YR4/1)
- P02
1 黒色砂質シルト (10YR3/3)
- P03
1 黒色砂質シルト (10YR4/1)
- P04
1 黒色砂質シルト (10YR4/1)
- P05
1 黒色砂質シルト (10YR3/1)
2 黒色砂質シルト (10YR3/1)
3 黒色砂質シルト (2.5Y6/2)
- P06
1 二色・褐色砂質シルト (2.5Y6/3)
2 黒色砂質シルト (10YR4/1)
- P07
1 二色・褐色砂質シルト (2.5Y6/3)
2 黒色砂質シルト (10YR4/1)
- P08
1 黒色砂質シルト (10YR4/1)
2 黒色砂質シルト (2.5Y5/2)
3 黒色砂質シルト (2.5Y5/2)
- P09
1 黒色砂質シルト (10YR4/1)
- P10
1 二色・褐色シルト (10YR4/2)
- P11
- P12
1 黒色砂質シルト (10YR2/1)
- P13
1 黒色砂質シルト (10YR2/1)
2 黒色砂質シルト (10YR2/2)
3 黒色砂質シルト (10YR2/2)
- P14
1 黒色砂質シルト (10YR3/2)
2 黒色砂質シルト (10YR2/1)
3 黒色砂質シルト (10YR3/2)

- 粘性土、しまりや中硬、ローム殻・炭化物 (厚 10mm 以下) わずかに含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘や中多、白色粉わずかに含む。
- 粘性や中硬、しまりや中硬、ロームブロック (厚 10 ~ 15mm) 少量、白色粉わずかに含む。
- 粘性土、しまりや中硬、ローム粘多量、白色粉わずかに含む。
- 粘性土、しまりや中硬、ローム粘多量、白色粉わずかに含む。
- 粘性や中硬、しまり硬、ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) や中多、炭化物 (厚 5mm 以下) 中量、白色粉わずかに含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) や中多、白色粉わずかに含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム殻・ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) 多量、白色粉わずかに含む。
- 粘性土、しまりや中硬、ローム粘・炭化物 (厚 10mm 以下) わずかに含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘少量、白色粉わずかに含む。
- 粘性土、しまりや中硬、ローム粘・炭化物 (厚 10mm 以下) わずかに含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘少量、白色粉わずかに含む。
- 粘性土、しまりや中硬、ローム粘・炭化物 (厚 5mm 以下) わずかに含む。
粘性土、しまりや中硬、ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) 多量、黒色土粒・黒色ブロック (厚 10 ~ 100mm) わずかに含む。
- 粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘や中多、白色粉わずかに含む。
- 粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘少量含む。
- 粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘・赤色粉わずかに含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘・ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) や中多を含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘・ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) 少量、赤色粉わずかに含む。
- 粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘・ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) 多量含む。
- 粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘少量含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘少量含む。
粘性や中硬、しまりや中硬、ローム粘・ロームブロック (厚 10 ~ 100mm) 多量含む。

第46図 小穴(1)

第IV章 検出された遺構と遺物

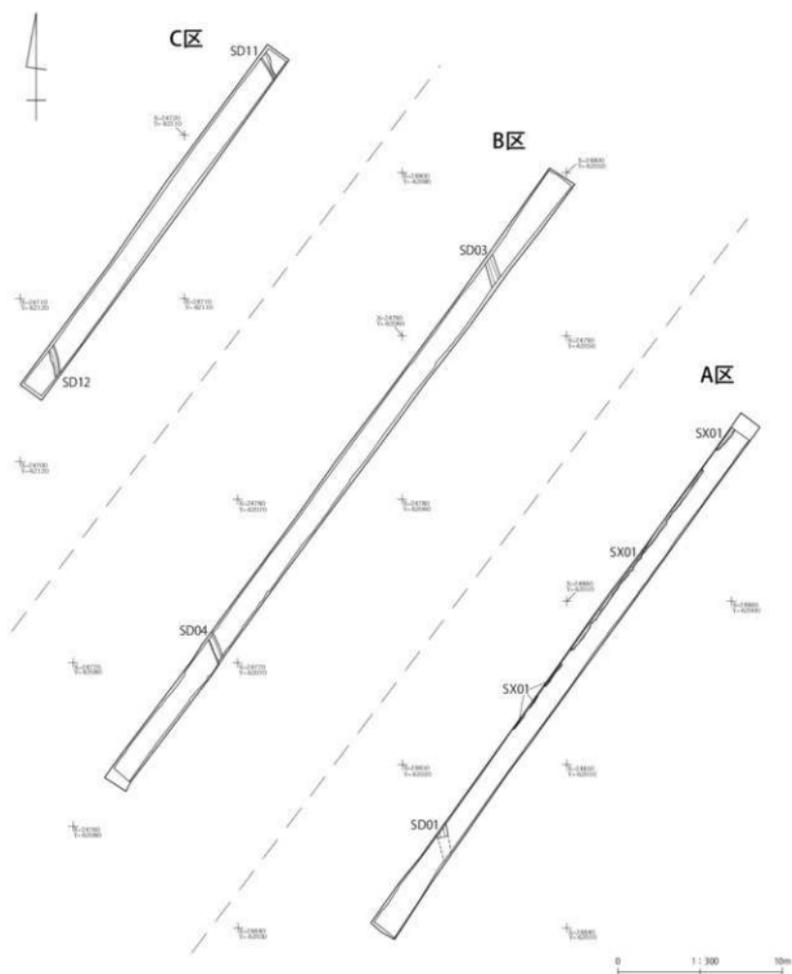
第21表 小穴計測表

() 残存量

遺構名	検出部位	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	新旧関係	出土遺物 目録	備考
P01	刈壁	円形	U字状	0.22	0.18	0.20			
P02	刈壁	楕円形	竪状	0.21	0.15	0.07			
P03	刈壁	楕円形	U字状	0.27	0.17	0.26			
P04	刈壁	楕丸方形	U字状	0.25	0.24	0.18			
P05	刈壁	楕円形	竪状	0.33	0.24	0.25			柱礎あり
P06	刈壁	楕丸方形	U字状	0.20	0.19	0.25			
P07	刈壁	楕円形	竪状	0.28	0.18	0.26			
P08	刈壁	楕円形	U字状	0.31	0.25	0.21			
P09	刈壁	円形分	U字状	0.15	0.07	0.25			
P10	刈壁	楕円形分	竪状	0.26	0.11	0.33	(新) S005 → P10 (古)		
P11	刈壁	楕円形分	U字状	0.16	0.11	0.19	(新) S005 → P11 (古)		
P12	刈壁	不整円形	竪状	0.50	0.47	0.27	(新) P12 → P24 (古)	土師器 (9g)	
P13	刈壁	楕円形	竪状	0.31	0.28	0.19	(新) P13 → P14 (古)		
P14	刈壁	不整楕円形	U字状	0.34	0.24	0.38	(新) P13 → P14 (古)		
P15	刈壁	楕円形	逆台形状	0.54	0.38	0.27			
P16	刈壁	楕丸方形	竪状	0.46	0.41	0.45			
P17	刈壁	楕円形	竪状	0.62	0.44	0.16		土師器 (8g)	
P18	刈壁	楕円形	逆台形状	0.53	0.38	0.17			
P19	刈壁	楕丸方形	U字状	0.39	0.37	0.36			
P20	刈壁	楕丸方形	竪状	0.36	0.22	0.33		土師器 (15g)	
P21	刈壁	円形分	U字状	0.40	0.22	0.67		土師器 (13g)	
P22	刈壁	楕円形分	U字状	0.51	0.19	0.50	(新) P25 → P22 → P23 (古)	土師器 (103g)	
P23	刈壁	円形	竪状	0.48	0.42	0.45	(新) P22・25 → P23 (古)		
P24	刈壁	楕円形分	U字状	0.34	0.30	0.20	(新) P12 → P24 (古)		
P25	刈壁	楕円形	竪状	0.50	0.41	0.33	(新) P25 → P22・23 (古)	土師器 (5g)	
P26	刈壁	円形	竪状	0.27	0.26	0.22	(新) P26 → S006 (古)		

第4節 近代以降の遺構と遺物

近代の溝5条(SD01・03・04・11・12)と時期不詳の性格不明遺構(SX01)が確認された(第48図)。遺物はほとんどみられなかったが、SD11からは磁器の急須蓋が出土している。



第48図 近代以降の遺構配置図

(1) 溝 (SD)

近代の溝は、兄玉飛行場の排水溝と考えられ、主軸を北西—南東方向とする。

A区第1号溝 (SD01 第49図、図版10)

A区南西部のI層直下で検出され、XI層(ローム層)を掘りこんで構築されている。SD03・SD04・SD11・SD12と並行して、北西—南東方向に調査区外へ延びる。断面形は逆台形状である。覆土は人為的埋土で、覆土下部は礫が多く混じる。

規模 検出長で、長さ2.18m×幅0.67m×深さ0.51mを測る。

方向 N-16°-Wを測る。

遺物 出土せず。

時期 近代。兄玉飛行場に関連する排水溝と考えられる。

B区第3号溝 (SD03 第50図、図版10)

B区北東部のI層直下で検出され、SD08を掘りこんで構築されている。SD01・SD04・SD11・SD12と並行して、北西—南東方向に調査区外へ延びる。断面は逆台形状である。覆土は人為的堆積で、覆土上部と下部は砂礫が多く混じる。北東壁では、礫をコンクリート製のヒューム管の周りに充填していた。

規模 検出長で、長さ1.98m×幅0.66m×深さ0.69mを測る。

方向 N-15°-Wを測る。

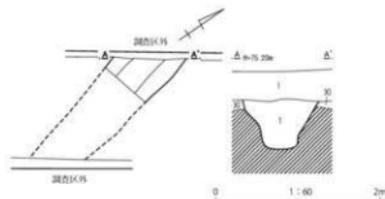
遺物 出土せず。

時期 近代。兄玉飛行場に関連する排水溝と考えられる。

B区第4号溝 (SD04 第51図)

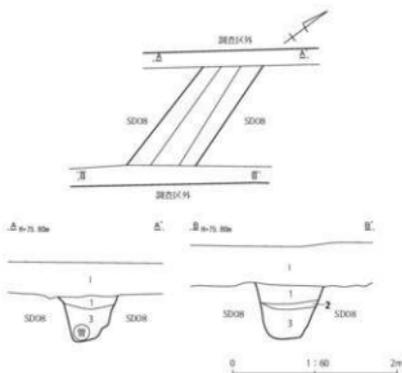
B区南西部のI層直下で検出され、XI層(ローム層)を掘りこんで構築されている。SD01・SD03・SD11・SD12と並行して、北西—南東方向に調査区外へ延びる。断面形は逆台形状である。覆土は礫を含む砂質土で、人為的埋土である。

規模 検出長で、長さ1.92m×幅0.44m



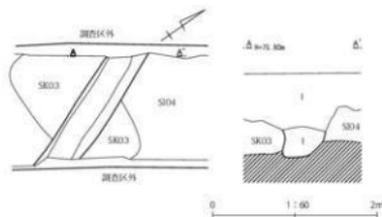
SD01
1 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、円礫(径20mm以下)多量混在。

第49図 第1号溝



SD03
1 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、円礫(径5mm以下)少量混在。
2 褐色砂質シルト (10YR4/4) 粘性強、しまり中～強、円礫(径15mm以下)中～多く混在。
3 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、円礫(径20mm以下)多量混在。

第50図 第3号溝



SD04
1 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 粘性中～強、しまり中～強、円礫(径20mm以下)多量混在。

第51図 第4号溝

×深さ0.17m、調査区壁の断面から確認できるI層直下から底面までの深さは0.36mを測る。

方向 N-20°-Wを測る。

遺物 出土せず。

時期 近代。児玉飛行場に関連する排水溝と考えられる。

C区第11号溝 (SD11 第52図、図版10・20)

C区北東部のI層直下で検出された。遺構上位は削平されており、II~VI層を掘りこんで構築されている。SD01・SD03・SD04・SD12と並行して、北西-南東方向に調査区外へと延びる。断面形は葉研状である。覆土は、砂質シルトと垂円礫を含む玉砂利が互層状となっており、人為的埋土である。

規模 検出長で、長さ1.66m×幅0.51m×深さ0.20m、調査区壁の断面から確認できるI層直下から底面までの深さは0.85mを測る。

方向 N-31°-Wを測る。

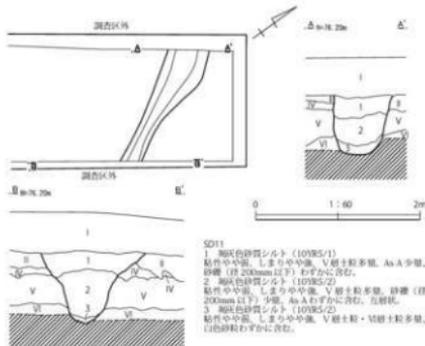
遺物 覆土下位から磁器の急須蓋が出土し、写真のみ掲載した。磁器の軸葉には気泡を含み、鮮やかに発色する。

時期 近代。児玉飛行場に関連する排水溝と考えられる。

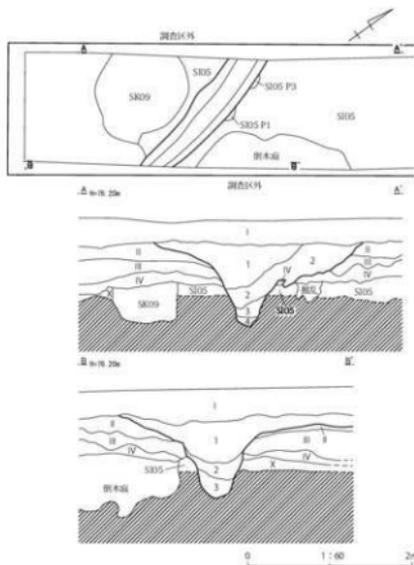
C区第12号溝 (SD12 第53図、図版10)

C区南西部のI層直下で検出された。遺構上位は削平されており、II~IV・X~XI層(ローム層)を掘りこんで構築されている。SD01・SD03・SD04・SD11と並行して、北西-南東方向に調査区外へと延びる。断面形は葉研状を呈する。覆土は人為的埋土で、北西壁と南東壁で覆土が異なり、再掘削が考えられる。また、南東壁では遺構底面に砂層がラミナ状に堆積していたことから、水が流れていたと推定される。

規模 検出長で、長さ1.96m×幅0.48m×深さ0.40m、調査区壁の断面から確認でき



第52図 第11号溝



第53図 第12号溝

る1層直下から底面までの深さは1.02mを測る。

方 向 N-17°-Wを測る。

遺 物 SI05からの混入と考えられる縄文土器が出土した。

時 期 近代。児玉飛行場に関連する排水溝と考えられる。

(2) 性格不明遺構 (SX)

A区第1号性格不明遺構 (SX01 第54図)

A区北東部～中央部西壁際のXI層(ローム層)上面で検出された。同層を掘りこんで構築され、遺構上端は削平されている。平面形は直線状で、断続的に延びる。断面形は皿状と推定され、底面には鋤先状の工具と思われる痕跡が残存していた。

規 模 検出長で、長さ22.74m×幅0.31m×深さ0.12mを測る。

主軸方位 東壁でN-35°-Eを測り、児玉飛行場の区画と軸が近似する。

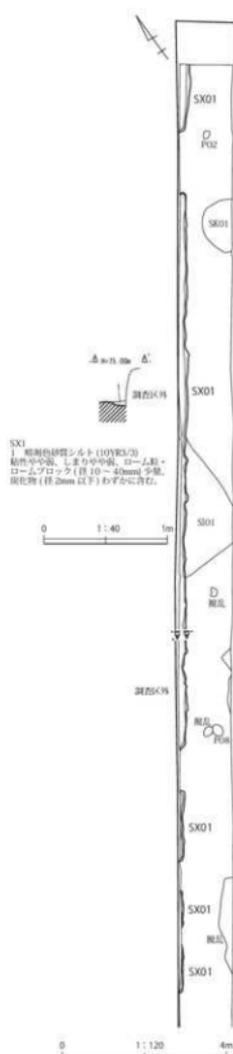
遺 物 出土せず。

時 期 主軸方位や遺構形態、工具痕などから近現代の畑である可能性が考えられる。

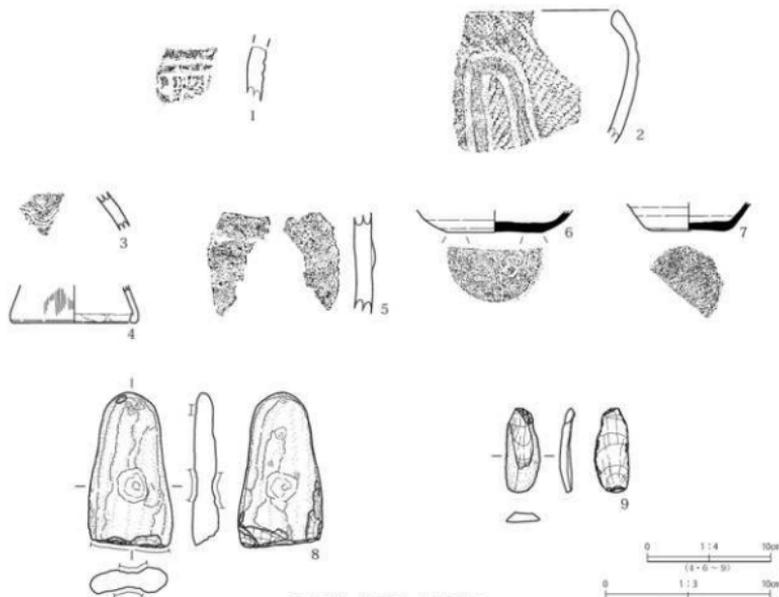
第5節 遺構外出土遺物

掘乱や倒木痕から出土した遺物を遺構外出土遺物として図示する。縄文土器・弥生土器・土師器・埴輪・須恵器・石器が出土している(第55図、第22表、図版20)。1・2は縄文土器の深鉢である。1が勝坂式で、2が加曽利EⅣ式である。3は弥生土器で、甕の胴部破片である。4条1単位の櫛歯状工具による波状文が2単位施されている。4は土師器で、S字状口縁台付甕の台部破片である。外面はハケメ調整がされており、内面は端部を折り返している。5は埴輪で、形象埴輪と考えられる。扁平化した突帯を貼り付けており、櫛歯状工具による条線を施す。6・7は須恵器坏の底部である。いずれも底部回転糸切りを行っているが、7は底部周縁に回転ヘラケズリを施している。8・9は石器で、8が凹石・敲石、9が使用痕のある剥片である。石材は8が結晶片岩で、9は安山岩が用いられている。

縄文土器は、いずれも遺構が検出されなかったA区からの出土である。弥生土器は、将監塚遺跡周辺であり確認されない遺物であり、埴輪は周囲に古墳がないことから、二次的に運ばれてきた可能性や埋没古墳が存在する可能性を示す。なお、第3次調査では円筒埴輪が、第1次調査地点に隣接する古井戸遺跡では、馬形埴輪の頭部が出土している。



第54図 第1号性格不明遺構



第55図 遺構外 出土遺物

第22表 遺構外 出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	器種	口径 器高 底径 (cm)	胎土	構成	色調	残存部位	文様・手法の特徴	備考
1	遺構外	縄文土器	深鉢	(3.3)	鉄線石英・長石・内閉石・ 銅雲母・黒色砂粒	良好	内面：7.5YR6/6 橙 外面：2.5YR6/6 橙	製削 破片	器面に18平行沈線と連続的凹文を施す。	標取2～3式段階
2	遺構外	縄文土器	深鉢	(8.1)	鉄線石英・内閉石・ 銅雲母・白色砂粒・ 赤色砂粒・黒色砂粒	良好	内面：2.5YR5/4 に濃い赤褐 外面：5YR5/4 に濃い赤褐	口縁部～ 胴部 破片	口縁部は縦、横文、胴部は沈線による逆り字 状の文様を施し、LR 縦文を充填する。	加賀利E N式段階
3	遺構外	弥生土器	蓋	(2.4)	鉄線石英・内閉石・ 銅雲母・細礫	良好	内面：2.5YR5/6 明赤褐 外面：2.5YR6/6 橙	製削 破片	内面：マメツ。 外面：磨製状況による波状文。	
4	遺構外	土器類	S字状 口縁付 付笥	(3.1) (10.6)	鉄線石英・内閉石・ 白色砂粒・赤色砂粒	良好	内・外面：10YR6/2 灰黄褐	台座 破片	内面：内部ナデ、縁部微凸押圧。 外面：左部ハケム。	
5	遺構外	埴輪	形象 埴輪	(6.2)	鉄線石英・長石・内閉 石・チャート・赤色砂粒 黒色砂粒	良好	内面：2.5YR5/6 明赤褐 外面：7.5YR6/4 に濃い橙	破片	内面：ナデ。 外面：突帯・磨製状況による平行沈線。	

No.	出土位置	種類	器種	口径 器高 内底径 (cm)	胎土	構成	色調	残存部位	手法の特徴	産地	備考
6	遺構外	須恵焼	杯	(1.8) (7.6) (9.3)	鉄線石英・長石・細礫・ 海綿状針	還元	内・外面：10YR7/1 灰白	底部～ 底部 1/2	右回転口ウロ成形。 内面：底部口ウロナデ。 外面：底部口ウロナデ。底部右回転糸 切り後、筒縁部右回転ヘラケズリ。	南比奈	
7	遺構外	須恵焼	杯	(2.3) (6.4) (6.7)	鉄線石英・長石・ 黒色砂粒	還元	内面：10YR6/1 純灰 外面：10YR7/3 に濃い黄橙	底部 1/2	右回転口ウロ成形。 内面：底部口ウロナデ。 外面：底部口ウロナデ。筒縁部ヘラケズ リ。底部右回転糸切り後、筒縁部右 回転ヘラケズリ。	兼金子か	

No.	出土位置	種類	器種	備考							
8	遺構外	石器	凹石・崩石	黏土片岩製	高さ 12.7cm	幅 6.6cm	厚み 2.3cm	重量 208.1g	下部欠損後、横断面を使用	定形	
9	遺構外	石器	使用痕のある破片	安山岩製	高さ 6.9cm	幅 2.8cm	厚み 1.2cm	重量 19.3g	定形		

第V章 自然科学分析

竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）

第1節 はじめに

本庄市共栄に所在する将監塚遺跡は、本庄台地に立地する縄文時代中期の環状集落の一部である。遺構より採取した土について、蛍光X線分析によるリン・カルシウム分析を行い、遺構内に骨が存在した可能性を検討した。

第2節 試料と方法

分析対象となる試料は、第9号土坑の底面に敷かれた深鉢大形破片の直下の堆積土（分析No.1）と、第2号埋設土器内の覆土（分析No.2）の、計2点である（第23表）。時期は、加曽利EⅢ式段階とみられている。

第23表 分析対象試料

分析No.	出土遺構	土器の時期	備考
1	第9号土坑	加曽利EⅢ式段階	加曽利EⅢ式段階の竪穴建物を切って構築。遺構底面で深鉢土器が大形破片ごとに敷かれた状態で出土。土器直下の堆積土を採取。
2	第2号埋設土器	加曽利EⅢ式段階	遺物包含層を掘り込んで構築。土器内の覆土を採取。

分析は、藤根ほか（2008）の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析により、リン、カルシウムを多く含む箇所を面的に検出し、直接測定できるという利点がある。測定には、乾燥後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20t・1分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-9000を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 μ Aのロジウム（Rh）ターゲット、キャピラリ径が100 μ mまたは15 μ m、検出器はSDD検出器で、検出可能元素は炭素（C）～アメリシウム（Am）である。また、試料ステージを走査させながら測定して元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析が可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン（P）のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1000 μ A、キャピラリ径100 μ m、パルス処理時間Process3、ピクセルタイム30ms、20.992mm四方の範囲をピクセル数256 \times 256pixで、ポイント分析では50kV、管電流自動設定、キャピラリ径100 μ m、測定時間100s、パルス処理時間Process5に設定した。定量計算は、ナトリウム（Na₂O）、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al₂O₃）、ケイ素（SiO₂）、リン（P₂O₅）、硫黄（SO₃）、カリウム（K₂O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO₂）、マンガン（MnO）、鉄（Fe₂O₃）、ルビジウム（Rb₂O）、ストロンチウム（SrO）、イットリウム（Y₂O₃）、ジルコニウム（ZrO₂）の15元素について行った。値は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で算出された半定量値である。

第24表 半定量分析結果 (mass%)

No.	ポイント	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SnO	Y ₂ O ₃	ZnO
1	a	0.33	2.39	27.60	52.06	0.74	0.21	2.32	1.72	1.58	0.22	10.78	0.01	0.02	0.01	0.02
	b	0.36	1.88	26.00	56.38	1.08	0.24	1.61	1.52	1.15	0.16	9.54	0.01	0.02	0.01	0.03
	c	0.27	1.03	19.66	43.38	1.31	0.12	0.95	1.23	13.32	0.17	18.47	0.01	0.01	0.01	0.04
	d	0.11	2.74	23.31	57.41	0.94	0.23	1.61	4.47	1.46	0.08	7.61	0.01	0.01	0.01	0.00
	e	0.09	2.28	28.05	49.66	0.88	0.27	2.52	1.28	1.54	0.10	13.27	0.01	0.02	0.01	0.02
	曲	0.52	1.82	27.12	53.65	0.77	0.25	1.82	2.20	1.36	0.15	10.29	0.01	0.02	0.00	0.02
2	a	0.36	0.94	16.60	62.53	1.66	0.11	0.59	2.48	0.65	0.36	13.63	0.01	0.02	0.00	0.02
	b	0.42	1.14	23.15	52.14	5.35	0.10	1.49	6.20	1.12	0.07	8.77	0.01	0.03	0.01	0.02
	c	0.89	1.47	29.16	52.14	0.34	0.05	4.12	1.62	1.07	0.05	9.01	0.01	0.05	0.00	0.02
	d	0.41	1.32	26.27	51.97	0.88	0.19	0.82	3.31	1.33	0.08	13.34	0.01	0.05	0.01	0.02
	e	0.22	0.85	13.08	44.57	0.38	0.13	0.31	16.51	2.42	0.37	15.11	0.01	0.01	0.01	0.01
	曲	0.56	1.29	25.44	56.09	0.65	0.15	0.94	3.29	1.19	0.14	10.21	0.01	0.03	0.00	0.02

第3節 結果および考察

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各5ヶ所の位置を示した図を第56図に、ポイント分析およびマッピング範囲全体の分析結果より酸化物の形で表した各元素の半定量値を第24表に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを正規化した。

ヒトを含む動物の骨や歯は、ハイドロキシアパタイト $\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3\text{OH}$ が主成分であり、すなわち蛍光X線分析ではリン(P)とカルシウム(Ca)がともに高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウムは鉱物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、炭化材なども蛍光X線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムのみの検出では骨由来であるか骨以外のもの由来であるかを判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には骨が存在していたが、埋没中に分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない場合や、骨からピビアナイト $\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ が析出しているケースのように、骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという場合もある。なお、骨や歯以外でリン、カルシウムがともに極めて多く含まれる物質として、尿の析出物がある。また、植物灰などもカルシウムとともにリンが多少含まれる。そのため、遺構の性格については、他の自然科学分析の結果、および遺物の出土状況や類別などの考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

以下、遺構ごとに結果をまとめる。

第9号土坑の堆積土(分析No.1)は、リン(P_2O_5)が0.74～1.31%、カルシウム(CaO)が1.23～4.47%の値を示した。リンとカルシウムの含有量がともに1%を超える、やや多い箇所が複数認められた。これらは、骨や歯に由来する可能性がある。

第2号埋設土器の覆土(分析No.2)は、リン(P_2O_5)が0.34～5.35%、カルシウム(CaO)が1.62～16.51%の値を示した。こちらもリンとカルシウムの含有量がともに多い箇所が認められた。これらは、骨や歯に由来する可能性がある。

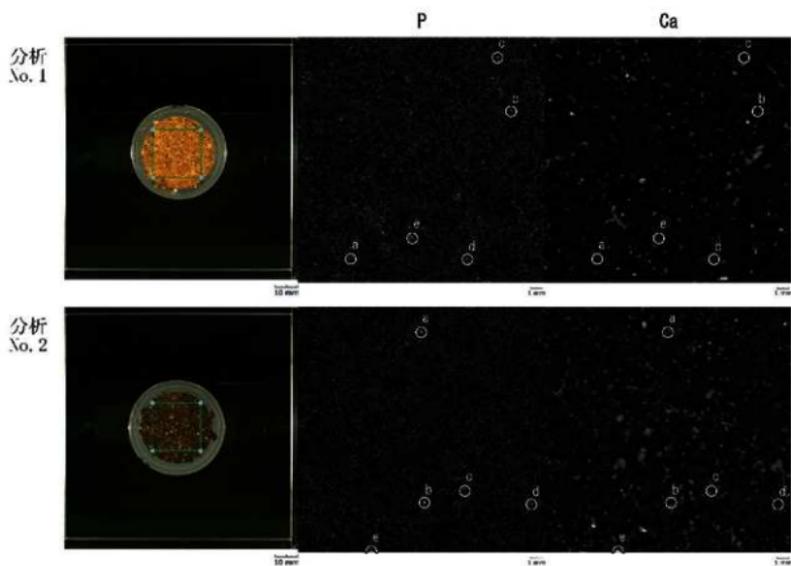
ただし、発掘調査担当者によると、遺物包含層にはローム層の露出している場所よりもハエが多く寄ってきていたとのことであり、遺物包含層自体が有機質をやや多く含み、リンもやや多く含まれていた可能性がある。

第4節 おわりに

将監塚遺跡の土坑および埋設土器より採取した土について、蛍光X線分析によるリン・カルシウム分析を行った結果、両遺構からリンとカルシウムがともに多い箇所が検出された。これらは骨や歯に由来する可能性がある。遺構の性格については、他の自然科学分析の結果および遺物の出土状況や類別など、考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

参考・引用文献

藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析，日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，108-1



第56図 プレス試料およびリン (P) とカルシウム (Ca) の元素

第Ⅵ章 総括

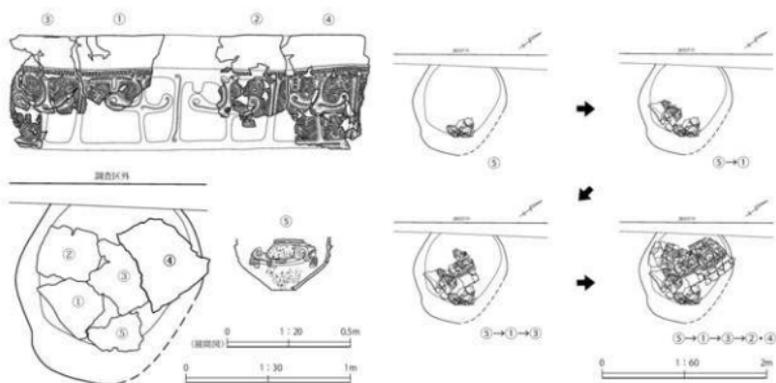
第1節 縄文時代

本次調査では、縄文時代中期後葉を主体とした竪穴建物1軒(SI05)、土坑3基(SK04・06・09)、埋設土器2基(SK08・10)、小穴3基(P27・29・30)、遺物包含層(VI・VII層)が検出され、遺物は中期中葉～後期まで確認できた。特に、土器破片が底面に敷かれた土坑(SK09)と第1次調査における環状集落の北東限が確認できた事は大きな成果である。

土器が底面に敷かれた土坑について

土坑(SK09)は平面図が円形、断面形が箱状を呈する、底面がやや平坦な土坑である。底面からは、深鉢の3/5にあたる大形破片と浅鉢の1/5にあたる大形破片が遺構底面の約7割を占めた状態で出土している。大形破片は深鉢分4片(①～④)と浅鉢分1片(⑤)の計5破片が、細かく割れた状態で出土した。大形破片は文様部を上面にし、各破片が隣接、もしくは重複した状態で底面から検出された。これは、大形破片の状態で底面に配置されたことを示す。重複関係から、⑤→①→③→②・④という順で配置されたことがわかる(第57図)。加えて、大形破片同士が極めて隣接することから、同時に破砕したものではなく、一個体ずつ破砕されたと考えられる。このことを踏まえると、大形破片は一片ずつ破砕し、敷いたものと推定される。

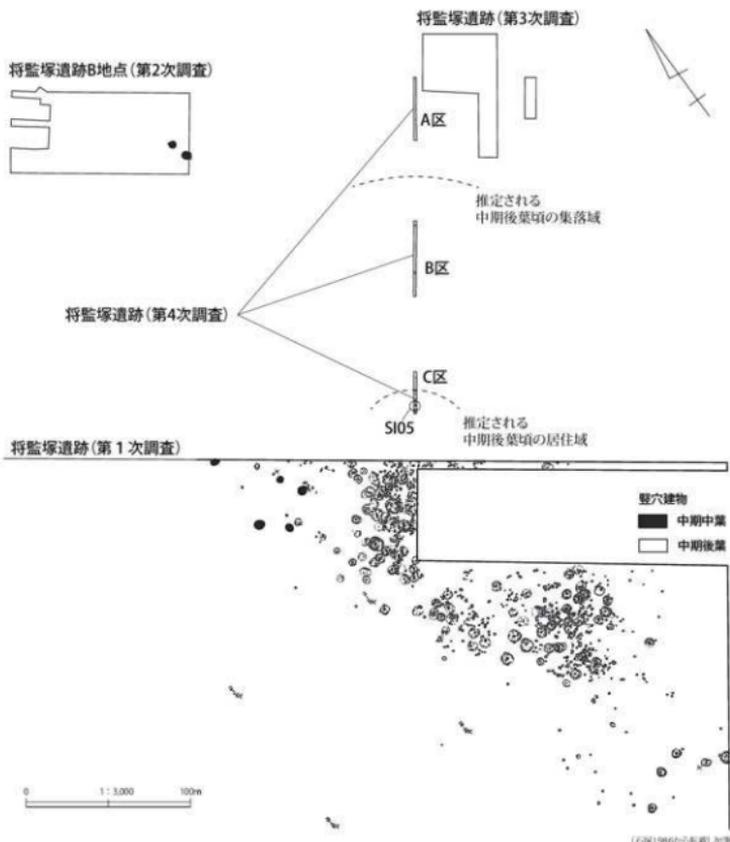
土器を敷いた遺構としては、土器敷きの炉などがある。しかし、本遺構は単独の土坑であることや、被熱の痕跡や、焼土の検出が認められないことから、炉である可能性は低く、性格や目的は不明である。また、遺構の形状や深さ、土器の配置・破砕を考慮すると、埋葬施設である可能性も考えられるため、大形破片直下の土壌試料によるリン・カルシウム分析を前章で行っている。詳細は前章を参照されたいが、その結果から埋葬に伴う遺構である可能性が高いものの、断定するには至らなかった。なお、将監塚遺跡第1次調査や、隣接する古井戸遺跡では、同様の遺構が確認できなかった。



第57図 位置関係と配置順

将監塚遺跡における本次調査の位置づけ

将監塚遺跡は、第1次調査にて縄文時代中期中葉の竪穴建物と中期後葉における環状集落の一部が調査されており（石塚 1986）、第2次調査でも中期中葉の竪穴建物が発出されている。一方、第3次調査では該期の遺構が発出されなかった。本次調査では、A区が第3次調査の西に、C区が第1次調査から北東方向に約30mの位置に隣接し、B・C区で中期後葉の遺構が発出されている。竪穴建物はC区南西端のローム台地縁辺部で発出されており、土坑や埋設土器、小穴がB区からC区にかけて発出された。竪穴建物（SI05）は、第1次調査で確認された中期後葉の環状集落から約30mの距離に位置するため、同集落における居住域の北東限であると推定される。竪穴建物以外の土坑や埋設土器、小穴はB区北東端まで分布が確認できることから、該期の集落外縁はおそらくB区以北～A区以南まで広がると考えられる（第58図）。



第58図 縄文時代における将監塚遺跡

(石塚1986の複製加筆)

第2節 古代

本次調査では、竪穴建物4軒(SI01～04)、土坑5基(SK01～03・05・07)、溝7条(SD02・05～10)、小穴26基(P01～26)が検出され、土師器や須恵器、墨書土器などに加え、刀子や鎌などの製品も出土した。特に、本遺跡の過去調査では未確認であった6世紀末～7世紀前半に帰属すると考えられる遺構と、器面に刺突を施す土師器環が確認できたことは大きな成果である。

検出された遺構と出土土器について

将監塚遺跡では、縄文時代の後、弥生時代～古墳時代の集落が確認されていない。再び本遺跡で集落が形成されるのは7世紀後葉からとされていたが(赤熊1988)、本次調査において6世紀末～7世紀前半頃の遺構・遺物が新たに確認され、集落の形成時期が半世紀以上遡ることがわかった。以下では、本次調査で検出された古代の遺構と出土した土器群をまとめ、時系列を整理する(第59図)。

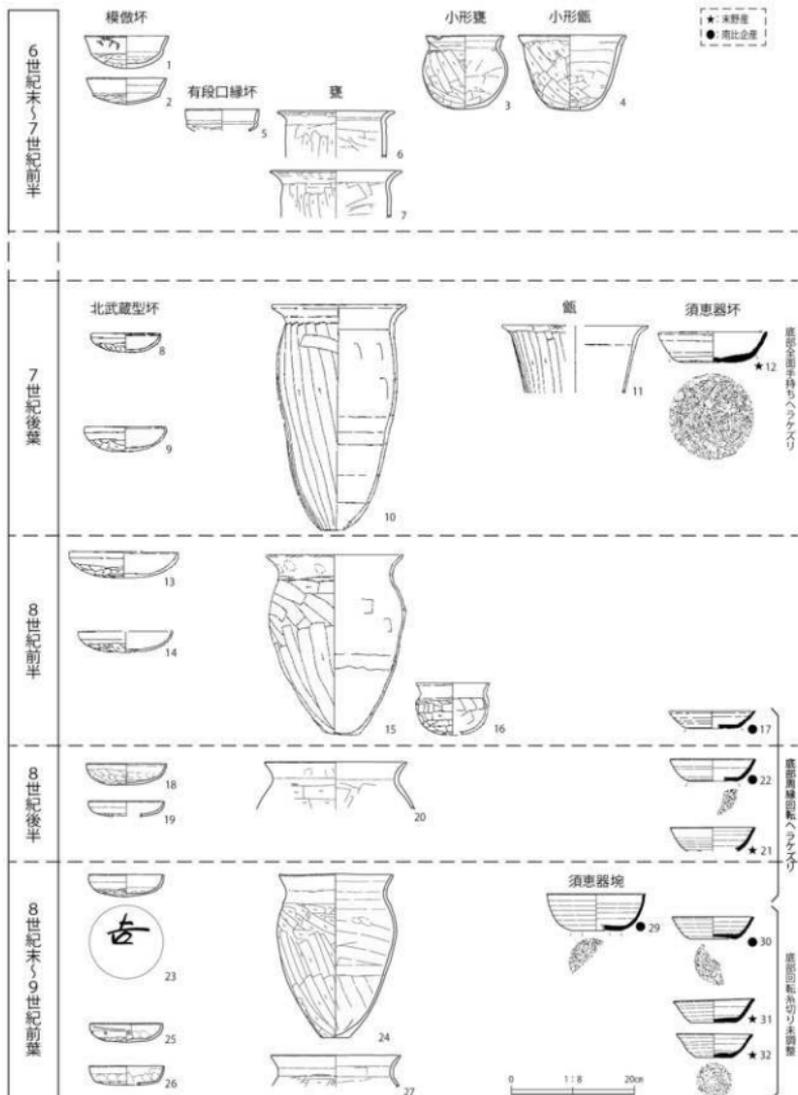
6世紀末～7世紀前半までに構築される遺構はSI02・SD02・08-2である。SI02から出土した模倣杯(第59図1)は口径13cmと大きいことから、SD08-2出土の口径11cmを測る有段口縁杯(第59図5)よりも古相に位置づけられる。また、SD02・08-2から出土した甕は器形・調整から、7世紀前半頃と推定される。続く7世紀中葉については、遺構・遺物ともに本遺跡では報告例がなく編年的に隔たりがあることに注意される。

7世紀後葉～8世紀前半については、本次調査では遺構・遺物ともに確認できなかった。第1次調査で出土した7世紀後葉～8世紀前半の土器群を、図中に参考として掲載している(第59図8～17)。

8世紀後半になるとSD08-1・10が構築される。SD08から出土していた土師器環(第59図18)はやや丸底を呈しており、体部・口縁部は内湾していることから、8世紀後半頃に位置づけられる。須恵器環(第59図22)は胎土に海綿骨針が含まれており、南比企産に比定される個体である。南比企産跡群における底部周縁の回転ヘラケズリ調整は、8世紀末頃までに消滅していくとの見解があり(江口1997)、9世紀までは下らないと考えられる。

8世紀末～9世紀前葉では、SI01・03・04が構築される。土師器環のほとんどは丸底気味ではあるが、体部の内湾が弱くなっており、27はほとんど平底を呈している。また、土師器甕もコの字状口縁になる前段階の形状を呈しており、9世紀後半までは下らないと考えられる。須恵器環は、体部がやや内湾しながら外傾して、口縁部が外反する器形を呈しており、底部の切り離し技法が回転系切り未調整でほとんどを占めている。SI03出土の無台の埴(第59図30)は、南比企産跡群で8世紀中葉～9世紀前半頃に多く生産されるもので(江口1997)、器形と底部周縁の回転ヘラケズリ調整から8世紀末頃と推定される。

以上、本次調査においては6世紀末～7世紀前半・8世紀後半・8世紀末～9世紀前葉と、断続的に古代集落の様相を垣間見ることができた。しかし、遺跡全体では、7世紀中葉頃が空白期となっていることも注意される。今後の調査によって資料の増加を期待したい。



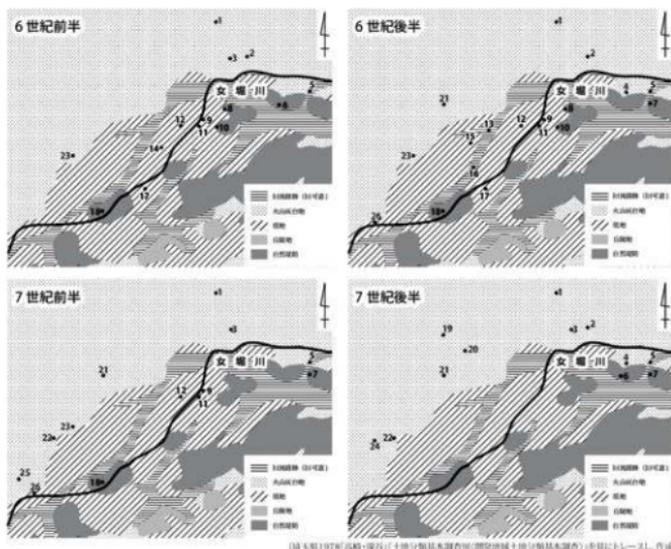
1～4：S102（第31図1～4）、5・6：SD08（第42図1・4）、7：SD02（第37図1）、8～12：第1次調査H-160、13～14・16・17：同H-114、15：同H-113、18～21：SD08（第42図2・3・5・6）、22：SD10（第45図1）、23・24：S101（第30図1・2）、25～29・31・32：S103（第33図7・4・18・31・27・26）、30：S104（第35図2）

第59図 将監塚遺跡第4次調査出土の土器群

将監塚遺跡周辺の6～7世紀における様相

将監塚遺跡周辺においても7世紀に稀属する遺跡が多数認められる。女堀川中流域における6世紀～7世紀にかけての26遺跡を対象に立地変遷を概観すると、即往の研究でも確認されているように(利根川1982、鈴木1984、井上1988、恋河内1989)、6世紀までの女堀川流域の自然堤防を基盤とした遺跡立地が、7世紀になるとより平坦で広い台地上へ進出する過程が認められる(第60図)。6世紀代では女堀川によって形成された自然堤防上や微高地上、あるいは低地に遺跡が営まれるが、7世紀に入ると集落は縮小・消滅し、女堀川から離れた本庄台地上に遺跡が増加し始める。7世紀後半になると、自然堤防上の遺跡分布はさらに希薄となり、台地上の遺跡が増加していく。その立地変遷の中で本遺跡は、いち早く本庄台地上に立地し、以降10世紀まで継続して集落が営まれたと考えられる。

以上の立地変遷は、さまざまな要因が考えられており、古墳群造営に伴う在地首長層主導の移動や丘陵部の富地開墾(鈴木1984、1993)、国家主導の再編による現象であると指摘されている(井上1988)。集落の移動における背景として、前述した計画的移動や開発も考えられるが、交通や自然災害に起因することも考慮しなければならない。交通は河川交通と陸上交通に分かれるが、それらを表す事例は認められていない。しかし、7世紀の女堀川から離れた位置に遺跡が出現する現象は、河川交通に依拠しない集落である可能性を示すと思われる。また、本次調査のC区で認められたV層や、SD08-1の覆土中にみられる洪水と思われる痕跡からは、該期に関わらず、自然災害が発生していたと予想される。いずれも憶測の域を出るものではないため、今後の資料増加に期待したい。



(埼玉県1978年資料「埼玉」)土地分相基本調査(河内)河内地域土地分相基本調査)を基にトレスし、作成

- 1 夏目遺跡 2 南大通り橋内遺跡 3 社具路遺跡 4 北堀久下遺跡 5 久下遺跡 6 七色塚遺跡 7 久下前遺跡 8 四方田遺跡 9 川越田遺跡 10 後張遺跡
11 梅沢遺跡 12 今井川越田遺跡 13 藤原遺跡 14 杉島遺跡 15 堀内遺跡 16 左口遺跡 17 共和小学校校前の遺跡 18 辻堂・南街道遺跡 19 横太神南遺跡
20 今井遺跡 21 将監塚遺跡 22 比乃内遺跡 23 等倉遺跡 24 真下塚東遺跡 25 八咫神南遺跡 26 安乃町遺跡

第60図 6～7世紀における立地変遷

竹管状工具痕のある土師器環について

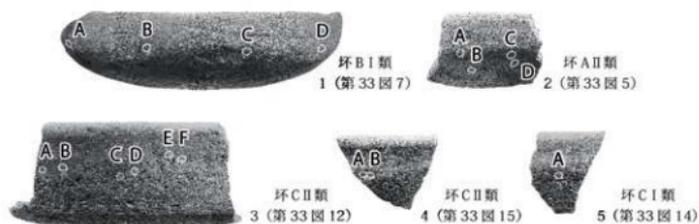
竪穴建物（SI03）からは、竹管状工具による刺突を体部に施す土器（以下、刺突土器と呼ぶ）が5点出土している。周辺の遺跡では類例が無く、規格的な土師器の中ではきわめて異質な様相を呈する土器である。

刺突土器は全て土師器の環であり、胎土が近似する。器形は、底部が平底を呈し、底部から体部にかけて強く屈曲して短く直線的に立ち上がるもの（環A類）、底部がやや丸み帯びた平底を呈し、体部と口縁部が内湾しながら立ち上がるもの（環B類）、底部は平底で、体部と口縁部が外傾し、直線的に立ち上がりながら、わずかに外反するもの（環C類）に分けられる（第61図）。環C類には暗文が施されており、刺突文は暗文の有無に関わりなく施文されることがわかる。刺突文は1つ1単位（Ⅰ類）と2つ1単位（Ⅱ類）に分けられ、施される部位はいずれも口縁部下端～体部である（第62図）。施文手順は様々で、ヨコナデ後に施されるもの（第62図1・2・3）、ヘラケズリ調整前に施されるもの（第62図3）、ヘラケズリ調整後に施されるもの（第62図4・5）が認められる。刺突文の間隔は、環BⅠ類の1が約40°の間隔で、9ヶ所施されると推定される。一方で、環AⅡ類の2や、環CⅡ類の3は約15°～20°と狭い間隔で施されることから、多数の刺突文が巡ると思われる。また、竹管状工具の外径と内径の計測値からは、規格性が強くうかがえ、用いられた竹管状工具は同一である可能性がある。

以上、刺突土器の資料紹介とした。今後の調査から、さらなる類例が増えることを期待したい。



第61図 刺突土器の器形



刺突文計測値一覧

1	外径	内径	2	外径	内径	3	外径	内径	4	外径	内径	5	外径	内径
A	4.5	2.0	A	5.5	3.0	A	5.0	—	A	5.0	2.0	A	4.5	1.5
B	5.5	3.5	B	4.5	2.0	B	5.0	2.0	B	5.0	2.0			
C	5.0	2.0	C	4.5	2.0	C	4.5	—						
D	4.5	2.0	D	6.0	2.0	D	4.5	2.0						
						E	5.0	2.0						
						F	5.0	2.0						

第62図 刺突文の位置関係と計測値

第3節 近代

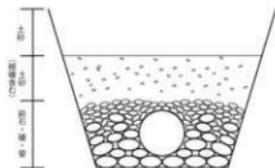
児玉飛行場に伴う暗渠排水溝と推定される溝が5条検出された。ここでは、飛行場設計に関する資料(廣谷1942～1944)を基に、児玉飛行場の暗渠施設を概観する。

暗渠は第1次調査で19条、第2次調査で3条、第3次調査で2条検出されており、本次調査でも5条(SD01・03・04・11・12)確認されている。本次調査で検出された暗渠は直線的で、断面形態は逆台形状(SD01・03・04)と葉研状(SD11・12)がある。埋土には砂礫が含まれるもの(SD01・03・04・11)と含まないもの(SD12)があり、コンクリート製のヒューム管が布設されているものもある(SD03)。なお、SD01・04・11では、礫等が攪拌されていたことから、戦後にヒューム管を抜き取られた状態と推定される。

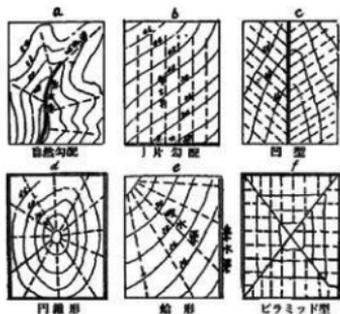
上記の暗渠は、児玉飛行場の離着陸区域内において、北東方向に緩く傾斜する地形に布設されている。滑走路上の水はけが不良なことから、地上水の排水目的で作られた。暗渠の構造は、廣谷(1943f)によると、簡易暗渠が用いられている。地上水の排水を目的とする簡易暗渠は、底面にコンクリートを配置して基礎とし、上面に有孔管を配置する。埋土は碎石・玉石・砂・土砂の順に粒径が大きい物から充填し、埋土上層は肥厚させないように埋める。SD03では、コンクリート基礎の有無や埋設方法が異なっており(第63図)、これは戦時下における資材不足や急進的な建設に起因するものと思われる。

第64図は、地形の自然勾配を考慮した暗渠の配置形式である(廣谷1943f)。児玉飛行場における暗渠の配置は、第1次調査の全景写真から確認でき(第65図)、北東方向へ直線的に延びる幹線と、緩いくの字状に屈折する支線からなり、葉脈状に広がっている。このことから、凹型を採用していることがわかる。凹型とは、谷部に幹線を配し、両脇に支線を布設することで崖からの勾配を利用して排水する形式である。

以上のことから、児玉飛行場に採用された暗渠は、廣谷1942～1944を参照すると、簡易暗渠を凹型に配置し、地形に合わせて東方向に排水させていることがわかった。近年、戦争遺跡については調査事例が増加し、文書などで残されていない設計などを明確にした事例が多くある。今回の暗渠施設も児玉飛行場の様相を知る一助となれば幸いである。



第63図 SD03の概念図



第64図 暗渠排水の形式



第65図 第1次調査にみられる暗渠形式

第六章 総括

参考・引用文献（報告書）

- 増田 逸朗・立石 盛阿 他 1982 『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集
- 増田 逸朗・立石 盛阿 他 1983 『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 鈴木 徳雄 1984 『阿知廻道跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書 第4集
- 富田 和夫・赤熊 浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井道跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第46集
- 石橋 柱一 1985 『夏目道跡発掘調査報告書2』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集
- 鈴木 徳雄 1985 『橋ノ入道跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書 第5集
- 石塚 和則 1986 『将監塚一縄文時代一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第63集
- 井上 高明 1986 『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集
- 増田 一裕 1987 『南大通り線内道跡発掘調査報告書1』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第9集 第1分冊
- 赤熊 浩一・岩瀬 謙 他 1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集
- 宮井 英一 1989 『古井戸一縄文時代一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第75集
- 増田 一裕 1989 『四方田・後張道跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第14集
- 鈴木 徳雄 1989 『真下境東道跡』 児玉町文化財調査報告書 第9集
- 恋河内 昭彦 1989 『共和小学校庭道跡』 児玉町文化財調査報告書 第10集
- 篠崎 謙 1989 『息掛原・楡下道跡Ⅰ』 息掛原・楡下道跡調査会報告書 第1集
- 増田 一裕 1989 『南大通り線内道跡発掘調査報告書2』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第9集 第2分冊
- 篠崎 謙 1990 『息掛原・楡下道跡Ⅱ』 息掛原・楡下道跡調査会報告書 第2集
- 篠崎 謙 1991 『息掛原・楡下道跡Ⅲ』 息掛原・楡下道跡調査会報告書 第3集
- 鈴木 徳雄 1991 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里道跡』 児玉町文化財調査報告書 第15集
- 増田 一裕 1991 『南大通り線内道跡発掘調査報告書3』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第9集 第3分冊
- 篠崎 謙 1992 『息掛原・楡下道跡Ⅳ』 息掛原・楡下道跡調査会報告書 第4集
- 長谷川 勇 他 1994 『将監塚道跡B地点発掘調査報告書』 本庄市道跡調査会報告書 第4集
- 徳山 寿樹 1994 『平塚・左口・児玉条里道跡』 児玉町文化財調査報告書 第16集
- 磯崎 一 1995 『今井川越田道跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第177集
- 徳山 寿樹 1995 『鮎向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里道跡』 児玉町文化財調査報告書 第18集
- 篠崎 謙 1995 『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南道跡』 神川町教育委員会文化財調査報告書 第12集
- 恋河内 昭彦 1995 『南共和・新宮道跡』 児玉町道跡調査会報告書第6・7集
- 徳山 寿樹 1996 『藤塚道跡-B2地点の調査一』 児玉町文化財調査報告書第22集
- 恋河内 昭彦 1996 『辻堂道跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書 第19集
- 恋河内 昭彦 1996 『辻堂Ⅱ・南街道・宮田道跡』 児玉町文化財調査報告書第20集
- 鈴木 徳雄 1997 『将監塚東・平塚・藤塚道跡』 児玉町文化財調査報告書 第26集
- 岩田 明広 1998 『今井条里道跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第192集
- 鈴木 徳雄・板井 和成 2000 『児玉条里道跡一九郷地区一』 児玉町文化財調査報告書 第34集
- 和久 裕昭・有山 任世 2004 『社員路道跡-第4地点一』 本庄市道跡調査会報告書 第7集
- 和久 裕昭 2004 『今井原屋敷道跡-第2地点一』 本庄市道跡調査会報告書 第9集
- 和久 裕昭・有山 任世 2004 『社員路道跡-第13地点一』 本庄市道跡調査会報告書 第10集
- 有山 任世・山本 千春 他 2006 『今井原屋敷道跡-第4地点一』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第4集
- 恋河内 昭彦 2007 『鯉川坊田道跡』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第15集
- 恋河内 昭彦 2008 『塚島道跡Ⅱ-F地点の調査一』 本庄市道跡調査会報告書 第22集
- 恋河内 昭彦 2008 『塚島道跡Ⅲ-E地点の調査一』 本庄市道跡調査会報告書 第23集
- 高橋 清文・石丸 教史 2009 『将監塚道跡-第3次調査一』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第16集
- 恋河内 昭彦・野野 善行 2010 『北堀久下塚北道跡Ⅱ・久下東道跡Ⅳ・久下前道跡Ⅱ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第19集

- 高林真人 2011 『後張V-E地点の調査-』 本市市道跡調査報告書 第40集
- 恋河内昭彦 2012 『塚高道跡IV』 本市市道跡調査報告書 第33集
- 恋河内昭彦 2012 『久下前道跡IV (D1・E1地点)・久下東道跡V (F1地点)』 本市市埋蔵文化財調査報告書 第28集
- 大熊季広 2013 『左口道跡II・本庄飯玉道跡・北堀新田道跡III』 本市市埋蔵文化財調査報告書 第34集
- 松本完 2013 『久下前道跡V (F1地点)・久下東道跡VI (G1地点)』 本市市埋蔵文化財調査報告書 第32集
- 恋河内昭彦・的野善行 2014 『七色塚道跡III・北堀久下塚北道跡III・久下東道跡VII・有勝寺北裏道跡IV』 本市市埋蔵文化財調査報告書 第37集
- 恋河内昭彦 2019 『久下東道跡X (G2・H地点)』 本市市埋蔵文化財調査報告書 第57集
- 大熊季広・福岡佑斗 2021 『塚高道跡V・徳万谷附道跡』 本市市埋蔵文化財調査報告書 第64集
- 参考・引用文献(論文)
- 廣谷仁宏 1942 『航空港の建設』 『土木満州』 第2巻第6号 11・12月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1943a 『航空港の建設(其の2)』 『土木満州』 第3巻第1号 1・2月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1943b 『航空港の建設(其の3)』 『土木満州』 第3巻第2号 3・4月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1943c 『航空港の建設(其の4)』 『土木満州』 第3巻第3号 5・6月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1943d 『航空港の建設(其の5)』 『土木満州』 第3巻第4号 7・8月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1943e 『航空港の建設(其の6)』 『土木満州』 第3巻第5号 9・10月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1943f 『航空港の建設(其の7)』 『土木満州』 第3巻第6号 11・12月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1944a 『航空港の建設(其の8)』 『土木満州』 第4巻第2号 3・4月号 満州土木学会
- 廣谷仁宏 1944b 『航空港の建設(其の9)』 『土木満州』 第4巻第3号 5・12月号 満州土木学会
- 神奈川考古同人会 1980 『(シンポジウム'80) 縄文時代中後半の諸問題とくに加曾利E式と曾利F式の関係について-』 『神奈川考古』 第10号
- 鈴木徳雄 1983 『古代北武蔵における土師器製作手法の画期』 『土曜考古』 第7号 土曜考古学会
- 坂口一・三浦京子 1986 『奈良・平安時代の土師の編年-住居の重複と共存関係による土器型式相列の検討-』 『群馬県史研究』 第24号 群馬県史編さん委員会
- 井上尚明 1988 『七世紀における集落の再編成とその背景』 『埼玉県史研究』 第20号 埼玉県
- 外山政子 1989 『群馬県地域の土師器について』 『研究紀要』 第6号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 江口桂 1997 『律令制変遷期の須恵器の系譜-埼玉県・東京都-』 『東国の須恵器-関東地方における歴史時代須恵器の系譜-』 古代生産研究会
- 東村山市史編さん委員会 2001 『東村山市史5 資料編 考古』
- 渡辺清志 2001 『埼玉県における縄文時代集落の諸様相』 『第1回研究会基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相』 縄文時代文化研究
- 石井寛 2001 『関東地方における集落変遷の画期と研究の現状』 『第1回研究会発表要旨 縄文時代集落研究の現段階』 縄文時代文化研究
- 谷口康浩 2001 『層状集落の空間構成』 『第1回研究会発表要旨 縄文時代集落研究の現段階』 縄文時代文化研究
- 酒井清治 2002 『古代関東の須恵器と瓦』 同成社
- 松岡正信 2003 『武蔵型農について-上野地域の生産と流通-』 『高崎市史研究』 第17号 高崎市市史編さん専門委員会
- 桑原正明 2015 『「児玉飛行場」を知るために-資料の充実とその利用-』 『研究紀要』 第13号 上里町立郷土資料館
- 桑原正明 2016 『「児玉飛行場」を知るために(2)-創設から開拓農地になるまで-』 『研究紀要』 第14号 上里町立郷土資料館

写真図版



本庄市マスコット

はにぽん



将監塚遺跡の位置（上が北）

国土地理院撮影の空中写真（2010年撮影）に加工



A区全景 完掘状況（北東から）



A区全景 完掘状況（南西から）

図版 2



B区全景 完掘状況（北東から）



B区全景 完掘状況（南西から）



C区全景 完掘状況（北東から）



C区全景 完掘状況（南西から）



第5号竪穴建物 完掘状況（西から）



第5号竪穴建物 土層 A-A' 断面（東から）



第5号竪穴建物 遺物出土状況 1（北から）



第5号竪穴建物 遺物出土状況 2（南から）



第5号竪穴建物 遺物出土状況 3（南から）



第5号竪穴建物 炉 完掘状況（西から）



第5号竪穴建物 炉 土層断面（南東から）



第5号竪穴建物 炉 被熱部断面（南東から）

図版 4



第4号土坑 完掘状況（北西から）



第4号土坑 遺物出土状況（南西から）



第6号土坑 完掘状況（南東から）



第6号土坑 遺物出土状況（南から）



第9号土坑 遺物出土状況（東から）



第9号土坑 完掘状況 (南東から)



第9号土坑 土層断面 (南東から)



第9号土坑 遺物取り上げ後状況 (東から)



第9号土坑 土層断面 (遺物下堆積状況) (東から)



第1号埋設土器 完掘状況 (北東から)



第1号埋設土器 掘り方 土層断面 (南西から)



第1号埋設土器 土層断面 (上半部) (南東から)



第1号埋設土器 土層断面 (下半部) (南東から)

図版 6



第2号埋設土器 完掘状況(北西から)



第2号埋設土器 掘り方 土層断面(北西から)



C区VI層土器集中(南東から)



C区深掘りトレンチ北端部 堆積状況(南から)



第1号竪穴建物 完掘状況(北から)



第1号竪穴建物 掘り方 完掘状況(北から)



第1号竪穴建物 遺物出土状況(南東から)



第1号竪穴建物 土層 A-A' 断面(南東から)



第2号竪穴建物 完掘状況 (南から)



第2号竪穴建物 掘り方完掘状況 (南から)



第2号竪穴建物 遺物出土状況 (南東から)



第3号竪穴建物 完掘状況 (南西から)



第3号竪穴建物 掘り方完掘状況 (南から)



第3号竪穴建物 土層 B-B' 断面 (北から)



第3号竪穴建物 土層 A-A' 断面 (東から)



第3号竪穴建物 焼土範囲 検出状況 (南西から)

図版 8



第4号竪穴建物 完掘状況（西から）



第4号竪穴建物 土層 A-A' 断面（南東から）



第1号土坑 完掘状況（北西から）



第2号土坑 完掘状況（北西から）



第2号土坑 土層 A-A' 断面（南西から）



第3号土坑 完掘状況（西から）



第5号土坑 土層断面（北西から）



第7号土坑 完掘状況（北西から）



第2号溝 完掘状況 (西から)



第2号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)



第5・6号溝 完掘状況 (東から)



第5・6号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)



第7号溝 完掘状況 (南東から)



第7号溝 土層 A-A' 断面 (南東から)



第8号溝 完掘状況 (西から)



第8号溝 土層 B-B' 断面 (東から)

図版 10



第9号溝 完掘状況 (西から)



第9号溝 土層 A・B断面 (北西から)



第10号溝 完掘状況 (西から)



小穴群 [B区中央部] 完掘状況 (西から)



第1号溝 土層断面 (北から)



第3号溝 土層 A-A'断面 (南東から)



第11号溝 土層 B-B'断面 (北西から)



第12号溝 土層 A-A'断面 (南東から)



第5号竖穴建物出土遺物



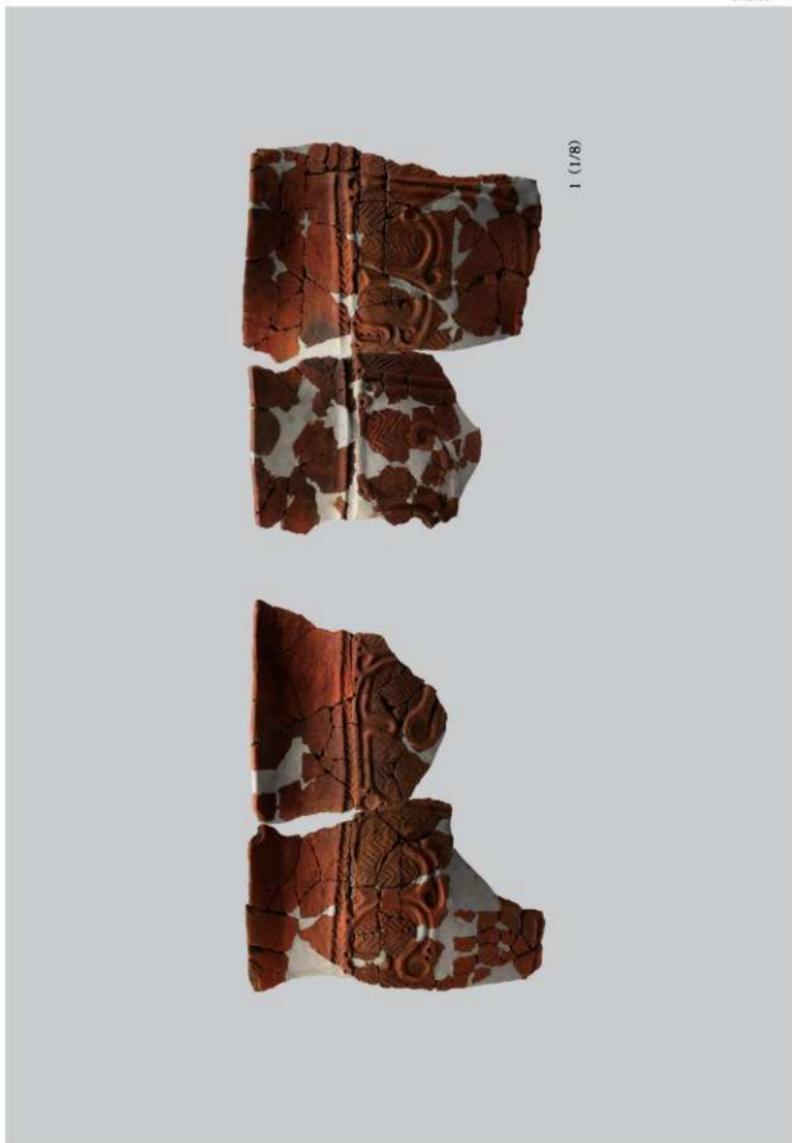
第 4 号土坑 出土遗物



第 6 号土坑 出土遗物



第 9 号土坑 出土遗物 (1)



1 (1/8)

第9号土坑出土遗物(2)



第1号埋設土器 出土遺物



第2号埋設土器 出土遺物



包含層Ⅵ層 出土遺物 (1)



包含層VI層 出土遺物 (2)



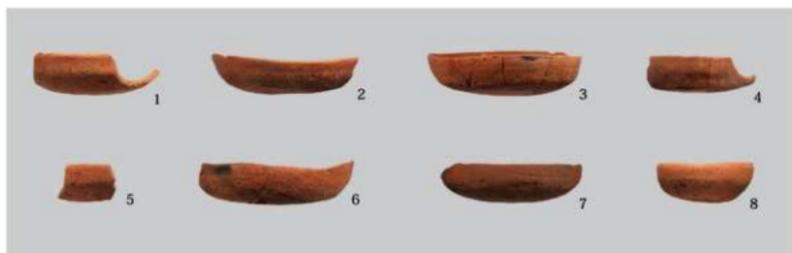
包含層Ⅶ層 出土遺物



第 1 号竖穴建物 出土遺物



第 2 号竖穴建物 出土遺物



第 3 号竖穴建物 出土遺物 (1)



第3号竖穴建物 出土遺物(2)



第 4 号竖穴建物 出土遺物



第 2 号溝 出土遺物



第 8 号溝 出土遺物



第 10 号溝 出土遺物



第 11 号溝 出土遺物



遺構外 出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	ショウゲンツカイセキ ーダイヨジジョウサー							
書名	特監塚遺跡 ー第4次調査ー							
副書名	市道第7557号線埋蔵文化財保存事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第75集							
シリーズ名	本市埋蔵文化財調査報告書							
編著者名	水野真那 植竹竜也 坂本勝一 竹原弘展							
編集機関	本市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	西暦2023年(令和5年)12月20日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
特監塚遺跡 第4次調査	本市共栄 116番地先	112119	53-108	36° 13' 18"	139° 08' 35"	2023.3.6 ～ 2023.4.19	140.3㎡	道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特監塚遺跡 第4次調査	集落	縄文	竪穴建物	1軒	縄文土器(深鉢・浅鉢・台形土器)	土器(打製石斧・石棒等)	中期中葉～後葉までの 遺物包含層や遺構底面 に土器を敷く土坑が検 出された。	
			土坑	3基				
	埋設土器	2基	土師器(環・小形甕・小形甕)	須恵器(環)	文字状の黒色付着物を もつ模倣環が認められ た。			
	小穴	3基						
	飛鳥	竪穴建物	1軒	土師器(環・甕・鉢・甕)	土師器(環・高台付環)	須恵器(環・高台付環・鉢)	竹管状工具による刺突 文を器面に施している 土師器環が出土した。	
溝	2条							
奈良～平安	小穴	1基	灰輪陶器(長頸甕)	焼成粘土塊	石製品(砥石)	鉄製品(刀子・鎌・釘)		
弥生	散布地	古墳 中世	土坑	3軒	弥生土器(甕形土器)	土師器・形象埴輪	瓦器・軟質陶器(内耳鍋)	
溝			5基	5条	25基			
飛行場	近代	溝	5条	磁器(急須蓋)				
要 約	本市の本庄台地に立地する遺跡で、時期は縄文・古代・近代が主体となる。縄文時代では中期後葉を主体とした集落の縁辺部にあたり、第1次調査で確認された環状集落の北東限と推定された。なお、大形の縄文土器破片が底面に敷かれた土坑(第9号土坑)が検出され、埋設施設の可能性を考慮し、リン・カルシウム分析を行った。古代では、飛鳥～平安時代までの遺構が認められており、特に過年度調査で未確認であった6世紀末～7世紀前葉に帰属する遺構と遺物が発見された。近代では、児玉飛行場(1944～1945)のものと思われる溝(暗渠)が検出されている。							

本庄市埋蔵文化財調査報告書第75集

将 監 塚 遺 跡

—第4次調査—

令和5年12月15日 印刷

令和5年12月20日 発行

発行／本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷／細谷印刷有限公司
群馬県伊勢崎市今泉町2-939-5